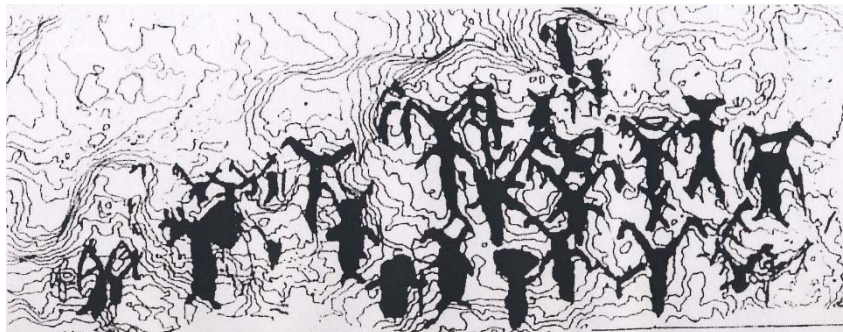


手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか



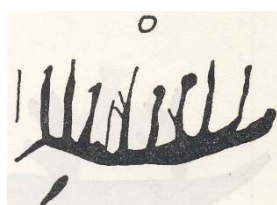
手宮洞窟陰刻画実測図 (小樽市教育委員会)



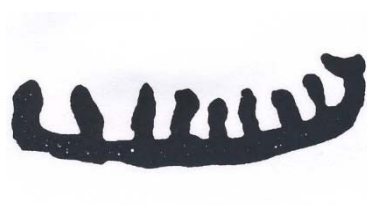
フゴッペ洞窟・四つ指のシャーマン



同・楽器を持つ有角人



フゴッペ洞窟の舟



シカチ・アリヤンの舟



盤亀台岩壁画の舟



線刻がライトアップされた黒い牝牛と馬の列・『世界遺産ラスコー展』より

はじめに

人類の歴史において壁画は、およそ3万2千年前にフランスの洞窟壁画がネアンデルタール人によって描き始めた説が有力となっている。壁画の誕生後、全世界各国の岩や岩壁に人類は岩絵を描がき続け、各地の民族たちが、祖先から言い伝えや、民族神話・祈り・願いを、「聖なる地」「祈りの場」で儀式を絶やさず続け、その民族結束の聖堂を守る歴史を刻んで来た。岩絵は各民族の信仰を守り、信仰集団の絆の結束の場、即ち、民族集団の「神との交信の聖堂」であったと思われる。

北海道道南地方の手宮洞窟・フゴッペ洞窟の壁面に描かれている陰刻画は、諸精霊の靈魂を岩壁に封じ込めるために描いている説が有力である。詳細に見るならば、洞窟や岩塊、岩壁に描かれた刻画は、刻画人の生きた時代の精霊・祖霊・死霊の宿る殿堂であり、神と同種族人の絆を深めた場になっていたであろう。現在の我々に、壁画は文字が存在しない先史時代からの現世への贈り物となっている。

未開社会においては、全ての「モノ」に靈魂が宿ると信じていたアニミズムの世界の暮らしと想像すれば、漁介類、獣類、土器や道具類までも、死者と同じような取り扱いをしたのである。刻画人たちは、集合し、篝火^{かがりび}を焚き、神話を語り、神々に祈りを捧げ、種族の安寧と食料調達に強い祈願をかけて、岩壁に画像を刻み歌踊と祝宴を繰り広げた歴史をたどる。天上神・祖霊の送迎に祈りを捧げた証に、殿堂の祝宴場には会食した魚介類・獣の骨が多々に残されているからである。

縄文時代晩期から弥生時代にかけて、北海道・東北方面では稲作栽培ができず、狩猟採集生活を継続していた。小樽洞窟人たちは、「土偶信仰」とは別に、呪術師^{じゅじゅつ}(シャーマン)の信仰が小樽地方に存在した。その陰刻画は、突然に現れ、又、突然の終焉を迎える歴史となる。その後、呪術信仰の小樽周辺の続縄文人たちは、洞窟刻画を描こうとはしなかった。そして、洞窟人は歴史的に何ら事情や事件も残さず、刻画文化を捨て、この地方から姿を消したのである。何処へ消えたか。

この陰刻画の歴史的な経緯を探ろうと、明治・大正・昭和と各方面の先生方が挑んだのであるが、はっきりした結論を見出せずに今日に至っている。刻画文化の手掛かりを求めて、筆者はロシア沿海州、韓国、中国、中央アジア、ギリギス、パキスタンへと見聞し、その延長でフランス・スペインの洞窟絵画を参照しながら考察を進めることにした。

目次

はじめに	1
目次	2
第1章・手宮洞窟・フゴッペ洞窟の陰刻画	3～19
第2章・シカチ・アリヤン岩絵美術村を訪ねる	20～34
第3章・韓国・中国・モンゴルの壁画を概観	35～47
第4章・ギリギス・パキスタンの岩刻画を概観	48～52
第5章・フランス・スペインの洞窟壁画を概観	53～70
第6章・手宮・フゴッペ洞窟刻画と大陸文化の繋がりを探る	71～76
第7章・先史モンゴロイドが歩んだ道	77～86
第8章・縄文文化終焉と稲作文化の狭間でシャーマン信仰は生まれた	87～106
むすびにかえて・縄文の旅	107～116

—A 4 横 4 0 字 × 行 3 0 = 1 1 6 枚—

第1章・手宮洞窟・フゴッペ洞窟の陰刻画

小樽市手宮1丁目3番4号に手宮洞窟はある。手宮という地名はアイヌ語の菅藻すがも(ヒルムシロ科の多年草が岩礁に生えムシロなどを作る)の岸という意味の、「テンムンヤ」という語から由来という。

慶応2年(1866)、相州小田原の長兵衛(相州真鶴安山岩採掘の親方衆か)という石工が、ニシン番屋建設材を求めて、石材を切り出すために手宮山の石質を調べていた。この辺りの地質は、第三紀集塊質凝灰岩しゅうこんしつぎょうかいがん(火山灰が水中に堆積した凝灰岩)で軟らかく、切り出しに適していたので、手宮山麓の波打ちぎわを調査中に、洞窟穴の入り口を見つけ、穴を大きくしたところ、奥壁に不思議な彫刻跡を発見した。時代は慶応2年(1866)の蝦夷地、アイヌ語でオタルナイと呼ばれていたニシン漁場の津(船着き場)となっていた所で、戸数314戸、人口1143人(慶応元年調)の集落となっていた。

現代なら、大発見となるのであるが、周辺の村落の話題に留まり、発見から12年後の明治11年(1878)に榎本武揚(たけあき)が手宮洞窟を訪れた事により、それが発端となり日本中に洞窟の彫刻が知れ渡った。

幕末、榎本自身は旧幕府海軍奉行で指揮を執り、幕府艦隊を率いて戊辰戦争を戦ったが、明治2年新政府に五稜郭で敗れた。後に明治新政府に登用され、明治7年(1874)、海軍中将兼特命全権公使として露国の首都ペトログラード(レニングラード)に赴任する。明治11年7月任務終えての帰国の際、シベリア大陸を横断し、ウラジオストクから小樽経由で帰国を果たした。その途次、小樽手宮洞窟に立ち寄る経緯となる。又、榎本はシベリア横断の旅の紀行文、『シベリア日記』に風土・気候・軍事・産業・鉱物・民族風俗の調査記録を残している。

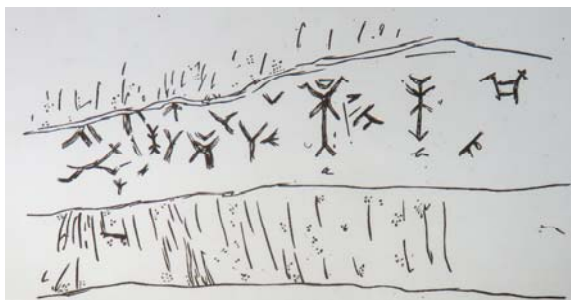
榎本は手宮洞窟彫刻を見た記録が、明治17年に刊行された『北海道志』(黎明期の北海道開拓、政治、経済、産業文化、風俗、地理、天文地象等の地誌)に次の様にある。

「手宮埠頭数百歩の西懸崖けんがいの上、百尺許ぼかりの処に石文あり。石を鑿けずりて発見する所也。初め海軍中将榎本武揚・開拓大書記官山内提雲(榎本の書記官、通訳・開拓使)等は此地かつ嘗て石鏃ぞく、石剣、雷斧らいふ(落雷跡に発見された石器時代の石斧)及び陶器、古髑髏こどくろを土中に掘り得たるを聞き、明治11年来観し、因って又此刻文を見る。写して東京大学に送る。…」
(原文を読み易くした)

送られた大学側では、彫刻図面に関心を持つ考古学者は当時まだいなかった。1887年にエドワード・S・モースによる大森貝塚(1879年)に、「古物学」に翻訳されて

近代的な考古学が始まったばかりである。榎本の図面に興味を示したのは、工部大学校(後の東京大学工学部)で鉱山学(地震・人類・考古学)を教えていた英国人、ジョン・ミルンであった。彼の専門は地震学であったが考古学にも関心を持ち、翌年ミルンは手宮洞窟を訪れ、彫刻をスケッチしている。その観察結果を 1880 年『アジア協会雑誌』8 巻に、「小樽および函館において発見した石器および日本における史前の遺跡について 2、3 の記述」と題して発表した。が、ミルンの報告によれば、石工長兵衛が発見した当時の原形は既に損なわれていたようである。彫刻については鋭利な工具で彫られたもので、石斧でも可能とあると観察している。

彫刻の性質の見方は、その可成りの部分が「ルーン文字」(古代北欧でのローマ字、又はギリシャ文字を彫刻に適応変形のもの)のメートル(m)の様な字形に見え、自説を積極的に主張は避け、幾つかの説を紹介している。「中国古文に似ている説」「ある種の司祭の位牌の印し説」「男根崇拜表現説」「人と動物を表現説」「いたずら説」等々があり、ミルン自信は北海道地方に貝塚や石器を残した「アイヌ説」とも述べている。



ミルンの模写図・1879年



開拓使による壁画模写図・明治13年(1880)

上記の模写図が残されていたことにより後世の貴重な資料となり、昭和25年、フゴッペ洞窟彫刻画の発見時に、比較検討に大いに役だった。北海道開拓使の模写図方が手宮洞窟の陰刻画を忠実に描いていたことが分かる。

1881年、明治天皇札幌行幸際にも小樽に上陸し、同行の^{ありすがわたるひと}有栖川熾仁と共に手宮洞窟を訪れ、その時の記録が斉藤忠の『日本の発屈』に次のようにある。

「吏胥(官吏)又導いて^{しょうとう}廠東(広い建物)数十歩に到る。石壁削立し、陰々として^{かいすい}卦坎(算木の面に現れた^{うらない}トの兆象)の如き、数行を見る。云く、往年土人^{いわ}雷斧^{らいふ}磐石^{やじりいし}等の物を掘り得た。壁上刻画あり。即ち蝦夷文字と。蝦夷には^{いわん}暦日(暦)なし、況や文字をや。然り。古語拾遺の序に明かに我上古にも文字なきを言う。而も学者猶神代文字を云う。此も亦^{また}異^{あや}しむに足らざらんのみ。」(原文漢文)

この文章を見ると当時は彫刻を文字とみる説が有力であったことが分かる。



明治13年頃の手宮海岸(手宮洞窟保存館より)



大正11年昭和天皇(皇太子代)手宮洞窟視察

明治19年2月に発行された、『人類学会報告』(後の『人類学雑誌』の前進)創刊号に「札幌近郊ピット其他古跡ノ事」が掲載されている。

「何ノ畫カ^え慥^{にわか}ニハ解カラネド、土人ノ酋長ノ墓表カ、戦争ノ期念ノ為ナル可シ。中央ニ大キク畫^{えが}キタルハ酋長ナラン。此岩ノ下ニ人骨ノ出ヅル所アリ。今ノ有様ヨリ推セバアイノノ手ニ成リシトハ思ハレズ。多分コロボックルノ遺跡ナル可シ。・・・」これが中央学会による日本人の手宮洞窟の最初の報告となる。

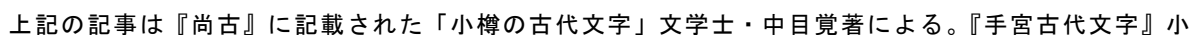
当時北海道各地に残されている竪穴住居址の窪み(ピット)もコロボックル住居址と認識していて、アイヌ伝説に登場するコロボックル説(アイヌ以前の先住小人民)は、ミルンが唱えていた。学会に於いて、日本先住民はコロボックル説を唱える坪井正五郎(日本人類学者先駆者)、アイヌ説を唱えた白井光太郎(植物病理学者・菌類学者・考古学)、後に小金井良精(解剖学者・人類学者)、鳥居龍蔵(人類・考古・民族学者)等もアイヌ説を主張し論争は明治期の考古学・人類学者の大論争となっている。考古学先達の坪井正五郎の手宮彫刻の見解は、偽り彫刻説を否定し、坪井は次の様に結論を述べている。

「是^{これ}は恐らく石器時代の人民の手に成った者で有ろう。彫刻は一方から始めて他方へ読んで行く様な性質のものでは無く、全体を以って或る事柄の紀念^{きねん}と仕あげたものと考えられる。個々の彫刻は多くは頭^{あたま}無し^{なし}の人の形で、即ち多くの人の死んだ事を表していて、其の中の大小は位の高下を示したものらしい。此の彫刻有る岩の裾^{すそ}に於いては、多くの人骨を発見したとの事で有るから、或^{あるい}は戦死でもした者を合葬した所かも知れぬ。・・・」と初めて学問的考察を示している。

明治44年、鳥居龍蔵が樺太へのオロッコ、ギリヤーク(ニヴフ)等の調査の途次、手宮洞窟に立ち寄り、その報告が、同年10月『歴史地理』第22巻第4号に「北海道手宮の彫刻文字に就いて」と題する論文が掲載された。

「これは、私は偽物^{にせもの}ではないと思うのであります。それから私は絵ではないと考え

この間に鳥居は、北海道の対岸である沿海州にいた「靺鞨民族」や、その後^{まっかつ}に勢力を伸ばした「渤海国」^{ぼっかい}（7～10世紀のツングース系民族、満州から朝鮮半島北部、沿海州領有、^{しゅくしん}肅慎・^{ゆうろう}挹婁の民族）が介在したことが考察している。^{まっかつ}靺鞨・渤海は『日本書紀』に登場する^{しゅくしん}肅慎（みしはせ）が、奈良時代以前より彼等は北海道西岸へ来ていた。故に「手宮の文字は肅慎人に依って彫刻されたと思う」鳥居の結論であった。



樽市史編纂室 寺田貞次編(大正 15 年)より。

この鳥居説を追従したのが、下記の「小樽の古代文字」中目 覚^{なかのめ あきら}の論考である。鳥居の古突厥文字説から、言語学者・中目 覚が大正 7 年『尚古』^{しょうこ}第 7 1 号に「我が国に保存されたる古代トルコ文字」を発表し、同年に『歴史と地理』第 1 巻第 6・7 号に「北海道手宮洞窟の靺鞨語墓誌^{まっかつ}について」を発表したのである。

中目 覚は、手宮彫刻は靺鞨・肅慎が『日本書紀』の齐明天皇 6 年(659)に「六年・・・3 月遣阿陪臣率船師二百艘伐肅慎国阿陪臣以陸奥蝦夷令乘已船到・・・」と見へ、阿倍比羅夫^{あべのひらふ}が、みしはせ(蝦夷)と戦った記事に関連づけて、「戦が終わって比羅夫は移民団と戦った事が分かり、戦死した族長を厚く葬り、遺骸は舟に載せて手宮の横穴に葬ったのであろう」とした説は、『日本書紀』より論考したものである。

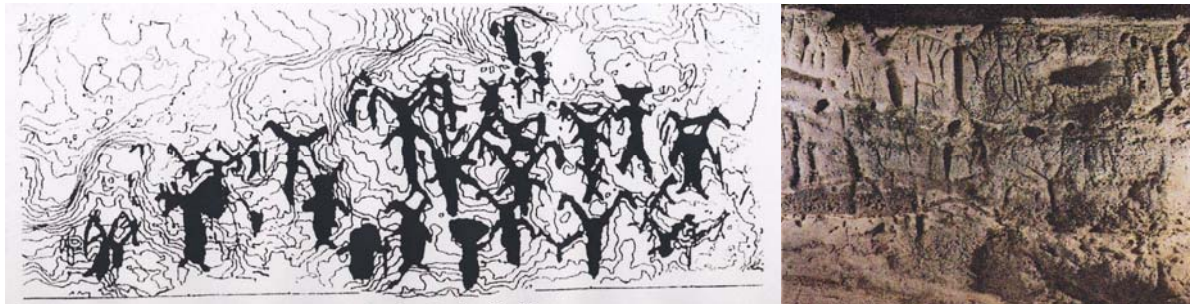
墓誌(手宮古代文字と推察)に「・・・我は部下を率いて大海を渡り・・・闘い・・・此の洞穴に入ったり・・・と刻んだものであろう」と中目は「小樽の古代文字」に安倍比羅夫との戦いに敗れた靺鞨・肅慎の想いを述べているのである。

更に大正 7 年 2 月『小樽新聞』に「嗚呼、肅慎の老翁よ、もしも汝が移民計画は失敗に終わったにせよ、優秀民族の国に植民するのは不可能事であることを、思い恨む勿れ。老翁よ、汝の祖国は影も形もなく消え失せ、其歴史に朦朧^{もうろう}たるの時に当たり、汝の記事は世界の大帝国の記録に残り、又汝の墓誌も読破せられたことを喜べ。老翁よ、以^もって瞑想すべし。エンデリの神は永に汝の霊を護るであろう。」との論調は小樽地域の人々には受け、中目の考察には、学界では無視されたが、地元では大いに受けたのである。又明治・大正時代を通じて、手宮彫刻は古代の陰刻画でなく、近代の落書き説も広がり、学者を惑わす偽刻説も出ていた。

時代は下り昭和 13 年、地元の小学教員の五十嵐鉄氏(余市町大谷地貝塚も研究者)による地道な調査研究論文を、『史蹟手宮洞窟の新研究』の題名で私家版として発表、これにより偽刻説は一掃されたのである。描かれている壁画は何時、何人に彫刻されたものか正確に判らないが、さまざまな調査研究により、或る程度のこと判るようになってきた。この彫刻は、今から 2000 年～1500 年前頃の続縄文時代晩期、本州では弥生時代が始まり、古墳時代の初めの時期にあたる。この頃の北海道は豊かな自然を背景に狩猟採集、続縄文化を継続している時期となる。

近年において、シベリア・ムール下流沿いの「シカチ・アリアン遺跡」の岩絵と、手宮洞窟・フゴッペ洞窟の画像が類似しており、日本海を囲むロシア、中国、朝鮮半島

などに見られ大きな文化の流れの刻画と推測されている。現代より続縄文時代を遠望すれば、各民族の文化伝播はゆっくりと伝わって平和的な時代に見えるが、縄文時代中期からよく観察すれば、極東アジアの諸民族間の争いを含めた国境感覚は、現代人が考えるより、各民族国境は狭く獵場が小さかったようである。（『日本の遺跡発掘物語』第3巻 弥生時代1。「手宮洞窟とフゴッペ洞窟」上野 武著 社会思想社 1984年・参考）



左は手宮彫刻画の中央部の模写図による全体図となる 右の写真は模写図の中央を写したもの

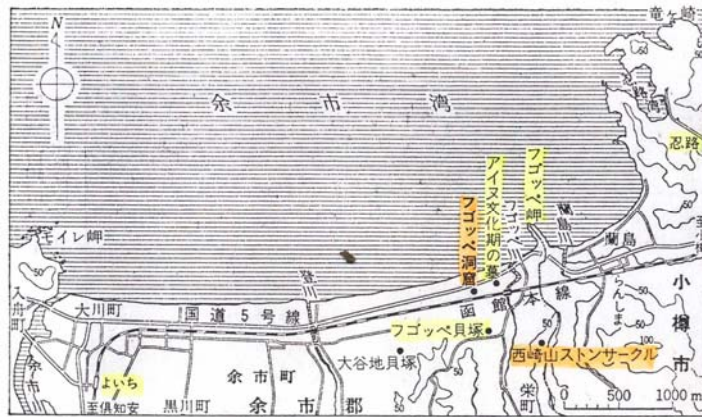
小樽市総合博物館より・手宮洞窟は発見以来120年、平成7年に手宮洞窟陰刻画を保存する「手宮洞窟保存館」建設の完成となる。この彫刻が刻まれた時代は、およそ1600年前頃の続縄文時代中頃～後半の時代となる。^{つの かぶ}角や被り物人像是シベリアなどの北東アジア全域で見られ、シャーマンを表現した説が有力。小樽地方に暮らしていた続縄文人が、日本海を挟んで交流をしていたことを示す貴重な遺跡になっている。

フゴッペ洞窟彫刻画 『謎の刻画・フゴッペ洞窟』峯山 巖著・1983年参考に。

昭和25年の春、余市郡余市町のフゴッペ海岸に近い丸山^{まるやま}(28m弱)で、近くに住む農業の方が丸山の客土^{きやくど}を取っていた時、崩れた所に洞窟の穴口を発見し、その年の夏、札幌から海水浴に来ていた高校生が好奇心を抱き、洞窟にもぐり込んだ。

高校生は郷土史研究員であったので、「これは古代の遺跡ではないか」と直感し、同部員が6回に亘り試掘を行った。相談を受けた同部顧問の島田先生が、遺跡の重要性を認めて北海道大学の名取武光氏(民俗学・アイヌ考古学著書)に連絡、その結果、1951年から53年の2次に亘って、本格的な発掘調査を行った経緯となる。

壁画は609個に及ぶ彫刻の存在を明らかにし、発掘調査後の1953年に国の史跡指定を受け、2004年に、洞窟内に強化ガラスによるカプセル方式保護展示場を建設し、フゴッペ洞窟刻画の保護展示施設を完成させた。近隣には「忍路環状列石」^{おしよ ろ かんじょう}や「西埼山環状列石」があり、手宮・フゴッペ洞窟との一連の関連性を、強く感じられる地域となっている。



フゴッペ洞窟近隣地図

余市市より・現在フゴッペ洞窟は、200点を超す刻画があり、人の仮装像・舟・魚・海獣や4本足の動物の様なものが刻画されている。^{つの}角や^{つばさ}翼で仮装した人像が多く、これはシャーマンを表したものと推察され、何らかの宗教的儀式の場であったと考えられている。洞窟は凡そ2000～1500前の縄文中期に属する遺跡となっている。とある。



西崎山環状列石

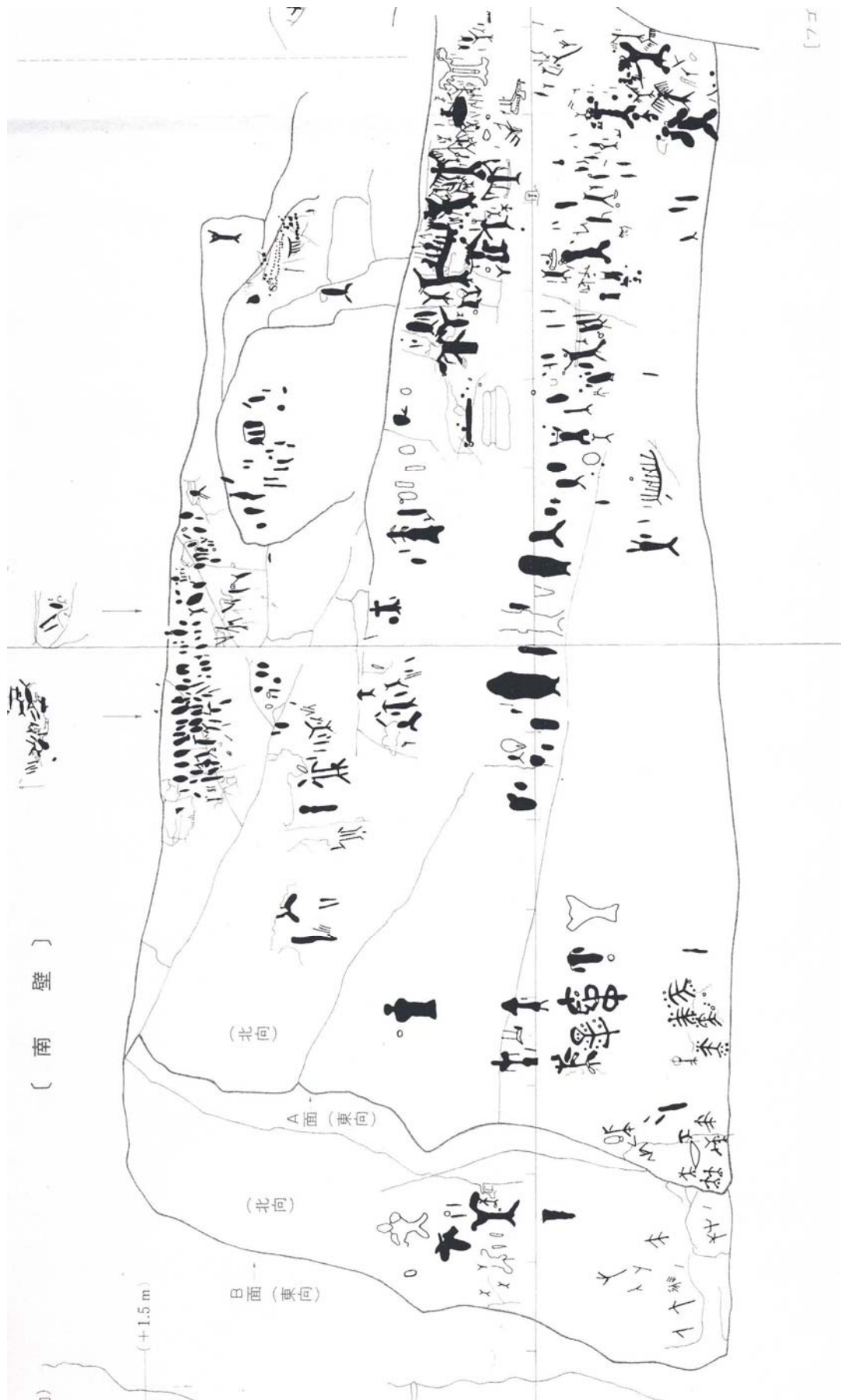


忍路環状列石

西崎山ストーンサークルは西崎山の尾根にあって余市湾が一望できる場所、環状列石は直径1m程の環^わをなして、自然石のやや大きいのが並んでおり、現在7カ所が残っているが、元はそれ以上あったものと思われ、その構造からみても、穴の中の^{りん}燐分があることから、古代の墳墓と推定されている。(余市町説明)

忍路環状列石(国指定史跡)は、およそ3500年前の縄文時代後期の遺跡となり、緩やかな斜面を平らな面に造成して、南北33m、東西22mの楕円形に石を配置で造られている。隣接する忍路土場遺跡との関係から、縄文時代の生活を知ることができる重要な遺跡です。(小樽市教育委員会説明)

忍路環状列石は、明治10年代から発掘調査が始まり、縄文時代後期の墓地と考えられ、真相は解かっていない。ストーンサークルの中心の立石が陽陰(春・夏・秋・冬の日の伸び縮)となり、東西の下組石に24節気の春分、秋分の陽の陰が当たる様になっている。



フゴッペ洞窟岩壁刻画・南壁（上が奥部となる）



フゴッペ洞窟岩壁刻画・北壁（上が奥部となる）

フゴッペ彫刻を観察

フゴッペ洞窟壁画は全体として文字でなく、象徴的な原始
刻画であると、調査団の一致した結論である。^{つの}角や^{つばさ}翼を持った人物は、動物に変装し
た呪術師(シャーマン)とされ、おそらく、フゴッペ洞窟はこの地域の海山豊穡を願う、
「聖地」であったと想われる。



フゴッペ洞窟の前海岸(余市湾)



丸山の左が入口・奥行7m×間口7m×高さ5m

狩猟採集生活に依存していたこの時代の人々は、彼等の種族安寧と多産と食料の豊
穡を祈願した場所と推察し、洞窟人たちの宗教的基盤は、北東アジア文化の影響をも
みられ、アニミズム(全ての生物・無機質に問わず靈魂が宿る)的シャマニズム(かななぎ・
祈祷師の能力による宗教)的な宇宙観の生活をしていたと想定できる。シャーマンとは、
ツングース語諸民族間ではシャーマン、サマンに由来する。

従来の文化伝播はアジア大陸から朝鮮半島を経由して北九州への伝播が主であるが、
近年の北東アジアからの文化伝播の研究から、「北からの古代史」が立証されつつある。
フゴッペ洞窟から続縄文時代(北海道に残る縄文文化)の後北式土器(縄文文化に続く土器)
が多数出土している。続縄文時代は本州の弥生時代と重り、北海道は寒冷地のため稲
作は行われず、縄文時代と同じ狩猟採集生活が継続して続縄文時代が続いていた。

洞窟内の木片と炭化クルミの放射性炭素測定を行ったところ、1870年～1950年前の
結果が出た。その結果、土器の年代を総合し、フゴッペ洞窟は今から1500年から2000
年前に彫刻された洞窟と結論が出た。しかしながら、何故に北東アジア文化が石狩湾
の地域だけに残されているのか、そして渡来文化を伝播させた人々は、その後アイヌ
民族と融合し埋没してしまったのであろうか、謎はつきない。

フゴッペ洞窟内から出土した人工遺物は、土器2700点が「後北式土器」が出土し、
縄文文化に続く続縄文文化であり、この時期は本州では弥生文化へと移行期となっ
ている。続縄文文化は、縄文文化を継承して樺太南部の宗仁式土器、鈴谷式土器は、一

般に「オホーツク式土器」となる。洞窟内では樺太南部の宗仁式土器の流れを引くものが4点発見され、調査の結果、フゴッペ洞窟は後北式文化初期を除いた、全期間を通して使用されていることが判った。放射性炭化の測定の結果、「フゴッペ刻画は今からおよそ1500～2000年前、後北式土器時代に刻画されたものである」との結論は、紀元前後1世紀頃となる。



フゴッペ洞窟から後北式出土



後北式土器



後北式土器の深鉢

フゴッペ洞窟刻画登場人物・仮装人像の系譜(a→b→c→dの順序で抽象化が進んだ)

	1. 有翼人	2. 有角人	3. 対象不詳
a			(不詳)
b			
c			
d			

図①

①・『謎の刻画フゴッペ洞窟』より（手宮・フゴッペ洞窟は陰刻画とも呼ばれる）

陰刻画の主人公は人物像と仮装人像が主役となり、仮装人像は3つの系列に分けられる。第1は、翼を広げた鳥に仮装したものをこれを^{ゆうよくじん}有翼人、図①の(a)となる。第2は、

角と尻尾のある動物に仮装した^つ有角人^{ゆうかくじん}、2の(a)となり図③ABとなる。第3は仮装なしの人物となり、何かを表現する一群の図②となる。有翼人や有角人の系列には、人物に翼や角を付けたもので、b c dと容易に見極められ、それが歴史を経ると抽象化に変化し、像を見ただけでは理解に苦しむ画像もある。全体が具象から抽象図の進行は、図①表の様な進行となる。刻画の中で重要な役割をはたしていると思われる人物像に**直立像**は、図②と、図③の開脚立像となる。全部で16体、その内12体が南壁に刻まれ、直立像は直立不動の姿勢をとり、岩壁に孤立して立ち、何を暗示しているか。



図②人物像 直立像

図③有角人の像・A北壁奥部・B上段

図④ニヴフのラットル

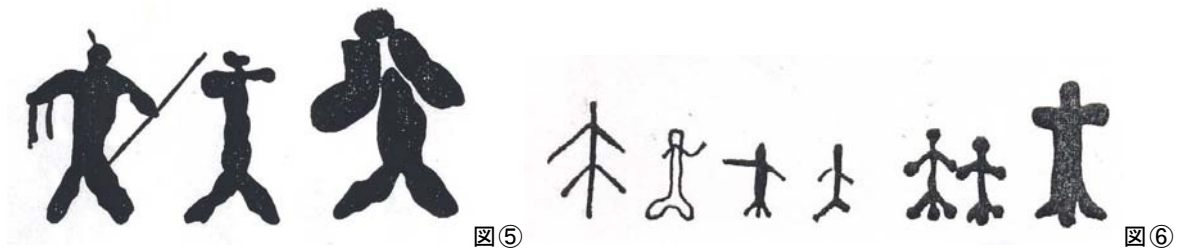
有角人(図①の2の(a))は、図③は角と尻尾のある動物に仮装した像で、動物に変装した有角人とみられる像は全部で78体、半分は南北両壁に集中し、北壁奥部の中段に、両手両足を開き、悠然としている有角人がいる。北壁奥部の中段には両手を開き、悠然と控えている有角人(46cm)が仮装人像の中で最も大きい。角の先端は両側に折れ曲がり、動物の毛皮を身に纏っている様子である。左手に持っているのはシャーマンが儀礼に使う祭具か。又開いた両足の股の間に短い刻線が垂れ、男性のシンボルか。

図③のBは(表紙2段目左)、「楽器を持つシャーマン」とされ北壁奥部の上段にいて、高さが40cm程で、右手にローマ字のP字形(図④・ニヴフのラットル)の様なものを持つ。この鹿類の角を冠ぶる岩壁画は、北西ヨーロッパの中石器時代遺跡に見られ、頭に冠ぶる赤鹿の頭骨が出土している。鹿類は人類史の最も早い段階から人類と密接な関係をもち、食料・呪術・神話の主要なモチーフ化となっている。北方ユーラシアの森林地帯、シベリアの南のステップ地帯では、鹿類の岩壁画が主要を占めている。

有角人の解説 このモチーフも既に北欧では櫛目文土器(櫛の歯の文様)文化の岩壁画中に登場し、鹿類の角の頭を被りその表現は、フランス後期旧石器の著名な3人兄弟洞窟の例が「呪術師」として扱われている。又、狩猟の変装説ともなっている。

有角人の人像は鹿と人間の融合を示し、手宮・フゴッペ洞窟壁画における有角人は有

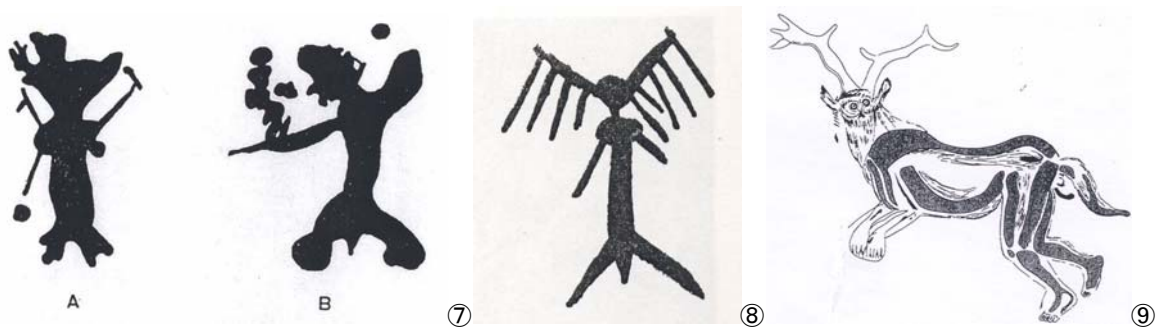
よく翼人の硬化した表現の可能性もあるが、鹿類の頭部を表現とすれば、大陸的文化の繋がりの中で捉えていかなければならないであろう。（『手宮洞窟シンポジウム・羽藤を超えた交流・手宮洞窟と北東アジア記録集』小樽市教育委員会編集。「北方ユーラシアの岩壁画と手宮・フゴッペ洞窟群」前田 潮著より）



⑤・人物像の開脚立像

⑥・開脚の抽象の変化図となっている

図⑤・北壁奥部の中段に槍を持っている狩人の像(左側)がいる。身長28cm、頭に髪飾りを付け、足を開いている。左手に長い槍を持ち、右手に獲物らしき物を下げている。何か新狩猟技術開発者か、狩猟名人か、民衆の体力を誇示する英雄者なのかも知れない。足の開脚は「英雄伝説者」にも見えてくる。



図⑦・仮面または冠り物を着用・A南壁奥部中断・B下段 図⑧・有翼人の像・南壁奥部の下段

図⑨・マスクを付けて踊るシャーマン・南フランス、レ・トロア・フレール洞窟画となる

図⑦Aは、南壁奥部中段にいる人像、有角人グループに属するが、頭部が誇張されている姿はシャーマンと見られ、「指揮棒」の様なものを持っている。図⑦Bは南壁奥部の下段にあり、「輪舞」の踊り手の一人、頭に礼冠を思われる冠り物戴いている。

図⑧は、有翼人は刻画の中で最も多い。鳥に仮装した有翼人は全部で107体のほり、69%に当たる74体が南北両壁の奥部に集中している。有翼人は北方ユーラシアでは、シベリア南部以外では類例は少ない。南シベリアのミヌシンスク盆地(シベリア南部)にはフゴッペ洞窟に近い有翼人像が見られる。特にユーラシア大陸の針葉樹林帯、及びその南北に隣接する森林ステップ帯、森林ツンドラ帯の東西に広がり、こ

れによって狩猟・漁労・牧畜などの生業圏が形成される。手宮・フゴッペ洞窟は海獣狩猟を含む海岸性の生活圏が営まれていたことが出土遺物によって明らかで、大陸のモチーフが主として青銅器時代(前 3500 年—1500)～初期鉄器時代(前 3000 年—800 年)にあたるものであり、手宮・フゴッペ洞窟画群との間には 1000 年以上にわたるギャップが存在する。・・・(「ユーラシアの岩壁と手宮・フゴッペ洞窟画群」前田 潮著)

図⑨マスクを付けて踊るシャーマン 南フランス、紀元前 2 万 7 千年～1 万 3 千 5 百年前と推定し、呪術師の壁画で、古代の人々は自身の回りを取り巻く不思議な存在、自分と似たような特徴や考えをもって動いていると考えた。これ等の考えを元に、様々な存在を制御しようとする、呪術的行為が生まれてきた。自分たちの死や、病気の人を見たり触れたりするうちに、強い人間、強い動物に触れると、自身が強くなれることを学び、超自然ものに宿り、様々な像を創って、強い力を持つことができると考え、祈りを捧げた。シャーマン的な技術をもった呪術師が 2～3 万年前に誕生し、図⑨の様に、動物の皮や角を付け、動物を引寄ることや、狩猟の豊^{ほうりょう}を願う儀礼となっていて行っている。その容姿は、牡鹿の枝角と耳、狼の尻尾を付け、人間の手足、顔は猿の様なマスクを付けて踊れば、狩猟民を守る神の踊りとなり、狩猟を支配する「狩猟神」となって毛皮を身にまとった完全なシャーマンの姿となる。

フゴッペ洞窟の陰刻画を写真で見る



図⑩



図⑪



図⑫

⑩・四つ指シャーマン南壁奥部

⑪・枝数の有角人北壁奥部中段

⑫・舟と人物・南壁中央部下段

図⑩・南壁奥部の中段。肩から左右に翼を広げたシャーマン、垂れた両手には指が 4 本あり、一本の指が切られている。この指折りの習俗は、後期旧石器時代の洞窟画にも描かれ、身体の一部を損傷することは、未開社会に於ける重要な儀礼となる。

図⑪・北壁奥部の中段。枝分かれのある長い角を付けている。頭の真上で左右の角

を結ぶ弧線は被り物^{かぶ}を表したものでしょうか。力強く開いた両脚の股の間に垂れ下がる刻線は、男性のシンボルであろう。

図⑫・南壁中央部の下段。舟はゆるやかな弧線で、舟乗りは細い縦の刻線で描かれている。この画像から少し離れた左側の仮装人像と、舟の上方にある環状の刻画を含めて、これを一つの構図として捕えると、何かの儀礼的行事に於ける舟出の情景にも見え、外海に漕ぎ出すのか、死者の国に向かうのか、フゴッペ刻画の舟に乗る同様な絵図はスカンディナヴィア半島からシベリアにかけて多く見られる。フゴッペ刻画は同じ描き方で、従ってフゴッペ刻画は東北アジアとの関係に結びつく説が出てくる。

死と再生の赤染め 図⑬・⑭は、北壁奥の上段と、奥壁に塗色^{としよく}の有角人の刻画は、仮装人像にベニガラが塗られている。これは血の中に靈魂が宿ると信じていた古代人の信仰によるものであろう。血の靈力によって画像に生命力を与えるために、血の象徴である赤いベニガラで着色しているらしく、赤色で着色することにより、崇拝する画像を強調し、その靈力を永く岩壁に止置くために儀礼を行ったと考える。塗色された画像は洞窟の奥に限られており、他の壁面と趣むきを異にし、シャーマンの幻覚の表象^{ひょうしょう}（意識に現れる対象の像）ではないかという推測も成り立つ。



図⑬

⑬ 赤色塗料を塗った仮装人像



図⑭

⑭ 幻想的な刻画・奥壁の中央部

狩猟民族の意識感覚には、肉体から自由に離れる靈魂、即ち「人魂」や「影」の様なものだけでなく、肉体から離れず血の中に宿っている靈魂があると信じていた。人間や動物が負傷して血を流すと、生命が終える事実を通して、「血には生命を維持する靈魂が宿り、その靈力が衰えると死が訪れる」という観念が生まれ、「赤い血」への信仰となって行く狩猟の歴史を経る。この考え方は各民族が呪術・祭祀的な行事等に赤色(ベニガラ)を用いる習俗として共有し、世界的にも広く分布している。洞窟人はこの洞窟に、血の靈力によって刻画像に生命力を与え、死者を蘇がえさせるために赤色を着けたであろうか。この奥壁は「死の再生」と祈りの場であったと思われる。

アイヌ神話 アイヌ神話にも翼のあるものが多く登場する。例えば、シマフクロウはコタン(部落)の守護神として祀られ、コタンカムイ(村を守る神)となる。その他、ニヤンコロカムイ(木の精霊をもつ神)や、クンネ・レク・カムイ(夜叫ぶ神)が闇の奥で泣き叫び、熊の所在を知らせてくれる。ハシナウシカムイ(狩猟の女神)はミヤマカケスで、アイヌの願いを受け、獲物を所有する神とアイヌとの仲立ちをしてくれると信じられている。羽を持つ動物は「神の使い」と信じる民族の歴史を持っている。

シベリアのシャーマンを見る・シベリア・アムール川下流の呪術師たち



図 ⑪



図 ⑫

⑪・『ネギダль・(不思議な)コレクション』1894 年撮影とある。 ⑫・シャーマンの衣服、左側が前すがた、右側が裏すがたとなる。(ハバロフスク地方州立博物館資料より)



シャーマンのベルト・同資料より



太鼓とベルト(シカチ・アリヤン村中学校博物館)

人間と霊との媒介者としてのシャーマンは、衣服を着ることによって自らの本質を変えて霊に変身し、シャーマンの衣服は一般に鳥を表現するが、金属的な部分の形、刺繍の形によって人間の骸骨を表している。したがって儀礼衣服を纏ったら、「生きて^{がいこつ}いる死者」であり同時に野獣にも鳥にもなれる。そしてマスクは、シャーマンの儀礼^{まと}

衣服は不可欠の要素となる。シャーマン衣装には、熊・鳥・爬虫類・星・月・太陽等を表現したものを身に着け、霊力をさらに増幅する場合は仮面をつけるのである。



シャーマンのマスク（ニコラエスクのニヴフ族中等学校博物館） 現在の制作面（ニヴフ民族資料館）

シャーマンの誕生地は北東アジア 各民族の信仰の原則は、トナカイの牧畜者や漁民たちの間にあって、広く分布しているヤクートやツングースの両部族、ベーリング海の東海岸に生活している各部族、チュクチー、コリャーク、ギリャーク、及びカムチャダル等は、彼等は共通して大自然には3つの住んでいる領域を信じている。

1 つが光明(住んでいる明るい生活圏)、2 つが善霊(復讐を望まない霊)の住む上部、3 つ目が神の住む最上の領域があると。人間と天の間には、霊の神々の世界が存在していて、その間に中部（人間と動物が住む）の領域があり、その下部の領域に暗黒と悪霊が存在していると信じている。人間は中部の領域で生活し、そしてその上下の諸精霊と若干の取り引きする関係を持っている。そこに行き交うことができるのは、シャーマンのみとなる。また、シャーマンは精霊を一般の人たちの処に、神や祖霊を招くことができる^{しょうかん}召喚能力を持っている。そして、シャーマンは直接に諸精霊に話かけることも、彼らの希望も尋ねることができ、更に能力を通していろいろな方法で病気を治すこともできるのである。（『原始宗教』「シャマニズム」吉野清人著・三一書房・参考）

補足・『鳥居龍蔵全集 8 巻』「第 5 章・ツングースの探検・その 4・土俗学的方面」の中で、シャーマンの事を「薩満^{さまん}」とあり、ツングース系語族の「サマン」を漢字で表したのが「薩満」という言葉を使用している。

第2章・シカチ・アリャン岩絵美術村を訪ねる

ロシア連邦ハバロフスク市からアムール下流70kmの右岸にシカチ・アリャン村は位置する。人口300人、ここに居る「ナーナイ人」はツングース系の言葉を話す先住少数民族で、12000人の中に含まれる。極東最大の川、アムール川の流域で漁労を中心とした生活をし、日常の暮らしは、漁労を中心に山や川、湖、動物狩猟の生活をして、神々に感謝と敬意を払いながら暮らしている人々の村である。

極東最大のアムール川は、モンゴル高原東部のロシアと中国国境を流れるシルカ川とアルグン川とが合流し、中流域は中国黒竜江とロシア極東地方との間の境界となっている。ロシアのハバロフスク付近から北東に流れを変え、オホーツク海に注ぐ大河となる。本流のみで2850km、源流部を加えると4350kmとなる世界最大級の河川となる。中国ではヘイロンチアン(黒竜江)と呼ばれ、中国領の大きな都市は沿岸にトンチアン、ロシア領はハバロフスク、コムソモリスク・ナ・アムーレ、河口都市ニコラエフスク・ナ・アムーレとなる。ハバロフスクから北東に70km下った右岸に、シカチ・アリャン村落(旧称サカチ・アリャン)「サカチ」はナーナイ語で「知る」、「アリャン」は「場所」、シャーマンが霊魂と交信した岩絵ある場所の由来で、即ち、「水の流れが会う岸边」という意味となる。この村に1万3千年前と推定される古代の岩絵(岩画)が岸边に点在するのである。「ナーナイ」は自称で「土地の人」を意味する。



「アムール川沿岸の住民たち」マーク(P. K. Maak)1859年。図①の各民族・1～5 マネギール、6～7 満州、8～12 ゴリド(ナーナイ)、13 マングン(ウリチ)、14～15 ギリヤーク(ニヴヒ)となる。

ロシアがアムール沿岸の地域に入ってきたのは17世紀、ロシア人はナーナイ人を「ゴリド」と呼び、言語的にはツングース語系諸族の一つ、ツングース・満州語派に属している。付近にはウリチ、オロチ、ウデゲ、オロッコ等の民族と同一のグループ形成(沿アムール文化)を成している。アムール川の名称をナーナイ語で「マング」、ウリチ語で「マンゴ」と呼び、「ナイ=人」で「アムール川の住民」の意となる。

A. P. オクラードニコフ(ロシア人)は、『シベリアの古代史』『黄金のトナカイ』の著者である。1935年から、1958、1963、1969年にシカチ・アリャン村の岩絵の調査を行っている。極東アジアに於ける人類の進出は、極めて早くからシベリア地域に進出し、早期新石器時代に人類はある程度の自衛と生活確保する集団ムラを形成していた。弓矢を発明し、犬を飼いならしていたのである。

川岸や川の中州等に定住集落は、魚食生活(ユッコラ・干し魚)、丸木舟や犬ゾリ、夏の家(高床式)、冬の家(竪穴住居)、氏族(ハラ)組織するなど、狩猟・漁労・儀礼とシャマニズムのムラ集落を形成していた。このシカチ・アリャン村に近いガーシャ遺跡(アムール川支流アムグン川流域の村、約2万5千～1万5千年後期旧石器時代)から出土した土器で、炭素年代測定の結果は、前12960±120年となり、約1万3千年前の岩絵群と共に同時代の測定結果が出たのである。

このシカチ・アリャン村はアムール川河口まで11月中頃から翌年春まで厚い氷に閉ざされる村となる。冬期はヘラジカ、アカシカ、トラ、ジャコウネコ、イノシシ、クロテン等の狩猟生を行い、春になればサツキマス、フナ、コイ、鯰の漁労、8月中旬からは、産卵に遡上する鮭やカラフトマス等の大豊饒期となり、まさに流域のナーナイ人は1年分の食糧魚を確保するのである。鮭は河口より1千km余、ハバロフスク付近まで遡上する話を聞いた。

この地域に住むアムール河口までの両域は、ナーナイ族、ニヴフ族(露人がギリヤークと呼びアムール河口から樺太の北部に住む)、そして樺太南部にはウイルタ(オロッコ)、ウリチ(ナニ)、アイヌ(ツングース諸民族はクギ・クイと呼ぶ)が住んでいる。

この地域の発掘調査によると鮭類を獲るための漁網と^{おもり}錘を大量に出土し、魚網は「イラクサ」(イラクサ科イラクサ属の多年草、草高さ40cm内外となり、アイヌ民もイラクサで布を編む)による漁網が古代から編まれていた。この流域の民族は釣りのルアー(仕掛け・疑似餌)をも完成し、農耕民とは異なる発展をとげていた。(参考文献・『シベリ

アの古代文化』アレクセイ・オクラードニコフ著・加藤九祚訳・講談社 昭和49年)



I



II



III

I・A. P. オクラードニコフ II・眠れる美女 III・アムールの土偶『シベリアの古代文化』より

I・アレクセイ・パブロビッチ・オクラードニコフはソ連時代の考古学・民族学者で、シベリアとモンゴルの考古学的研究先駆者でもある。1938年ウズベク共和国のテシク・タン洞窟でネアンデルタール型の人骨を発見したことで有名となる。1957年に来日、シベリアと日本との石器時代の関連を示唆している。IIとIIIはオクラードニコフの蒐集したもの。

II・眠れる美女・沿海州、マイヘ河の支流ペイシュラ河岸洞穴から発見された。鍾乳洞を加工したもの。眠れる美女という名が与えられたが、実際は神的な戦士の像という。^{ほっかい}渤海文化期。

III・アムールの土偶・コンドン遺跡(アムール川下流のコムソモリスク付近の新石器時代の遺跡デビャトカ川とアムール川との合流点)で発見された遺物の中に土偶。ツングース族の特徴をきわめて良く表現した女性像で、住居址内より軟玉製小玉や垂飾とともに発見された。

シカチ・アリャン村の岬先端部に岩絵群がある



シカチ・アリャン村アムール川左岸に岩絵群が点在

左岸最先端の岬の眺望・正面が上流となる

シカチ・アリャンの岬先端には水流が集まり水の流れの勢いがある場所がある。鮭

類の遡上道、即ち、岸辺に魚が寄って来る場所となっている。その魚道をコントロールして大量の鮭類を捕獲する場所となっている。春から夏にかけてイトウ、カルーガ、オショトル(チョウザメの一種)、サザン(鯉科)、鯰など百種類を超える魚が獲れる。8月(日本より鮭の遡上が早い)になれば夜を徹して遡上する鮭を捕獲、この場所が「アリヤン」の語源の「漁」に関わる「場所」、又は「合流点」であることを知る。

アムール川は中国の名称は、後漢から晋まで「弱水」(アムール川は見た目では流れが緩やか)、清朝期「黒竜江」と呼ばれ、アムール流域先住民はアムール川の名を「モンガボ」「モンゴー」「マンゴ」「マング」等と呼んでいた。

『シベリアの古代文化』「第三章アムール河岸の岩壁画」シカチ・アリヤンの風景を述べている。

「・・・私達も 1935 年シカチ・アリヤンにおいて、岩の多いアムール河岸沿いに累々と連なる巨大な玄武岩に興味をひかれた。今は死火山となっているが、数百万年前は、ここ火山の噴火口から赤熱した溶岩があふれ出した。その後それは凝固し、ひび割れ、河水で洗われ、ついには多くの岩塊がんかいとなって散らばった。そして今もその一つの岩塊が、アムールのしぶきと泡立ちに洗われ大河の流れ、そこに映されている青い空と古さを競うかのように、その黒い膚はだをさらしている。この玄武岩の巨塊きょかいもまた、幾百にのぼる他の塊と同じように、遠い昔、近くの岩壁から崩れ落ちて、流水によってここに運ばれたものである。

一見したところでは、そこに何等注目すべきものは見当たらない。山野に転がる自然石にすぎない。地球の少年期の証人ともなるこの岩塊には、創造的意図の刻印が見られる。それは、古代芸術の不思議な、そして興味深い空想世界を我々の前に展開するのである。幾世紀、さらに数千年の間、この玄武岩の尖った角とがは丸められ、その表面は磨かれてきたが、無名の古代芸術家の手で刻まれた深い線刻は消されることがなく残った。泥土でいどの河底、その濁水の中から、水中の怪物、つまりアムールの支配者である「黒い竜」が浮かび上がってきた。・・・」と。

更に、『黄金のトナカイ』ではオクラードニコフは次ように述べている。

「・・・自然石にこれだけの溝を彫り込むには、どれだけ多くの労力が必要であったことだろう。工具も金属もなく、・・・不思議な怪物を表面に彫り込んだ玄武岩かたまりの塊は、シカチ・アリヤンにおいて一つや二つではない。画像のある岩塊は全部で 103

個（現在は150程）を数える。これらはすべて、その製作の技法、様式、テーマなどにおいて統一的な文化現象をなしている。シカチ・アリヤンの画像は、アジアに於けるこの種の遺物の総体の中でも独特のものであり、一風変わったものである。そこでは、幾世紀の過去から、なにか統一的な文化史的集団が我々の眼前に現れる。これは謎にみち、鮮やかで独自の古代世界の断片である。・・・」と、「黒い竜」から受ける感想を述べている。



図①



図②

①・アントロポモルフ的仮面『黄金のトナカイ』 ②・シカチ・アリヤン岩絵 2015年筆者撮影

図①・オクラードニコフが1935年撮影したもの。シカチ・アリヤンの漁師に岩絵の説明を受けた時、「ムドゥリ」という言葉で「蛇」「竜」と説明を受けた。その時中国の龍(ロン)ではなく、シベリアのタイガ起源の「竜」「ムドゥリ」と理解した。ムドゥリはナーナイ語で「マンゴー」、即ち「水竜」、又は「プイムル(蛇)」である。アムール河口では水竜の頭を象徴して「ミオ」と呼ばれていた。アムール川の大小の支流は、水竜の身体の一部として、「プイムル」の足、^{たてがみ}鬣を意味した。因ってアムール流域のナーナイ人にとってここは聖なる「場所」、信仰の「場所」であったのである。



図③



図④

③・ヘラジカの刻画

④は1924年鳥居龍蔵が撮影したもの

『鳥居龍蔵全集』第8巻、「人類学及人類上より見たる北東亜細亜」に、図④は、「ハ

パロフスク市より東北約20里、セカチ・アリャン村付近、アムール河岸の露出する自然岩面に彫られた^{じゅんろく}馴鹿(トナカイ)の彫刻なり。この岩面には、なお他の動物及び人面の沈み彫りがあり。人面は入れ墨を施し、その状我が国石器時代の土偶の面貌^{めんぼう}と酷似する」とある。図⑥の拓本は「トラ」と鳥居見たが、ヘラジカであるらしい。



図⑤



図⑥

⑤・右のトラ刻画に見えるがヘラジカ、絵が逆さか

⑥、鳥居龍蔵は「トラ」とみている



図⑦



図⑧

⑦・猿の面、人間のガイコツ面を表している

⑧・骸骨のマスクを表しているらしい



図⑨



図⑩

⑨・縦縞があるからアムールトラか

⑩・川岩に馬の刻画が見られる

岩塊には鳥・へび・トナカイが描かれ、人面画(骸骨マスク)の上部は幅広く、目は大

きく、口から2本の大きな歯が出て、顎は小さく丸い顔つきはサルを思わせる。この顔は死者の顔か、祖先の霊を想像しているものなのか。シカチ・アリヤンのマスクの特徴はサルに似ていることである。頭部がサルに似ている外面的特徴は、明らかに頭蓋骨、死者の頭部の関連が見られる。

拓本からの岩刻画 図⑪はオクラードニコフの絵図。ヘラジカのオスを弓で撃とうとする漁師の刻画は、オスのヘラジカが太陽を盗んで天界に逃げたのを、弓の優れた漁師マニが追う。オスのヘラジカから太陽を渡されたメスのヘラジカが北極星から天界に逃げ込む直前で射落とし、昼と夜が生まれたという伝説を描いた「マヤコフスキイの岩絵」と呼ばれる刻画である。



図⑪



図⑫



図⑬

⑪・オオシカ、

⑫・アントロポモルフィックの仮面

⑬・同じく仮面(『黄金のトナカイ』より)

「射日神話」についてオクラードニコフは解説する。《巨大な岩塊の平らな表面に、広い角をかざしたシカのリアリスティックな像が刻まれ、その胴体には渦巻き文様がみられる。シカチ・アリヤンの画像の由来を聞くと、ナーナイ人の伝説は、遠い昔、天に三つの太陽があって、石が蠟のように溶けて柔らかくなり、指でその上に描くことができた。画像はその頃に描かれたものである。即ち熱で柔らかくなった岩壁に、さまざまな怪物の像を印刻したのだ。シャーマンの物語によれば、当時大地は釜の中の湯のように湧き立っていた。炎暑は一切の生物が存在できない程激しかった。暑熱のために魚は死に食料に困り、シャーマンは2つの余分の太陽を殺してしまわなければならないことに気が付いた。シャーマンは両端の2つの太陽を弓で打落し、真ん中の1つが残った。「水は湧き立って山になった。山は湧き立って川になった。それ以後、世界は住みよくなり、子孫が栄えるようになった」この恐るべき時代と偉大な射手の功業を永久に記念して、シチカ・アリヤンの岩塊に神話的存在の刻印が残されている

のである。ナナイ人はこの出来事を信じている。この3つの太陽と偉大な射手のい
どんだ創世期に由来する神秘的な画像の起源は、そもそもなんであったであろうか。
これを生み出した極東地域の文化的・民族的体制が、アムール川岸やウスリー河谷、
沿海地方では、数千年来他の地域と異なる歴史的過程で、独自の文化的伝統が作られ
展開された。シベリアとモンゴリアの新石器時代種族の生活基盤は狩猟であり、漁労
は補助なものであったが、極東地域の生活基盤は漁労であった。魚類は産卵のために
海から川に遡上、この「漁獲期」が極東地方住民の1年分の食糧を保障した。極東地
方に於ける豊かな新石器時代文化が南方と関連していることは、アムール川流域の伝
説に今日まで伝わっている熱帯的神話の名残によって明白に示されている。さきに述
べた3つの太陽と、2つの太陽を射落した偉大な射手に関する伝説もその一例である。
太陽が人間の親友である遠い北方で、どうしてこのような伝説が生まれるのであり
か。アムール川流域種族のこうした伝説は、おそらくどこか南方で発生し、そこから
遙かな石器時代の昔に遠い北方へ広まったものであろう。およそ7千年～1万年前、
旧石器時代狩猟民の人生肯定的でリアリスチックな芸術が存在したヨーロッパ各地に
於いて、人類の芸術的生活に突然急激な変革が起こった。地下へ隠された洞穴的聖地
へ通じる小道は雑草の茂るままに放置されていたのである。」と述べている。

余話・3つの太陽の神秘 前項の3つの太陽神話を説明したが、「射日神話」につい
て、現実^{ちょうじょう}に天体でおこる超常現象を、NHK・BS「体感グレートネイチャー」で、
「モンゴル3つの太陽」の番組を拝見した。このことにより、シカチ・アリヤンの「射
日神話」の裏付けを確認したような思いになり、3つの太陽の写真を紹介する。



図⑭



図⑮

⑭・2013年11月1日に現れた「3つの太陽」気象現象が観測 ⑮写真は [bing.com/images](https://www.bing.com/images) より

図⑭・⑮は中国河北省围场满族のモンゴル族自治県で2013年11月1日、午前
8時10分頃、本物の太陽の周りに「3つの小さな太陽」が見えた。現地の人は、こ

の現象を「太陽が自らの耳を晒^{さら}す」と呼んでいる。専門家によれば、これ等の現象は雲の中の氷^{ひょうしょう}晶(大気中の水蒸気が冷却され、液体を経ないで直接気体になる)に太陽の光がさし込み、屈折するなどして起こる現象であるという。この現象は、ロシアやモンゴルで見られ、連日マイナス30度以下(日本の大寒の頃)寒冷がモンゴル平原を包むと、太陽が2～3個見える現象が現れ、「幻日^{げんじつ}」(太陽の横に明るく見える現象)が見られる。

中国古代では、朝廷の専門星占い師が特殊な自然現象から吉凶禍福^{きちきょうかふく}を予言して皇帝に提言していた書、『晋書天文志』(宇宙学)に「幻日」の記載がある。「西暦314年1月、3つの太陽が西から東へと出現した。317年1月、再度3つの太陽が出現し、白い虹がかかった。太陽の周囲には幾重もの日暈^{にちうん}(ひがさ)が現れ、左右には紅炎が観測された。占い師によれば、白い虹は兵乱の予兆を示し、3つの太陽が同時に出現すると、3カ月以内に諸侯は皇帝の座を争う。同年3月、やはり江東の「呉国」で、諸侯が王を称し、天下は大乱となった」と伝える。(新唐人電信台ニュースより)

ターズ=韃子 ナーナイ族(ゴリド)は生粋の魚食民で、衣服も魚皮で作った。「ターズ」の呼称は漢民族が隣接するアムール流域のツングース系民族のウデヘ人、ナーナイ人を「韃子=ターズ」と呼ばれた。V・Kアルセーニエフ(『デルスー・ウザーラ』著者)によれば、ターズをウデヘと漢民族の混淆^{こんこう}した集団ではなく、むしろ独立した民族と見なすべきとある。ナーナイ人が魚皮で衣服を作っていたので、中国の文献では「魚皮韃子・ユーピターズ」と呼んでいる。『鳥居龍蔵全集第8章』「その魚皮套子^{ユピターズ}の乗船」の文中に、「その時甲板に居たシナ船客が魚皮套子^{ユピターズ}、魚皮套子^{ユピターズ}と言って叫んだ。余はシナ人の書いた満州の本など読んだ時に、よくシナ人が魚皮套子と書いてあるのを見て、非常に面白く感じたのである・・・」と記述している。



図⑩

⑩・サケ・マス類の魚皮のなめし作業



図⑪

⑪・魚皮のなめし後衣服等の材料となる

ニヴフ族の村を訪ねる アムール下流域にニヴフ族(ギリヤーク)村が数カ所あって、河口に近い(河口部より 80 km 上流)ニコラエスク・ナ・アレームのニヴフ村を訪ねた。



⑱・ニコラエフスクのニヴフ族村の小学校を訪ねた。(沿海州では小学校内に郷土の各民族資料の博物館ある) 左の写真「лики зверей в орнаменте нивхов」(ニヴフ族の飾り動物の顔)、⑲・左右と奥はロシア人・中央ニヴフ三姉妹と著者、日本人女性と実によく似た顔に驚く。(2015年7月訪問)

大陸文化の伝播考 アムール川下流には、日本で見るような銅鏡が存在していた。沿海州においてはシャーマンが鏡を使い呪術の威力を発揮して、豊漁と生活の安寧と祈願儀礼をしていたことを知る。日本古代の巫女の呪術文化の原点は似ている。



図⑳・シャーマンが使用したミラーであるが日本の銅鏡と酷似。(シカチ・アリヤン村中等学校博物館)

図㉑・ハバロフスク地方州立博物館で見たアムール流域の諸民族の子供たちが健康に育つように祀る「木偶像」である。子供の成長を願う木偶像はシャーマンの儀礼によるらしい。㉑の番号1、ナーナイの子供の成長を祈る魚らしい。日本の鯉こいのぼりと同じか。2、母乳を断つ木偶像。3、ナーナイ人の子供の願い事を叶える「聖霊セヴェン神」。4、ナーナイ人の子供の楽器か。5、ウデゲ人の子供の終局、死別の儀

式に使う水入器。 6、家長(跡継ぎ)になる儀式用具。 7、ナーナイ族のトラの霊アンパン。8、ウデゲ人の子供の成長を祈る木像、薄い毛皮(樹皮布)を身に着け子供を保護する木偶か。

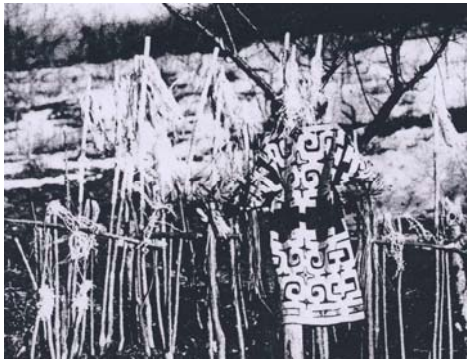


図 22



図 23

②・日高地方アイヌ民のイナウ(外弊)『アイヌ芸術』昭和 17 年 ②③魚霊の送りか、ナーナイ族の儀式用具はアイヌのイナウと酷似する。アイヌの祭壇ではイナウは柳で作られ、イナウの削りは鳥を意味し、鳥は霊の使いとなる。熊祭りで霊を天に送り、土産・酒・穀物を持たせるイナウの儀礼となっている。

アムール下流先住民俗の木偶神像を拝見する ②④～②⑥は沿海州民族の木偶像



②④



②⑤



②⑥

図 24 木偶像・アムール川流域の民家では木偶が守護神となる。(ウラジオストク博物館)

図 25 「アムール川の天神」狩猟・漁労・家族の健康を守る聖霊像「セヴェン」。ナーナイ人はこの聖霊像を家の主人がブタや鳥の血で、「私はあなたに猟の成果をお願いします」と言って、「セヴェン」の口に血を塗りつけ祈る儀礼となる。(ハバロフスク博物館)

図 26 博物館では「カルト彫刻偶像」とあるが「セヴェン」であろう。(ニコラエスク博物館)

金田一京助が見たアイヌの神々(人形) アムール流域民俗が実に酷似がしている。

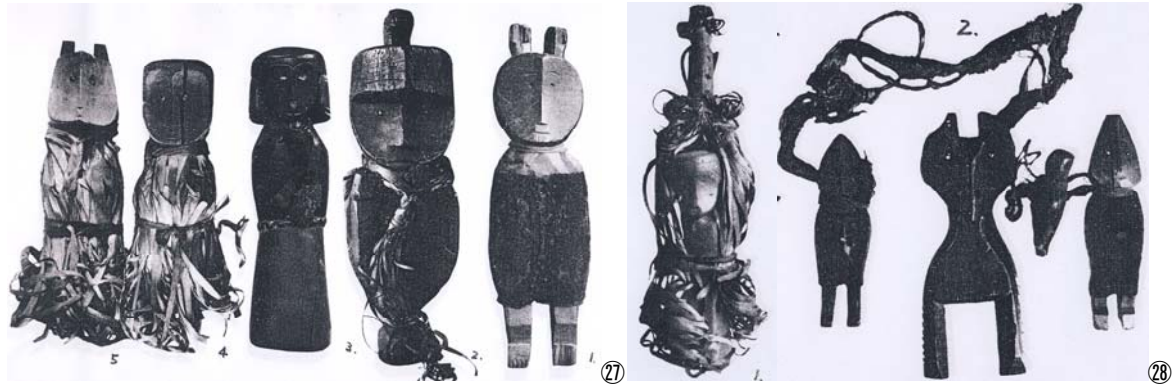
下記の図 27・28 は『アイヌ芸術』木工篇解説・金田一京助、杉山寿栄男共著・昭和 17 年の復刻版より転載。図 27、28 は北海道・樺太(統治時代)の集輯した木工品の一部、

実によく酷似した木偶神はアイヌのお守りとなっていた。

★下記の補足・ツングース系ウイльта民はアイヌ民より「オロッコ」と呼ばれた。

★東多来加は樺太領有時代の敷香町・現在のポロナイスク市となる。

★下記のお守り神は、金田一京助・杉山寿栄男による樺太・北海道の木偶神像となる。



図②⑦の 1 と 2 はオロッコ神像 3、樺太東多来加人形、4 と 5 はオロッコ男神女像 図②⑧の 1 と 2 はオロッコのお守りとなる。

図②⑦の『アイヌ芸術』の解説 1、削り掛けとして、発達したイナウの棒に刻まれた房状のものは多く「ラプ」として北海道や樺太のアイヌも凡て鳥の羽根を意味してきたらしい。然るに後代これが撚られて、神に対する神聖な^{ひも}綬となって、これにて頭や腹に巻いてその病魔を払い、又イナウそのものの内、払い用のタクサ(手草)は主としてこの役を果していた。故にこの削り掛にておおう、又は巻いたものは凡て神聖なものとして扱われて来た故にアイヌ間ではイナウコロカムイなる名称によって鳥骨や獣骨までがこれに包まれてお守りとなっているものが多い。此の如くイナウそれ自体が神であった時代から漸次このものが神聖な神衣の如き包装物となり、又他に表現された人形その他にこれがまといはれて、一面これが神物化して来るものであった。

2、樺太新聞(旧敷香郡泊岸村)アイヌの製品で、この種を単に人形ニーポポと云う。あごの下から縛られた布はこの人形のお守りである。胴がくびれて彫刻によって髻紐を示し、一見内地の奥羽地方のコケシ人形と似た形状である。

3、頭部の角状のものは2本にわかれ、動物の顔面を示したものが見られる。

4、5、胴体にはビロードの布で縫いぐるみとなって全く人形化したもの。股下に見える皮紐は後ろ面で、この人形が懸垂(真っ直ぐに垂れ下がる)されるその皮紐である。

図②⑧の解説、1、樺太東多来加イナウに巻かれたシェニシテ「子供守り」である。内部に納められた人形はニーポポと何ら変わりはない。お守りが漸次内部の人形だけが

とりだされて、遂に子供のお守りから玩具化したものと見られる。2、オロッコの「ネワセウニ」^{ナツ}臍(内臓)の神の吊守で一つの赤布の紐に幾つもの人形が附されている中央のものは北方民族の霊鳥と崇められている^{オキサラ}オキサラを現したものである。

⑳・㉑の木偶神像の解説は、大正から昭和初期に集められた木偶で、アムール流域の民俗と北海道アイヌ民の聖霊・神霊がとても近い関係にあることが解る。

刺身料理の源流をみる



図 29



図 30

㉑川魚料理のナーナイ族・アリヤン村にて

㉑・半身の魚を炭火で炙る

図 29 の写真は、岩絵(画)の有名名シカチ・アリヤン村(ナーナイ族)のレストランで、川魚料理の手順を見せてくれた。魚は10種類位見せて、フナに似た魚を三枚に下ろし、火で軽く炙り皮を剥ぎ(見事にはがれる)、魚を細かくきざみ、きざんだ魚に^{ぎょうじゃ}行者ニンニク(北海道にもある)と混ぜて食べる。日本で言う処の「タタキ」にして醤油で食べる。正に、日本のすしの味となる。食文化の源流を舌と胃が確認した次第で、ウォッカとの相性は抜群と進めてくれた。

㉑、㉑はナーナイ人(40歳前後)の横顔を拝見して、実に背恰好も日本人似ていることに驚く。★㉑の後方に木偶像神(家内安寧・豊漁の神)が2本立っている。

「沿海州の食文化」 帰国後調べてみたら、「沿海州の食文化」の題名で国立民族学博物館の佐々木史郎先生の記事が次の様に述べていた。

「・・・沿海州、シベリア、極東の先住民に特徴的にみられる魚の食べ方に生食がある。捕りたての新鮮なものも、生で食べる、いわば刺身である。川魚で作ることと、三枚におろした魚の身を細く刻んでしまうことである。そして日本のタタキのように、葱やギョウジャニンニクを混ぜ合わせる。このような料理は魚の種類にかかわらず、

ツングース系の言語で「タラ」、ニヴフ語で「タルフ」と呼ばれている。タラにするのは、夏から秋にかけて捕れるもので、コイ、マス、チョウザメ、カワカマス等である。捕りたての魚をナイフで鱗を取除き、火に軽くあぶり、湯どうしにして、皮をむく。尾の方からナイフを入れ、刻んだ細葱と少量の塩を混ぜ合わせて出来上がり。日本人には醤油で食べると最高においしい。ウデヘ(族)の人々も今は韓国から醤油が入って来ているので、醤油にタラにつけて食べるとおいしいことを知っている」とあった。

余話・「伝説・神話」をオクラードニコフに語った古老の話 実 は 魚料理を出してくれたお店は、シカチ・アリヤンの「伝説や神話」を語ってくれた老人の末裔の方であった。A・P・オクラードニコフは 1935 年(昭和 10 年)アムール川下流に調査に入っている。後の 20 年後(昭和 34 年・1959 年)の 5 月、ハバロフスクから再度調査に入る経緯となっている。老人と出会った時の「石の溶けたとき」の章を読んでみる。

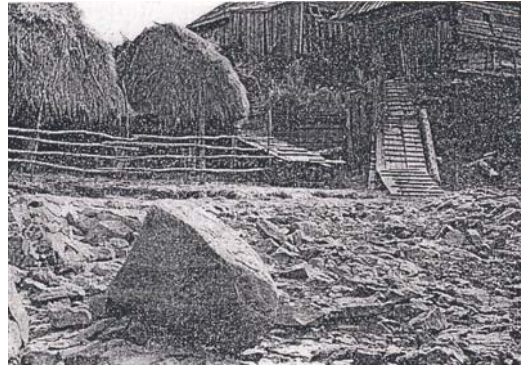
《・・・密生した灌木や草のなかから黒雲のように“蚊”が舞いあがってきた。遠くからいかにも牧歌的に見える緑の岸辺は、夜間でも、休むことも眠ることもできず、全く身の置きどころもない有様となった。・・・蚊のために疲れ、すっかり不機嫌になった私たちは、夕方、断崖状の岸に着く、その上に遠くから見るとニワトリの脚に乗せられたようなナーナイ人の杭上仮小屋が建っていた。ナーナイ人の一老人が入口の所にしゃがみ、今しも地平線にかくれようとする最後の夕日を斜めに受けて、長い煙管^{きせる}でタバコを吸っていた。・・・私たちは、部落の長老の家で、その主人から快く迎えられた。この長老は、ナーナイ人古来の伝説や神話をよく知っている人として、部落の外部まで知られていた。私たちはハバロフスク博物館と地理学協会支部で、すでに彼に会うようにすすめられていた。老人は私たちが考古学者で、ナーナイ人の昔のことに興味を持っていることを知り、大へん喜び、生き生きと眼を輝かした。彼は、自分の少年時代に、外国人がやってきて古い半地下室の跡を掘り、魚の描かれた外国製の土器片を発見したことを語った。・・・巨大な岩塊があり、その平らな表面には、広い角をかざしたシカのリアリスチックな像(24～26 頁岩絵参照)が刻まれ、その胴体には渦巻き模様が見られた。・・・」と述べている。

実は、筆者は個人旅行のため、ロシア側旅行社との打ち合わせに筆者の説明不足があって、このシカチ・アリヤン村で、オクラードニコフと老人が「伝説・神話」を語

った場所であったことを、不覚にも分かったのは帰国後のこと、歴史的にも貴重な場所であった所を、後の祭りとなった次第となる。故に、老人の写真は撮った迄はよかったが、名前も聞かず、今回の旅の取り組む心構えが不足しておりました。



③①



③②

③①・現在は末裔の方が観光レストランを経営している。アムール川本流から入江になっている旧集落地となっている。ナーナイ族のシカチ・アリヤン村を舟より撮影した。 ③②・オクラードニコフが老人と出会の岸辺を、オクラードニコフが1959年にこの場所を撮影したものである。



③③



③④

③③・神話を語った老人

③④・『ОТКРОВЕНИЕ』「啓示」「新発見」の書籍

神話伝説等の書籍、(『ОТКРОВЕНИЕ』=啓示と訳すと人知では知ることのできない神秘、神自らが人間に対する愛を語り示す。又天が真理を人間に示す天の啓示・天啓。その中に新発見の意味合いも含むようだ。)

第3章・韓国・中国・モンゴルの壁画を概観

韓国・盤亀台岩壁画



図①

①・盤亀台岩壁画遠景『盤亀台岩壁彫刻』東国大学校出版部 黄壽永・文明大著 1984年より

盤亀台岸壁画彫刻遺跡(バングデアムガックァ)は、1970年に発見された川前岩壁画とその翌年に発見された大谷里岩壁画の2つの遺跡からなっている。いずれも当時東国大学校の文明大氏らによって調査され、その詳細な報告は1984年に『盤亀台岩壁彫刻』として出版された。盤亀台の調査は韓国における岩画研究の最初の発表のもので、そこに表現されているものは、盤亀台岩画の巨大な鯨の群れやレントゲン技法で描かれた虎や鹿類などの多くの海や陸の動物、あるいは舟や弓を射る人物や男根を表現した「踊る人物」とされる人像が多彩であり、造形的に優れた描写力が注目を集めた。しかしながら、これ等の画像と環日本海沿岸地域に広がる岩画との比較研究は殆んどなされていない。日本側においてはクジラ捕鯨の歴史には貴重な資料となっている。

岩画の配列や画像は、高さ10m、長さ50mに及ぶと推定され、全体像の意味を解明するための基礎的調査はできている。特に鯨についての多彩な表現はこの遺跡特有の図像といってよいものである。鯨の図像は腹をみせているものや、舟で鯨漁を行っている場面もあり、鯨に対して特別な関わりを持った集団の祭祀の場であったらしい。おそらくこれらの図像を残した集団は、日常的に海岸部寄りに居住していたとみられる。そして陸獣の猟も季節的に行っていた鯨集団であろう。遠距離航海を自由に行動できる舟の操船技術を持っていたことを、捕鯨の舟から鉈を投げた図柄の存在を文明大氏が明らかにしている。

北海道根室市に於いても1200年前のオホーツク海沿岸を中心に勢力を持ったオホーツク文化期の骨製針入れに描かれた鯨の図像とも酷似している。(写真39頁参照)

これらの事から、鯨漁を頂点とした信仰体系を持つそれぞれ異なる捕鯨集団が、日本海からオホーツク海、ベーリング海に至る広範囲な海域世界に存在した可能性が考えられる。岩刻画が果たした機能は、環日本海沿岸地域に広がる岩刻画という共通の文化遺産についての総合的な検討が今後求められる。(日本海学推進機構・日本海学グループ支援事業・「環日本海における先史時代の岩画の研究」大塚和義著より抜粋)

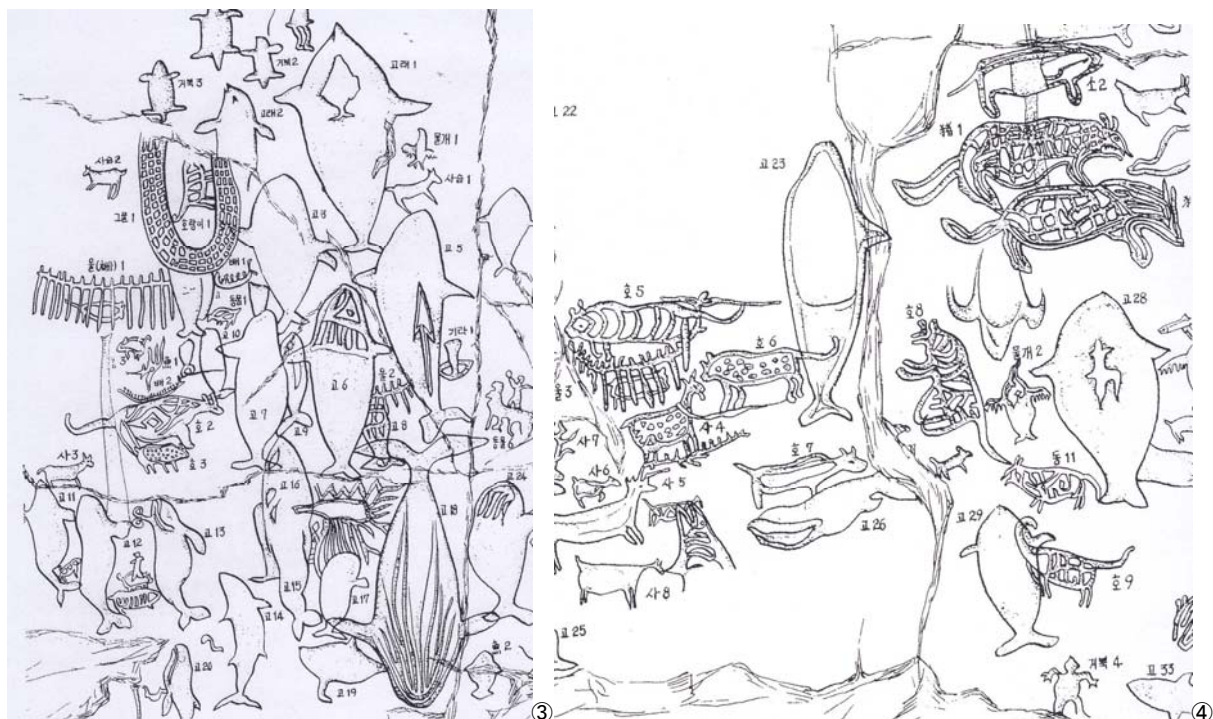
大谷里岩刻画・国宝第285号 ウルサン 蔚山市蔚州郡大谷里にある国宝第285号の、盤亀台岩刻画は大谷川の下流にある、巨大な岩壁に彫られた先史時代の岩刻画である。この岩刻画は1974年、東国大学の文明大(ムン・ミョンテ)教授の発見によるもので、盤亀台岩刻画には人物像、虎、鹿、猪、鯨、オットセイ等、300余りの動物の絵が彫刻されている。この岩刻画は新石器時代後期(紀元前8000～)から青銅器時代(石器時代の終盤、中国では紀元前3100年～より始まる)の間に製作されたと思われる。



図②・大谷里岩壁彫刻全景・絵図の両サイドつめている

図②の岩壁は幅10m×高さ4mに及び、この岩刻画を観察すれば、先史時代に朝鮮半島に住んでいた人々の生活が分かるのである。性器を出して踊る男、鯨を捕獲する人、落とし穴に墜ちた虎、交尾する猪、銛に刺さった鯨、潮吹く鯨、当時の暮らしおも描かれている。巨大な岩壁に精密に描かれていることは、世界的にも珍しいことである。豊穡を願う当時の人々の想いを表して、特に捕鯨の写實的に描写しているこ

とは、岩刻画の描き方は、鯨の種類を見分けていたようである。また捕鯨舟で捕鯨をしている様子の描き方は驚きである。

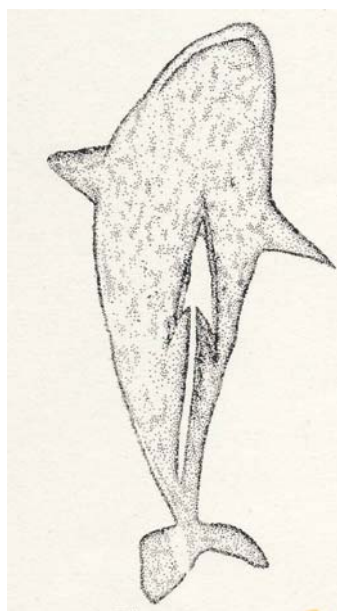


図③と④は図②の大谷里岩壁中央部分図を拡大図にしたもの

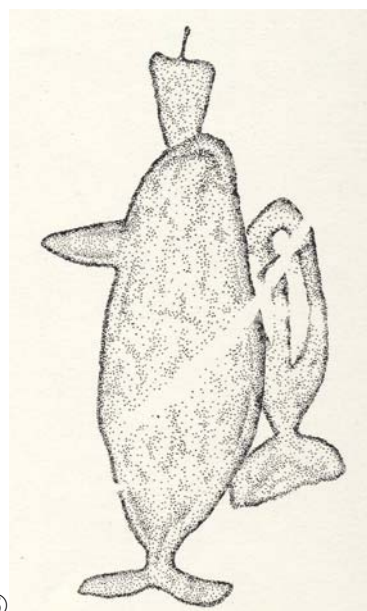
고 5 (図③の 5 参照)

고 7 (③の 7)

고 6 (③の 6)



⑤



⑥



⑦

図⑤・鯨が刺さる(5)

図⑥・コククジラ(親子)(7)

図⑦・オキアミを獲る鯨(6)

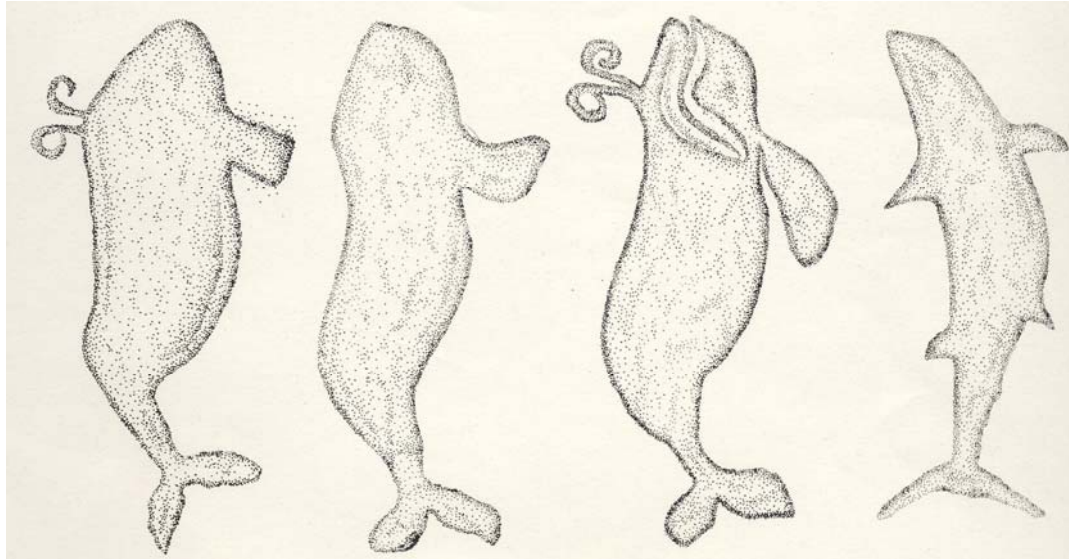
(※고=と・訳)

※図③・大谷里岩壁彫刻番付 고 11

고 12

고 13

고 14



図⑧・セミクジラの潮吹きか コククジラ スナメリの潮吹きか シャチか

韓国南部では 縄文時代晩期から弥生時代にかけての時期に、捕鯨が行われていたことは、日本海側や北九州や日本の西の地域等で、捕鯨が行われていることが充分考えられている。盤亀台岩刻画の発見以前に、北九州の古墳時代から、捕鯨図らしき壁画は知られていたが、この鯨岩刻画の発見により、日本に於いて捕鯨図がまさしく捕鯨を描いたものである可能性が出てきた。韓国南部から北九州にかけての海岸地域や能登半島や富山湾側に鯨の骨が出る確率が高いことは、イルカや鯨が漂着しやすい湾となっていること、あるいは捕獲しやすかった条件下にあったと想定している。

『古事記』、『日本書紀』にスルガ(敦賀)・鯨に関する記述がある。たとえば、敦賀という地名はイルカが集団漂着して、浜が血だらけになったことに由来するらしい。又久米歌には、《山で「シギ」を捕ろうと思ったら「クヂラ」が網にかかった》と歌われているが、山中で鯨が捕れるわけがないから、「クヂラ」は「鯨」を意味するのではな
いか、という説も成り立つ。これ等の情報により古代に鯨漁が行われていたことが、考古学的に明らかになってきた。

遥か昔から鯨を食用や油等の利用していた日本人 北海道を含め、日本海側の地域の縄文時代遺跡より鯨やイルカの骨が出土し、とくに能登半島能登町の真脇遺跡からはおびただしい量のイルカ骨(頭数286頭・遺跡全体では何千頭埋まっている未知数・1頭で170人のステーキ453gが取れる)が出土されている。縄文早期、約9千年～6千年前から鯨を食べ、5千年以上前からイルカ漁も行われ、北海道オホーツク

文化では鯨漁が行われていたことは確かである。この時代には捕鯨が積極的に行われ、鯨の脊椎骨(背骨)を製作台として利用したため^{あつこんせき}圧痕跡(圧力の跡)が文様のように残った縄文土器(鯨底)が九州地方では50ヶ所余りの遺跡から出土している。北海道根室市で鳥骨製針入の絵図は2本のモリ、2本の綱、数人のこぎ人が見える。(「釧路と鯨」釧路鯨協議会より)

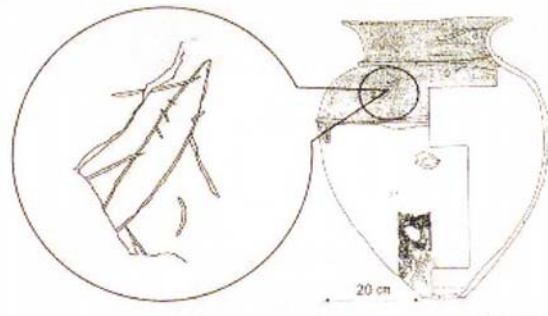


図⑨

⑨・鯨とりの絵・根室市弁天島出土・長さ8・3cm、中は空洞、骨の針をいれていた道具



図⑩

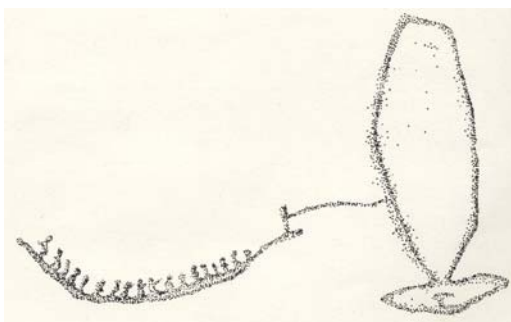


図⑪

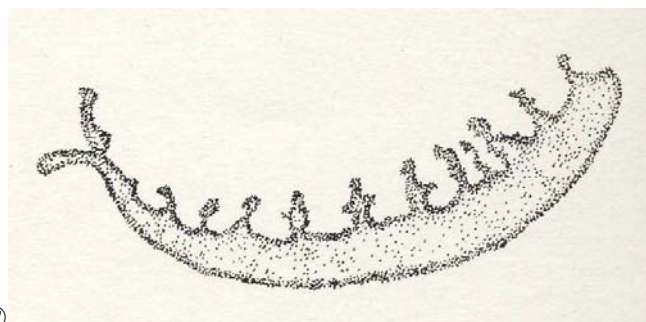
⑩・網にかかる鯨に鉋を撃つ捕鯨図「小川島捕鯨絵巻」(佐賀県唐津)寛政8年(1796)。

図⑪は壱岐市(島)「原の辻遺跡」(弥生時代・1世紀)から出土したカメ棺(遺体屈葬壺)に捕鯨の様子を描いた線刻画が見つかった。流線型の鯨体に数本の鉋か槍が突き刺さったような絵がえがかれている。(「鯨の歴史学」より)

韓国・大谷里岩壁の捕鯨の彫刻絵図



⑫



⑬

⑫・大谷里岩壁彫刻・鉋を用いた捕鯨図

⑬・大谷里岩壁彫刻・10～11人乗員は外洋図か

図⑫は18人漁師がのる大捕鯨となる。図⑬乗り手は11人か、外洋の海獣猟か。

陸獣の岩画・大谷里岩壁動物彫刻

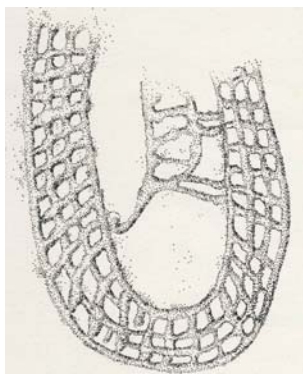


図 14

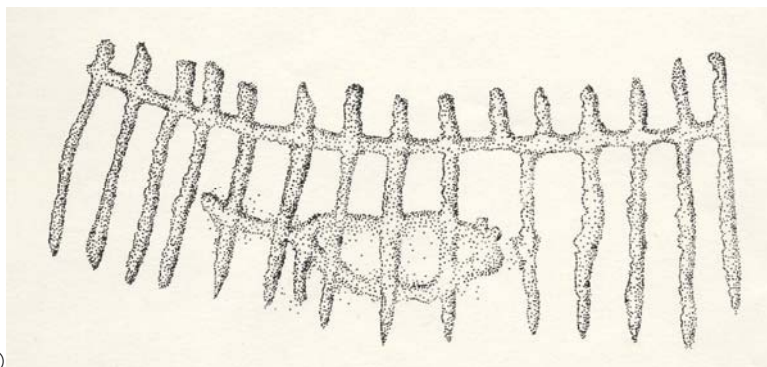


図 15

⑭・動物を投げ網による猛獣捕獲図

⑮・動物の柵枠の捕獲図か

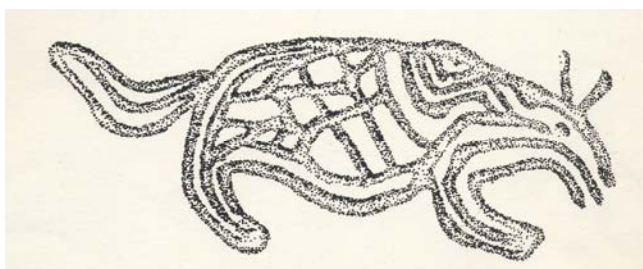


図 16

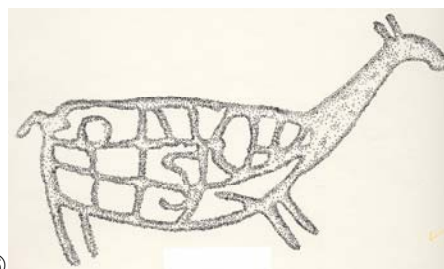


図 17

⑯・イノシシ・外線彫りは丸曲線の透視図、頭を下げて前後の足を合わせている。 ⑰・鹿絵、首は長く腹は楕円形、足は短い、体の内部の内臓を表現する透視図。頭胴 25 cm 尾 9 cm

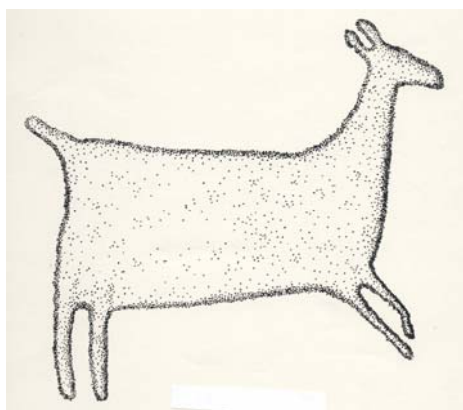


図 18



図 19

⑱・鹿・周囲に比べ大形、前足は曲げ後ろ足は立足全長 36 cm

⑲・立鹿の透視図、全長 24、5 cm



図 20

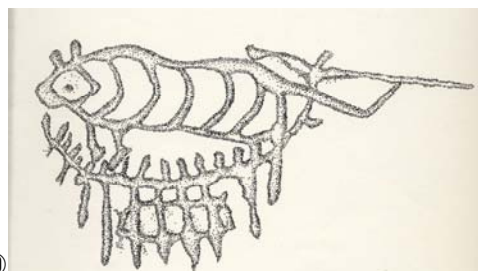
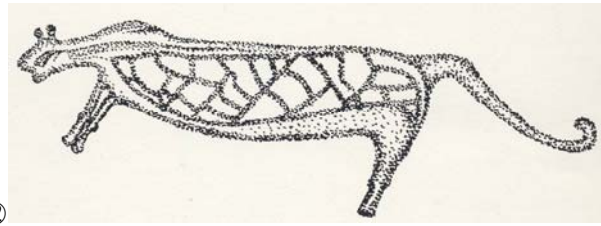
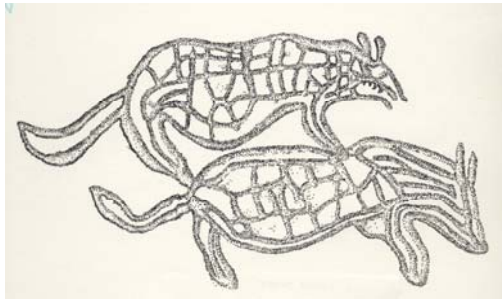


図 21

⑳ネコ科の豹か虎か新石器時代は食用、全長 14、5 cm

㉑虎囲い猟の見姿、縦縞囲いか全長 32 cm



②②・猪・上オス(39、5 cm)、下メス(42、2 cm)の正確な交尾描写図と断定。 ②③・虎であるが豹にも見える。口から生命線が描く透視図。頭胴 30 cm、尾 11 cm。

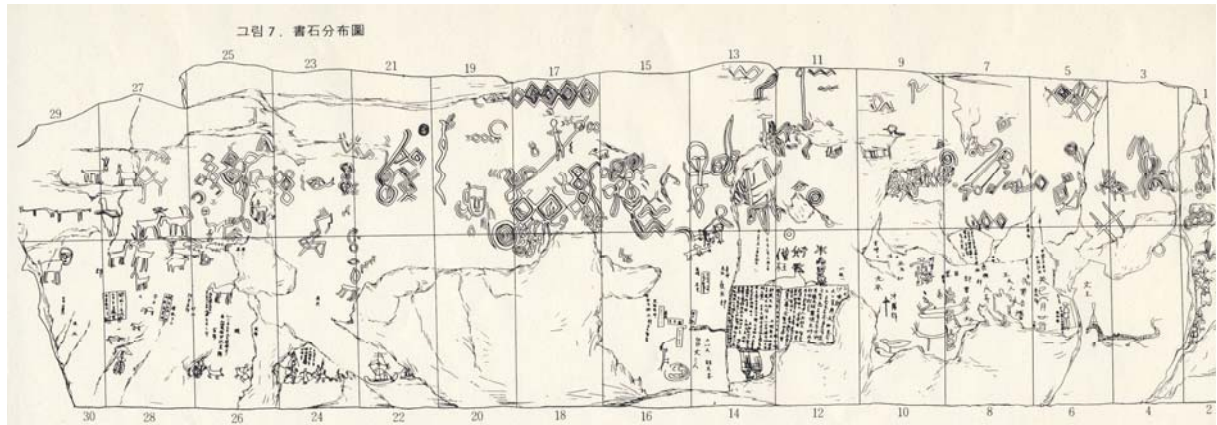
韓国の岩壁画 盤亀台岩壁画以外に岩刻画が多く確認されているが、やはり盤亀台岩壁画の表現方法の面白さは一番で、国宝 285 号を受けるに十分な作例である。上記の刻画で見るように、鯨、イルカ、海獣、虎、鹿、豹、山羊などの陸獣が具体的に描きだされている。網にかかった鯨や魚、その網を引く舟の様子、鹿に向かい弓矢を構える人物の姿など、当時の人々の狩猟や漁労の様子が生き生きと再現されている。又動物の体内を透かして描写する表現技法見られ、実物の観察に基づいた写実的な表現によるものと理解できる。性器を強調した人物像、孕んだ鯨や羊、子連れの鹿などの表現は、世界各地造形に見られる人間として最も素直な感情表現と多産と豊穡を祈るものである。韓国の岩刻画の存在意義は、朝鮮半島にとどまらず、シベリアのアムール川流域の岩刻画と共通するという指摘がある。遙か昔、内陸アジアで起こった、民族大移動の足跡を伺う資料ともみなされる。朝鮮半島の人々も何処からやってきたのか、その源流を知る上で興味深い。(『国の国宝』水野さや著・ふくろうの本・2011 年より)

川前里刻画・国宝第 147 号

川前里刻石画は盤亀台岩刻画から約 2 km、離れた所に位置している盤亀台岩刻画より早く 1970 年に発見された。川前里刻石画は上下 2 段に分かれ、上部には鹿などの各種動物や、多種多様な幾何学模様が刻まれており、縄文時代末から弥生時代のものと推定されている。農業耕作が始まると、各種の幾何学模様に天候を左右する神秘的な力があると信じられ、岩壁に刻んで豊作の祈りを捧げた場所と考えられている。

下部には馬や鹿、龍などの他、騎馬行列や航海する場面などが描かれており、絵に交じって文字も刻まれている。文字の中には、新羅王室からこの地を訪ねた記録や、新羅の花郎(人材育成の青年組織)の記録もあり、その他、官職名や政治体制に関するこ

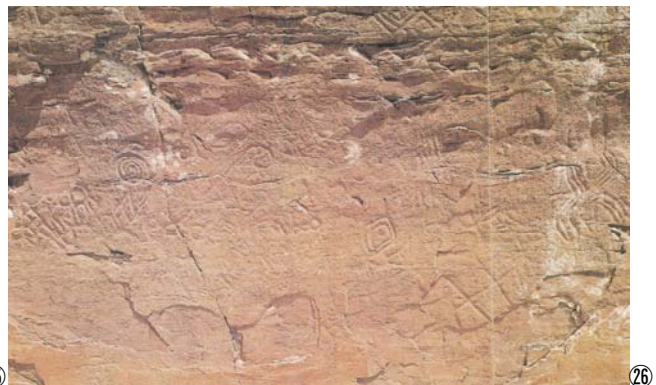
とを言及している。又、6世紀頃の新羅社会の研究に寄与している。この川前里刻画は、複数の時代にわたり、それぞれ異なる技法で多岐にわたる記事が含まれ、時代を超えた人々の生活や思想が垣間見える岩壁刻画となっている。



図⑭・書石分布図



②⑤・図⑭の書石上段部 1 5 あたり



②⑥・図⑭の上段 5、7、9 あたり

人類共通の財産である盤亀台岩刻画と川前里刻画は、2010年に周辺の文化歴史の景観と共に「大谷川岩刻画群」として世界遺産にリストに登録されている。現在、盤亀台(バングデ)岩壁画に人が接近することは禁止されている。(ダム湖となっているため) 100mほど離れた所から望遠鏡で見える方法でしかない。よって世界文化遺産の登録には、ダム湖の水位の高低レベル問題もあり、政治的判断が必要とされている。

中国・賀蘭山岩壁画 中国遼寧回族自治区・賀蘭山の岩画

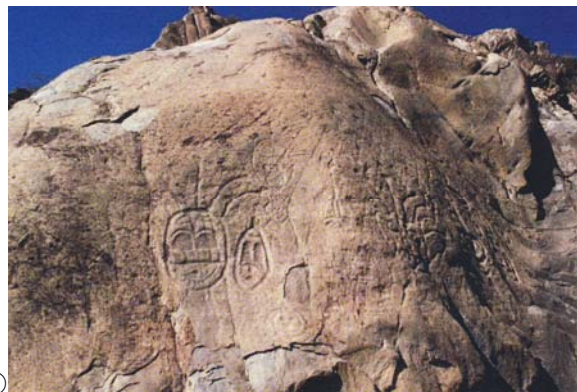
賀蘭山^{がらんさん}は遼寧省と内モンゴルにまたがる全長250km、最高峰3556m、古代よりこの地の人々に、神の山と崇められている駿馬の形をした山脈となる。この賀蘭山には大小27地区に岩画あり、その代表的なものは賀蘭山入り口である。銀川市^{ぎんせんし}内より50km、海拔1500mの溪谷に、600mにわたって千個の岩壁画が彫られている。

壁画には太古の昔、3千年～1万年前の人々の暮らしや、狩猟、祭祀、戦い、娯楽などの場面が描かれている。岩刻画は、奇想的なもの、神秘的なものと、人面像が半分を占め、牛、馬、ロバ、鹿、鳥、オオカミ等の動物刻画となっている。当時の人と動物、家畜との生活ぶりもうかがえる。数千年前の古代女性の美の追求、奇想な身の飾り方や、人の手や太陽の画面の原始宗教活動場面が誇張されている。

岩刻画の描かれた時代は長い年代を経過しているが、大部分は^{しゅんじゅう}春秋戦国時代(紀元前778年～紀元前206年、秦が中国を統一するまで)とされている。



①



②



③



④

中国写真図①、②、③、④は賀蘭山の岩刻画となる（「賀蘭山の岩絵・遊牧民の古代の画廊」より）

賀蘭山の「壁画」は中国雲南、広西地方の壁画は赤い顔料を使って描くものが多い。

賀蘭山は寧夏平原西部の壁画で、古くから匈奴、突厥、党項(タングート族)、トルファン、モンゴル等の古代民族の活躍の場でもある。この地域には10カ所の岩絵が発見され、古代の人々の生活や宗教儀式が伺える。古代賀蘭山地域は諸民族の重要な史料となっている。

中国・雲南省の岩絵 東聯村(トオンリアン)、蒼山(ツァンスェン)滄源(ツァンイェン)、麻栗坡(マリポー)、金沙江(チンサアジャン)流域の岩絵となる。

筆者は現地未見なので、『中国雲南・岩絵の謎』ボン・フェイ編著、雲南省博物館協力・祥伝社・1995年、を参考とさせていただいた。

雲南省は中国の辺境に位置し、中国の56民族中、26の民族が生活している省である。雲南と日本の驚くほど共通性の文化が見られる。雲南少数民族文化と日本文化の共通点については、これまでも各方面で研究が重ねられていて、例えば「鳥居」・「てんぷら」・「赤飯」・「断髪」・「お歯黒」・「^{かんとうい}貫頭衣」・「入れ墨」・「下駄」・「畳」・「若者宿」・「^{うたがき}仮面」・「歌垣」等は日本の文化・風習に通ずるものは多くあるのである。

岩絵の由来を示す神話 雲南の瓦(ワ)族に岩絵伝説が残っている。それによると、《太古に、上帝が天地開闢^{かいびやく}後、岩洞で人間を見つけた。当時の人間は体格が大きく、食べる量も驚くほどだ。一食で一籠の食糧をたいらげた。一口でご飯を入れる竹で作った筒までも飲み込んでしまう。最後には木の葉や草も全部食べてしまった。上帝は「やがて洪水が起きる。各自で早く木舟を造りなさい。そうしたら災難から免れる」と命じた。しかし、人間は洪水を恐れ^{あふ}ない。「もし平地が水で溢れたら、山に登ればいい。洪水が大きな山をも襲ってきたら、山の木の上に登ればいい。たとえ、我々が洪水を避けられたとしても、やがて餓死してしまうだろう。そうであるなら、次の世代にどのように生活していくかの教訓を残さなければならない」、人間はこの様に言うと牛を殺し、牛の血と赤色の鉱石粉を混ぜて、岩の上に絵を残したという。》という伝説が残っている。

雲南の岩絵 描かれているものは植物よりも動物が多い。魚類はほとんど見られず、草食動物の野生のヤギ、シカ、牛が中心で、家畜動物はいない。雲南の岩絵は彩画を中心に描かれており、この点からも注目される。



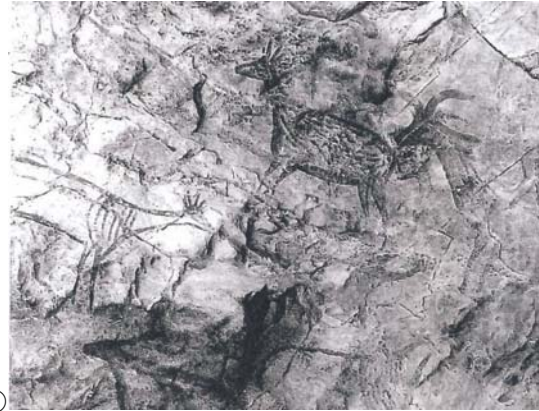
図⑤

⑤・蒼山・7人の舞は頭に装飾物を着けた人間が水牛を追いかけて、棒を高く上げて舞う様子を描く

狩猟の場面を描く岩絵が多く見られるが、これは単に狩猟技法を描くものではなく、^ふ巫(呪)術の意味もあると思える。巫術を用いて野獣を捕えることにより、多くの獲物を獲得することを祈念したものであろう。



⑥



⑦

⑥・宝山郷(パアウサエン)高寒花衣村(ガオハエホアイツァン) ⑦・同所・野生ヤギの獵か

図⑥はヤギ亜科の野生動物、発見された岩絵の中で珍しい平塗りとなっている。

図⑦は宝山郷高寒花衣村の野生ヤギ獵の図の岩絵。



⑧



⑨

⑧・蒼山(ツァンスェン)岩絵、戦いの図か

⑨・滄源・右側に尾の長い野牛の捕獲の図か

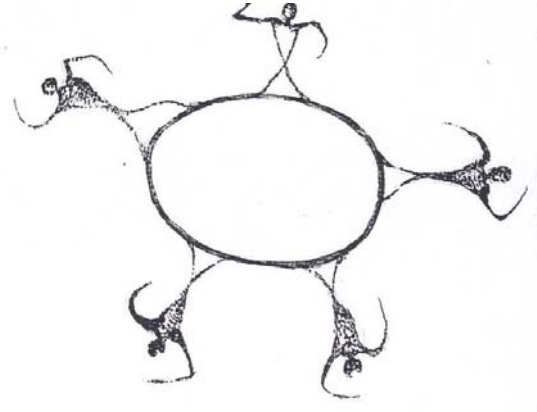
雲南岩絵の二大分類 雲南の岩絵の内容を大きく分けると、原始宗教を描いたものと、生活写実を描いたものの2つに分けられる。原始宗教的要素のものは、自然崇拜、トーテム信仰(ある特定の動物・植物等の儀礼的、神秘的な関係を「始祖」と考える)、祖先信仰などを示すものがある。生活写実としては、祭祀・狩猟・採集・農耕・衣服・居住などである。図⑤・の7人舞は、頭に衣装物をつけた人間が、水牛を追いかけて、棒を高く上げながら舞う様子が描かれている。この岩絵は祭祀活動に特有な動作、カエルの形をしている舞も見られる。これは単なる狩猟技法を表すものではなく、^{ふじゅつ}巫術(呪術)の意味と考えられ、巫術を用いて野獣を獲得することを考えていたのであろう。

岩絵は極めて神聖な崇拝物で、決して岩絵の上に落書きなど、書くことは許されない環境にある。そして岩絵の作者は、各氏族の^{かんなぎ}巫師(シャーマン)であろうとしている。



⑩

⑩・滄源(ツァンイェン)岩絵、一番右の人物は
羽毛を挿^さしていて身分が違^{ちが}うようだ



⑪

⑪・滄源・片手を上げ、片手を下げて舞う5人舞
の儀式か、神に捧げる歌舞か

モンゴルの岩刻画 モンゴル・アルタイ山脈の岩刻画群は、3カ所の岩絵遺跡群(バヤン・ウルギー県)が対象となっている。紀元前1万1千年～西暦9世紀頃まで、北アジアの生活様式が岩刻画に残され、葬礼文化(葬儀)と結びつく塚も数百カ所が存在し、その多くが岩絵となっている。岩絵は数千点「モンゴル・アルタイ世界遺産」となっている。(2008年7月筆者が撮る)



⑫

⑫・モンゴル高原鹿石、日本の縄文期の環状列石に類似のお墓



⑬

⑬・石碑に鹿の絵が描かれている

この遺跡はモンゴル中西部の北側、フブスグル県の県庁所在地ムルンの西側20kmの所にある。

^{しかいし}**鹿石**・ 飛翔する鹿模様が彫られ、モンゴル高原に鹿石と呼ばれるも石碑となっている。高1～3mほどの方柱状の石に鹿などの絵が彫られている。その鹿の図絵から初期騎馬遊牧民文化との繋がりを早くから考えられていた。しかしE.ノヴゴロドヴァの

研究により、鹿と共に彫りこまれた剣や戦斧などの武器が、商代、西周時代に併行する中国北辺のものや、夏家店上層文化のものと類似することが明らかになっている。

前 2 千年紀の後葉から前 1 千年紀前葉の鹿石が彫刻されていて、草原のモンゴル高原において最も多く発見され、すでに 500 個を超えている。（「北方ユーラシア遊牧民部社会の考古学的研究」金沢大学より）



⑭



⑮

⑭・「東北アジア史と手宮洞窟」「その歴史的位置付け」菊池俊彦・佐原真より・モンゴリアの岩壁画・A・Pオクラードニコフ『内陸アジアの岩壁画』レニングラード、1980 年。 ⑮・モンゴル高原「鹿石」遺跡の近くの岩絵を撮る・2008 年筆者による。



図 ⑯

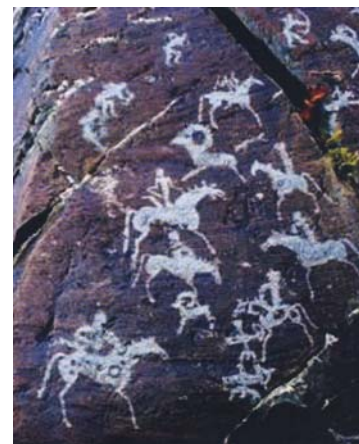


図 ⑰

⑯・モンゴル・アルタイの岩絵群（アジアの世界遺産・モンゴルより） ⑰・7～9 世紀のテュルク系民族（トルコ系）の騎馬像と見られている。

第4章・キルギス・パキスタンの岩刻画を概観

キルギス岩絵野外博物館 キルギス・イシク・クル湖畔



①

①・正面はイシク・クル湖眺望、奥に微かに山脈が見える 2007 年筆者による



②

②・イシク・クル湖畔の岩々が岩絵野外博物館となっている

イシク・クル湖 天山山脈の北、キルギスの北西に在る内陸湖となる。古称は熱海(呉音・ねつかい、漢音・ぜつかい=湖面は凍結しない)は、東西 182 km、南北 60 km、面積 6236km²(琵琶湖の 9 倍)、水深 668m(世界で 2 番目)となり、冬季でも凍結しないわけは湖底に温泉が湧き出ている説がある。

湖沿いを歩いた玄奘三蔵は「ここには龍が住んでいる」と『大唐西域記』(646 年・中央アジアからインドにわたる 110 か国歴訪の記録・12 卷)に記述がある。

この湖は不思議なことに、流れ入る川は多数あるが、湖から外に流れ出す川は一つもない。湖底からはカサ族(イラン系遊牧民族)や烏孫族(紀元前 161 年～5 世紀にかけて遊

牧国家樹立)の土器や青銅器が出土している。イシク・クルの湖底には、多数の遺跡が水没している事が確認されている。潜水調査では、石臼や剣の家、住居跡の土塁、人骨が見つかった。古代には湖底面が低く、湖面よりかなり低い所に集落都市が存在してようで、その遺跡が水没して残されている。陶器片も出土し、湖底には遺跡が668mの間に、街跡が数世紀の段階にわたってあるという。湖水は外に流れて出ないので、湖底に古代の都市もあったことは容易に想像できる。昔の文献によれば、この湖には少なくとも16世紀頃までは島の存在があったと伝わるが、現在はその島や城の姿は見え、今ではその面影は伝説となっている。

岩絵野外博物館 チョルポン・アタの北西の山の斜面に、大小さまざまな岩塊がごろごろしている所に岩絵は見られる。岩絵の多くは紀元前8～5世紀のサカ族によって彫られたもので、約900個あるという。山ヤギ、鹿、雪ヒョウ、狩人などが描かれている。「サカ族」とは、紀元前6世紀頃から中央アジアに現れるイラン系の遊牧民族であり、サカとはペルシア側の呼び名で、古代ギリシアでは「サカイ」と呼んだ。



③・岩絵に山ヤギ5、6頭描かれている



④・アイベックス・野生ヤギ岩塊画



⑤・山ヤギ (ヤギ属には数種ある)



⑥・アイベックス(野生ヤギ)の図

パキスタン・フンザ、ギルギット、チラス岩刻絵

パキスタン・カラコルム・ハイウェイ
 に行く。パキスタンの首都イスラマバードから、カラコルム・ハイウェイで北上し
 チラスまで 480 k m、ギルギットまで 620 k m、フンザまで 730 k m の絶景の街道とな
 っている。パキスタンと中国を結ぶカラコルム・ハイウェイ (1978 年開通) は、古来より
 パミール高原とインドを結ぶ重要な交易道となり、紀元 399 年に法顕^{ほっけん} (337 年～422 年・
 『仏国記』、『大般泥洹経』^{だいはつねはんぎょう}・釈迦の入滅の叙述の經典類の総称) 6 巻、『摩訶僧祇律』^{まかそうぎりりつ}・教団の規
 律』40 巻など) はこの道を歩いている。



カラコルム・ハイウェイ・1300 k m

インダス川・左カラコルム・正面奥ヒマラヤ山脈

フンザの岩刻画



フンザの岩刻絵はアイベックス (野ヤギ) が多く見られる (2007 年筆者が撮る)



「フンザの神聖な岩」このエリアは地元住民の為の神聖な場所となり動物の彫刻があると説明がある

チラスの岩刻画 カラコルム地方は紀元前後から5世紀頃まで、仏教徒や遊牧民族の行き交う交通路であり、インダス川・フンザ川の渡し場に多くの仏教刻画が見ることができる。これらの岩絵の前を往来した隊商、仏教徒、遊牧民、地元民、戦いの兵士たちが、道すがら描き残したものである。インダス川対岸には、3万点を超える刻画があり、チラス周辺に仏教刻画が多く見られる。岩塊は花崗岩、その表面の風化層を削って描かれ、先史時代に描かれたものは全体の5%、おもな題材は動物タイヘックス(野生のヤギ)となる。

紀元前後、1世紀初頭頃のクシャーナ朝時代にガンダーラ文化の最盛期の仏像やストゥーパ(仏塔・釈迦の遺骨一部を納めた塔)が刻画されている。刻画を見た場所の感想は、日本で言う処の「川の渡し」の様な場所に多く描かれており、大乘仏教の信仰心ばかりでなく、一般人の渡河往来の安全祈願に描かれているように思われる。現地の説明パネルには、「^{ほとけ}仏や^{ぼさつ}菩薩は5世紀頃。(仏教の通過は1世紀頃)写真②の瞑想する仏の岩刻画には仏舎利塔の左側に、ガンターラ様式のハスの玉座に坐っている。右側のハスの玉座に坐って、2人の^{もんじゅぼさつ}文殊菩薩の立ち位置がある。仏舎利塔は鑑賞用の仏刻画で飾られた形状です。」と解説がある。



①



②

①・②チラス・仏像、仏塔等が描かれている、行き交う人々に説教したものなのだろうか



③



④

②・③法輪の図 (仏の教え、仏法が人間の悪を打ち破り追い払う武器・円輪をたとえたもの)



⑤



⑥

⑤・⑥チラスの岩刻画・仏陀、法輪、ストゥーパ(塔)が描かれている



⑦



⑧

⑦・⑧シャティアールの岩刻画・仏陀像や仏塔が描かれている

①～⑧まで筆者による・2007年3月（関心のある方は拙著の電子書籍『仏教伝来の物語』参照）

余話・横道の風景



中国側からパキスタン側の検問所に入るが緊張感はない。パキスタン側の職員はユキヒョウ抱っこして、バスのお客さんに見せていた。右の女性は日本語ガイドさん。

第5章・フランス・スペインの洞窟壁画を概観



図①

① アルタミラ洞窟の外風景、大天井画部屋上より見たピコス・デ・エウロ山地



図②



図③

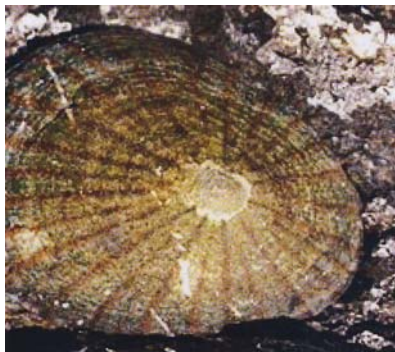
②・アルタミラ洞窟最奥部「馬の尾」全景

③スペイン・エル・カステージョ洞窟の手形

図①と②は『アルタミラ洞窟壁画』（アントニオ・ベルトラン監修・岩波書店 2000 年）より転載。図③は News・旅&文化より転載。

図①のアルタミラ洞窟の外の風景はなんとも居眠りが出るほどの牧歌的な、そして平和的な風情である。図②はアルタミラ洞窟の最も奥深い所に、木炭の黒色でウマの絵、「馬の尾」の洞窟全景の部屋となる。洞窟の床面遺物のカマドを掘ると、カサガイと小さなタマキビガイの貝殻が出て来る。海の距離は 3 km と近く、海産物資源として食料にされていたらしい。カサガイは波うち磯の岩に固く付着している貝で、タマキビガイは磯浜ではヤドカリが家にする貝である。この貝で気になることが、この小さな貝を食料にしたと著書にあるが、もしかしたら、この出土した貝類は壁画の顔料(又は液)に使われたのではないかと思われるのである。それは、日本に古くから衣服染め

に、「貝紫染め」(アカニシ貝)紫色に染色する伝統はあるからだ。この貝紫染めは、今から3千年程前に地中海東岸に於いて、フェニキア人がローマ帝国へ、染色材の交易品としていたものであるが、アルタミラ洞窟壁画の顔料に、カサガイとタマキビガイを顔料に混合し、色染め材料として使ったのではないかと筆者は考えたのである。



カサガイ



タマキビガイ・食料に小さすぎる

洞窟画の用いられた顔料は、**赤色**はオーカーと呼ばれる酸化鉄(赤鉄鉱や褐鉄鉱と呼ばれる酸化鉄を含む鉱物をオーカーと呼び、一番多く使用される)、**黒色**は木炭、マンガン、**黄色**は黄色粘土、**白**には白陶土などを加熱処理し、これ等の色粉粉末を動植物の脂肪、人間の唾液等で煉り上げて用いられた。それを指で描いたり、動物の毛ブラシで^{なぞ}擦ったり、動物毛皮で押して色付けをして、ボカシまで着けている。

図③は、スペイン北部のエル・カステージョ洞窟に描かれた手形で、赤く丸模様の手形は、世界最古の洞窟壁画の可能性が高いとされる。年代測定は、世界最古の洞窟壁画と判明し、ネアンデルタール人が描いた壁画の証拠となるかも知れない。イギリスブリストル大学の考古学者、アリスティア・パイク氏によると、4万年前の作画としている。測定結果が正しければ、フランス南部にあるショーヴェ洞窟壁画は3万7000年を超えることになる。そうなればネアンデルタール人の作画の可能性が考えられ、彼等は3万～4万年の時代ヨーロッパ大地を^{かつぽ}闊歩し、我々の祖先ホモ・サピエンスが(10万年説等)アジア大陸に渡り、共存が重なる時期があったと考えられる。

「ガルガスの手」・全体的研究のための試論 アンンドレ・ルロワ・グーランの説を『洞窟へ・心とイメージのアルケオロジー』港 千尋訳「ガルガスの手」の試論を紹介したい。アンンドレ・ルロワ・グーランについては、『研究ノート・アンンドレ・ルロワ・グーランの日本留学』山中一郎著より、ルロワ=グーラン氏は旧石器時代美術研究、先史学者、民族学者の論考を読む。

《・・・ヒトが自然のなかで自然に働きかけることで生の営みを繰り広げてきたと
考え、その営みのために駆使した道具と身ぶりの総体を「テクニーク」と定義する。
そのテクニークは一定の時間の経過にともなって具現化される。それはヒトの行為を
構成する動作連鎖によって具現化されるといえる。この考え方をもって、発掘調査で
えられたデータから過去のヒトの行為を読みとる作業を基礎とする。今日のフランス
先史学のひとつの大きな傾向が成立している。・・・》と述べている。

ルロワ・グーラン氏(1911-1986)は、フランス先史学者、パリ生まれ。「トナカイと
自然環境」との関わりを先史時代から人間の文明史研究の独自の視点、『トナカイの文
明』著し先史学者地歩を築く。アルシー・シュル・キュール洞窟(フランス・ヨンヌ県)
等の旧石器時代遺跡を発掘調査する。とくにキュール洞窟において、描かれている壁
画の意味が、グループ毎に組織されていることや、男女の機能的において相補的^{そうほ}に担
っている事実を突き止め、『男女両性神話説』という学説を提唱した。1937年(昭和12
年)から2年にわたり日本政府奨学金留学生として来日し、専攻は日本民族学、日本の
研究の結実には、『人と物質 進化と技術』、『環境とテクニーク 進化と技術』1945
年に著している。1965年には『身ぶりと言語 技術と言語』、『身ぶりと言葉 記憶と
リズム』を著する。1986年死去、日本滞在中に1000枚の日本での写真を残している。

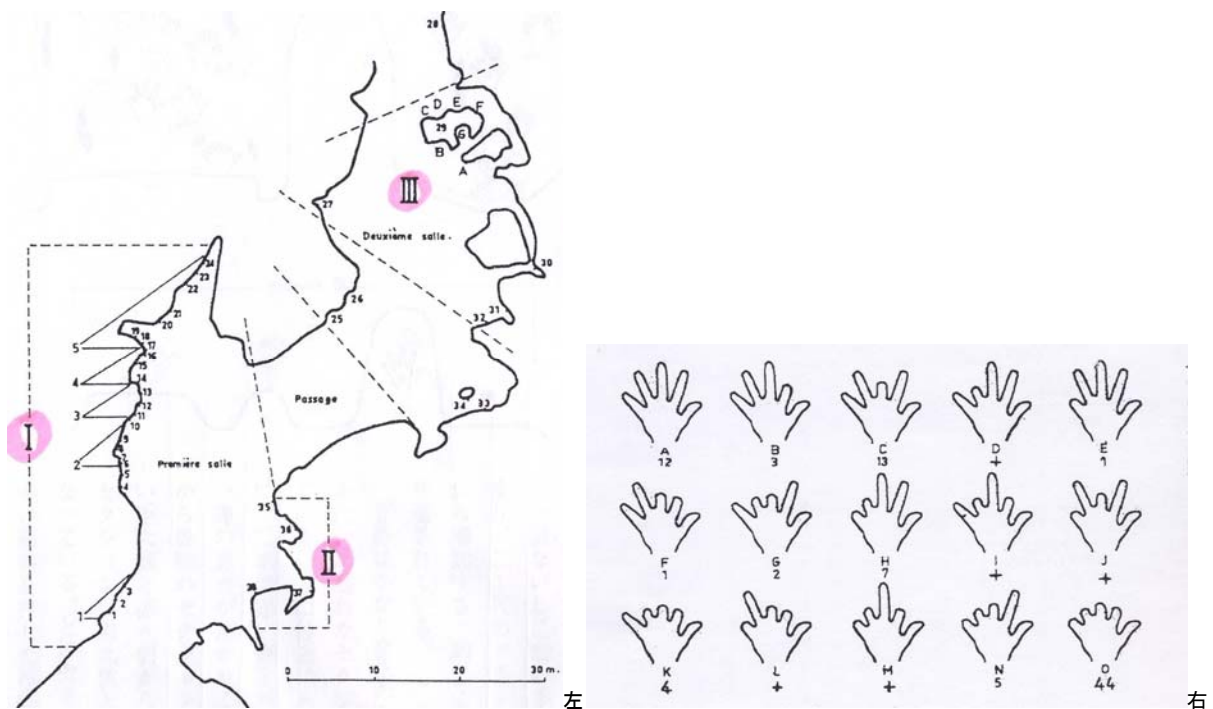


グーラン氏・1938年・北海道平取町二風谷にて(京都大学総合博物館より)

「ガルガスの手」論考を要約で述べる 1906年、カルティヤックがガルガス洞窟内
にある160個の黒色や赤色で隈取られた手について、いくつかの論文を書き、問題を
提起していた。1952年『洞窟芸術の400世紀』で、ブルイユ神父(考古学者)はこの問
題について40行余りを割き見解を要約している。隈取られた150に及ぶ大半が左
手であり、「多くの手は、一本あるいは数本の指が切断されているように見える。」さ
らに「同じように切断された同一の手が確実に、複数例見受けられる」と述べる。

これまでの仮説 未開民族の習慣として、犠牲的な目的のために指を切断の奇習説が多く見られるがこの仮説には2つ弱点がある。1つは切断されている指のバラツキについて考慮していない。切断は無作為なものとする。2つには描かれた手の50%以上において、親指を除くすべての指が欠けていることは異常である。先史学者の説明を精密な吟味もされず、科学的言説の一部になっている。指を切断したものではなく、指を折り曲げたのではないかという仮説である。ガルガスのすべての手を、掌か手の甲を壁にあて、指を折り曲げて描くことは可能である。理論的には色を吹きかける方法や、動物毛皮ブラシで塗る方法である。どのような描き方がされたにせよ、意図的な切断や病気によるものと認めたとしても、1つには洞窟全体として見た場合の図像群の配置パターンがあり、2つには指のパターンがある。これら手形が、何らかの意図にしたがって配置されている仮説を退ける理由はない。

指のパターンを考える



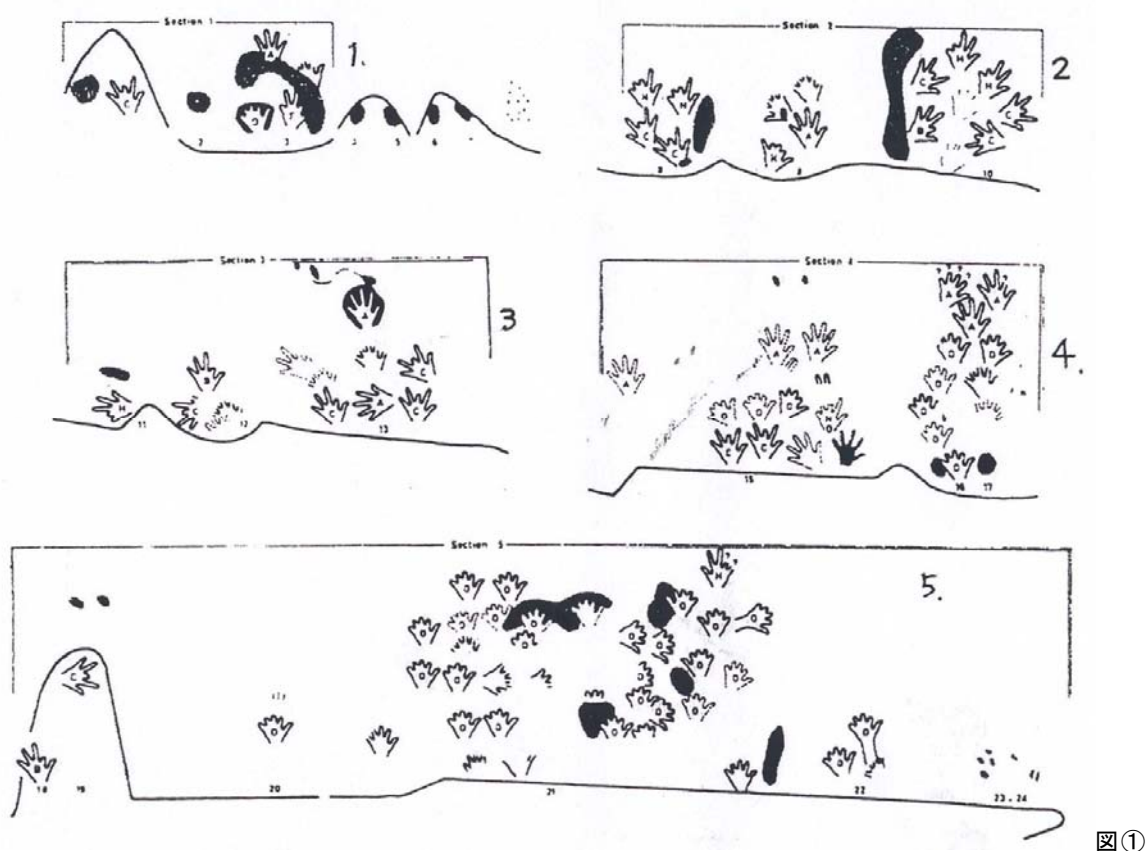
左・ガルガス洞窟見取り図・手と記号が3つの群に分かれる。 右・指の形と頻度の表、十印は描かれていない形親指と人差し指を曲げた形は、2行目のGとなるが、これも描かれていない。

判別できるものが全体の約半分として、ほぼ例外なく、指の欠損はすべて第2関節以上である。研究過程に於いて指の組み合わせ規則を作る際には、どの指が欠けているかを注目した。親指が切除の対象になっているものは一つもないように見える。そ

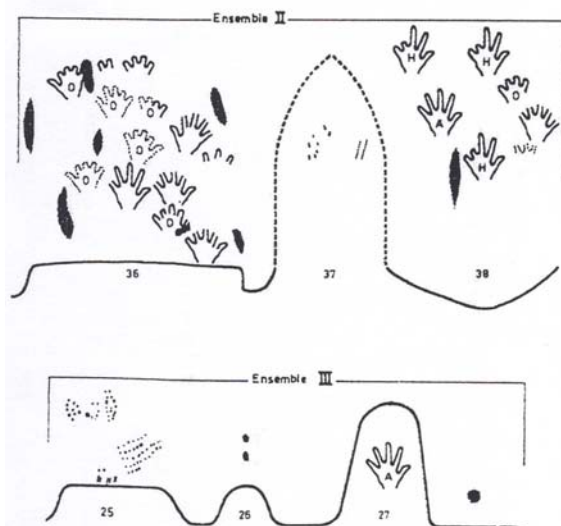
ここで可能な組み合わせは、すべての指が揃っているパターンAから、すべての指が欠けているパターンOまでの15個になる。洞窟には、これらのパターンすべてが描かれているわけではない。その頻度は非常に興味深い特徴を示している。比較的数の多いOACHNKという組み合わせは、指を折り曲げるのが容易な形である。BEFGという組み合わせは稀であるが、これも比較的やさしい。DIJLMはもっと難しい。

“儀式的”切断説も病理学的欠損説も、一見してこのようなパターンの特徴には適当ではないだろう。パターンが指の折り曲げ易さによって選択されるとするならば、これらの仕種がガルガスの石器時代人にとって、十分に習慣化していたと推測することもできる。もし指を壁にあてて無理やり折り曲げたのなら、すべてのパターンができたはずである。もっとも難しい折り曲げ方の形が見られないという事実は、ポジションの選択が、たとえばブッシュマンが現在でも狩りに使っているような、広くつかわれていたサインに相当するのではないかと考えさせる。

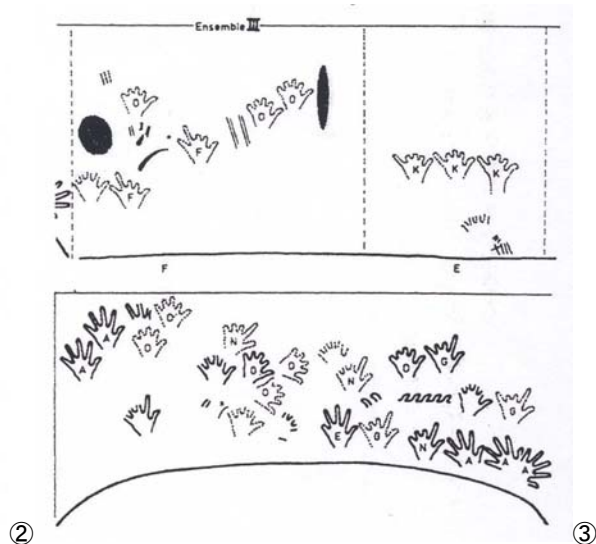
I 群・II 群・III 群の手形の分布図・上記左図参照



図① I 群のセクション手の分布図・読解のための図であり、個々の手は単純化されている



図②・Ⅱ群 分布図



図③・Ⅲ群 分布図・○黒は赤色の窪み

全体的分析の概要 限取られた手は場所的にはっきりと異なる3つの群を構成している。Ⅰ群は長さ35mの洞窟第一室の左側壁面を占めている。Ⅱ群は同じ場所の右側壁面にある。Ⅲ群は第二室にあり、左の岩棚の上にはぽつとはなれている手(27・A)と柱の周りがある38個の手、そしてこの柱の内側に掘られている小さな部屋の中にある手などを含んでいる。手は、第一室の左右の壁と、第二室の柱の周りと巻き貝状の部屋のなかというようにはっきりとした群を構成している。ある限定された民族集団の中で、狩猟のサインが洞窟芸術へと移行したものではないだろうか。



④



⑤

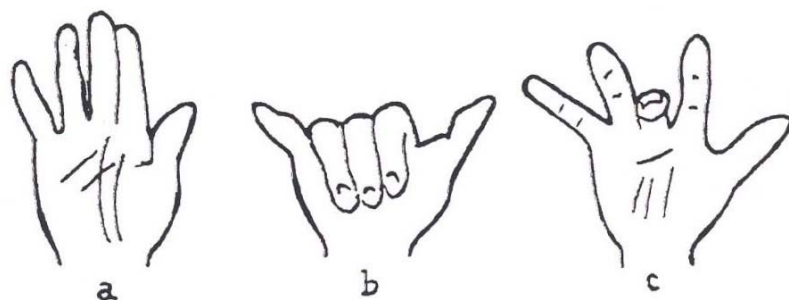
アルゼンチン・サンタ・クルス洞窟の手形壁画 インドネシア・スラウェシ島洞窟・4万年前の手形

よりよい収穫を得るために全ての指を切るとか、更に同じ目的のために、未来の狩人である子供たちの指を切断するなどということは、原始的な集団の経済性を考えれば、とても擁護できる行為ではない。獲物がいるところで、声をたてないで送るサイン知っていたという仮説は成り立つそうである。だがもしこの仮説が正しいとすると、真に驚くべきことは、狩猟用の「サイン」が洞窟壁画へ移行(同じ種族に連絡情報網)し

たということにある。石器時代の人間の思考、文字に近い情報連絡網が存在したことになる発見となり、因って新たな歴史の扉を開くことになるであろう。

★洞窟見取り図にある「手形」のⅠ群からⅢ群までを簡単に説明をしたので、詳細に知りたい方は『洞窟へ・心とイメージのアルケオロジー』・せりか書房 2001 年を参照下さい。

動物を表すブッシュマンのサインと比較



図⑥

⑥・カラハリ砂漠ブッシュマンが狩りや物語に使う動物を表すサイン

a 猿(手)、b イボイノシシ(鼻)、c キリン(耳と角) これらをガルガスのAKCと比較すると、類似がわかる。

ショーヴェ洞窟壁画 ショーヴェ洞窟壁画はヨーロッパの壁画では最古とされている。フランス南部アルデシュ県ヴァロン・ポン・ダルク付近にある洞窟で、現在知られているもので、約3万2000年前の洞窟壁画となっている。

1994年、洞穴学者ジャン・マリー・ショーヴェ他、3人による発見、ショーヴェ洞窟は発見者の名にちなんでつけられた。洞窟内の岩肌の起伏や凸凹を上手に利用して描いている。ショーヴェ洞窟壁画は現在判明しているもので、その総数は300個の壁画が確認され、第一級の芸術壁画となっている。描かれている動物は、野生牛ビゾン(ヨーロッパバイソン・アメリカバイソンは共にウシ科バイソン属)、馬、サイ、ライオン等13種類、その中にフクロウやハイエナなど含まれている。

尚、貴重な洞窟壁画保護を優先し、ショーヴェ洞窟壁画は非公開となっており、現在はレプリカ展示のみの公開となっている。

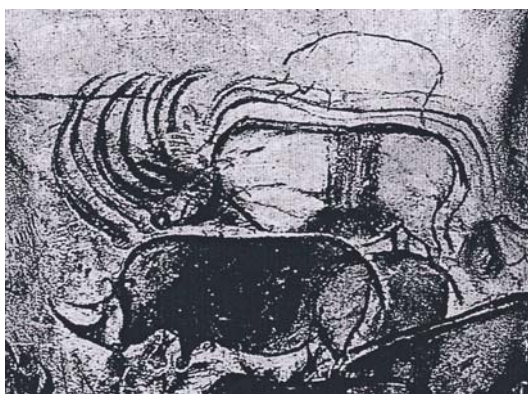
ショーヴェ洞窟壁画の内容 高地に近い気候地に描かれている豹、ハイエナ、鹿、馬、ライオン、ビゾンは平原を移動する動物群の姿である。新人類は厳しい気候のな

かで、動物は食料確保の源であり、当時、人間よりも動物の数の方が圧倒的に多かったであろう。人間は、動物のように繁殖していなかった時代、洞窟に描かれている動物に比べれば、自然界の中での人間は、量的にも、質的にも弱い存在だったであろう。おそらく人間たちは動物のように力強い繁殖を、動物のように多く強く有りたいと願望があったにちがいない。サイやライオンを描いた者は、この動物の力強さ、優雅さ知っていたようで、直観によって捉えた動物の勇姿に、人間たちは多くの知恵や未来像を授けられたと思う。人間の諸感覚のある部分は、動物によって育まれたことが、これらの動物壁画から推測できる。

しかし、よく考えよく観察すれば、人類はアフリカ大陸を出発する前から、既に同族間の情報において、通じる言葉・文字に近いこの壁画技術を習得し、情報の連絡を可能にしていたのではないかと、思わずにいられない。ホモ・サピエンス(新人類)は情報網を獲得していたからこそ、西へ東へと未知の大地に踏み込む自信につながっていたのではないかと、強く思うのである。



図⑦・洞窟奥の大パネル、中央の「巣」を中心にして異なる動物相が構成されている・世界遺産より



⑧・図⑦の左側を拡大図、サイ



⑨・図⑦の右側を拡大図、ライオン

図⑧・サイの群像の角は誇張されており、身体の線が幾重にも描かれているところを見ると、サイの激しく動く動作を描いていることが判る。図⑨ではライオンの頭部、鹿の背、牛科の動物の頭部と角が、一つの線を共有している。8頭余の左向きのライオンの群れは、水平線を軸にし、サイもライオンも、ビゾンの群れに融合して行く。動物の図像群は、選択された動物を中心に構成され、水平軸を通して洞窟の形状に調和して収さめてある。ビソンを始めとする選ばれた動物たちは、洞窟壁の岩の丸みを利用し、動物の胴体の肉厚を強調し、洞窟奥に描かれたビズンは、壁の曲面に頭部が来るように配置されている。



図⑩



図⑪

⑩・野生馬か飼育された馬なのか

⑪・大きいのが豹、小さいのがハイエナは珍しい

ショーヴェ洞窟壁画の動き、表現と遠近法の実験とも思えるような図像群であり、よく観察すれば洞窟が単なるキャンバスでないことが理解できる。ショーヴェ洞窟を描いた人間たちは、長い時間をかけてこの洞窟の物理的な条件を理解し、しかるべき場所に、しかるべきイメージを配置して生命を生き生きと描き、動物を世に伝え残したことに成功している。

洞窟の場は、宗教の説、狩猟と採集の営みの祈り場説、クロマニヨン人のシャーマンの祈り場説、現代人には解り安い論理となるが、旧石器時代の新人類の人たちの苦悩が潜んでいるように思われる。洞窟内の画像に現れる動物は、彼らが生きた環境に実在した動物であり、それをしっかり確認と理解の上での描きかたである。洞窟壁画の暗闇中^{くらやみ}で隠遁^{いんとん}し、トランス状態に入り、想像力と概念で描いたものなのか、宗教的集会等の使われた殿堂の可能性を含めて、その真の意図は解らない。(参考文献・『洞窟へ・心とイメージのアルケオロジー』 港 千尋著。『ヒトはなぜ絵を描くのか』 齊藤亜矢著)

アルタミラ洞窟壁画

1879年アルタミラ洞窟壁画が発見され、人類の歴史はアル

タミラ洞窟壁画の発見を分水嶺として、旧石器時代の人間が、本能以上のものをほとんど持ち合わせていない単なる生き物に過ぎないと考えられていた19世紀末に、想像を絶する出現となる。ピカソをして「我々のうち、誰でもこのように描くことはできない」言わせた。アルタミラが発見された時、考古学者たちは旧石器時代の思考や行動についての固定観念が完全に粉碎されたのである。アルタミラ洞窟壁画は約1万8千年前と推定され、スペイン北部、カンタブリア州の州都サンタンデルから西へ30kmにある洞窟となり、ユネスコ世界遺産に登録され、アルタミラ洞窟壁画は世界中で有名となったのである。

この洞窟は、先史ヨーロッパ時代のマドレーヌ期、約1万8千年前頃に描かれた野生牛、イノシシ、馬、トナカイ等を中心とした壁画となっている。約1万6千5百年前から1万4千年前頃の壁画も含まれており、洞窟壁画の歴史経過において、約1万3千前頃に洞窟の入り口部が崩落し、洞窟は近代まで外気と遮断され壁画が保存されていたのである。

1879年、考古学者のサウトゥオラ侯爵の娘、12歳のマリアによって偶然に発見された。侯爵は1880年に、旧石器時代の壁画論文を発表したのであるが、学界からは捏造と揶揄^{やゆ}されていた。侯爵の「壁画論文」は認められることなく、侯爵は1888年に57歳でこの世を去った。そして15年後に、侯爵の論文を否定したトゥルーズ大学のカルテラック教授が、サウトゥオラ侯爵の洞窟壁画論文を正式に認め、侯爵に謝罪した経緯となっている。

2008年、ユネスコ世界遺産は17個所が追加され登録され「アルタミラとスペイン北部の旧石器洞窟美術」と改称された。現在、洞窟壁画は外気に触れると壁画の痛みを増すため、一般公開されず見学はレプリカ洞窟壁画のみとなっている。

アルタミラ洞窟に最初に人類がやって来たのは、ソリュートレ期(後期旧石器時代の中葉^{ちゅうよう}の文化)と推測し、ソリュートレ期の遺物層から出土した骨から放射性炭素年代測定法(14C法・C14年代測定、自然の生物圏内に於いて放射性同位体である炭素14の存在比率が1兆個につき1個のレベルで一定に保たれていることを基礎とする年代測定法)で得られた数値は18、540年前まで遡る結果が出た。

立っている牝のビゾン(野牛) 下記 図⑫の大天井には多数のビゾンが描かれ、左上側が「うずくまるビゾン」は天井から鋭角的に突出した部分に彩色されている。岩の

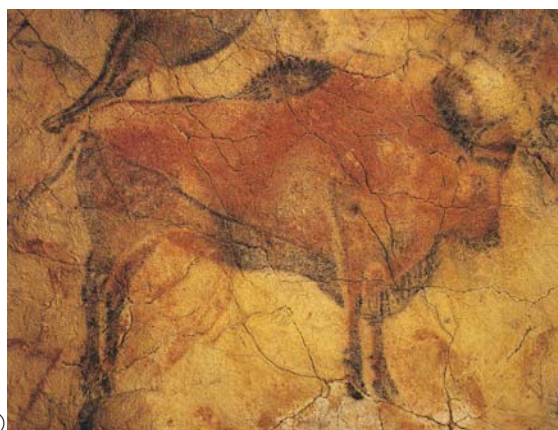
凸面部を利用して胴部をおさめ、その周りはボカシ絵となっている。

図⑬の「立っている牝のビゾン」は幾つかの作画と同じ種類の線が、木炭で作った黒色顔料で引かれている。動物像の姿勢に応じて、壁岩肌の凸凹面や亀裂に木炭の線を引く制作過程を考えて作者は構想をまとめている。全長164cm。彩色は赤色と酸化鉄の色で、乾くとセビリヤの土色のようになり黄色っぽく見える。そして岩面が湿気をおびると、岩面のオーカー色が浮かび上がり濃く輝くような赤色に見える。大天井画に用いられている黒色は、赤と同じ濃さの木炭の黒色に限られている。彩画の色調はおおむね赤色で、黄色っぽい色は少なく紫色がかった色はわずかである。

下記の図⑭「ほえる大きなビゾン」はアルタミラの大天井の中で最も力強い作品で、アルタミラ一番知られた作品となっている。（『アルタミラ洞窟壁画』監修・アントニオ・ベルトラン、翻訳・大高保二郎・小川勝、2000年より）



⑫・大天井画の多色画



⑬・立っている牝のビゾン・アルタミラ洞窟の秀作

アルタミラ洞窟壁画考・1 人類学研究学者、M・コンキーは旧石器時代の獵民の社会的活動表現するものとして、遺物のあり様を説明している。コンキーはこれらの遺跡が「合議」のための重要な場所であったことを証明として、その種の骨器を位置づけるという意欲的な解釈を試みた。

長い期間を通じて何度も繰り返して「合議」の場となったので、たとえばアルタミラで発見された骨器の装飾も、その時その時に応じて非常に多様になっているというのである。コンキーは、同じ社会的コンテクストを共有するある地域の人間集団は、幾つかの同じ位重要な場所の一つである遺跡に、また別の時には、もう一つの同じ位の重要な遺跡に集まって、その集団にとり、特別な意味のあることを決めていたが、それは社会の絆を維持する一つの手段と考えている。集団がこの洞窟の会場に集まっ

たり、又小集団に分かれていたりすることは、一定の人口で推移して行くための経済的な必要性から行われていった、という論説を述べている。



図⑭



図⑮

⑭・ほえる大きなビゾン(牝)

⑮・洞窟最奥部の「馬の尾」と呼ばれる通路中央部

アルタミラ洞窟壁画考・2 さらに議論を展開したのは A・G・ジーヴェキングで、地方様式を詳しく検討してみて、小さな集団のネットワークが、ピレネー地方、ドルドーニュ地方、カンタブリア地方など大きな地理的区分へと拡大している。その「流行範囲」が明らかになり、それが^{それぞれ}其々の時期に相対的に均一な社会構造と芸術政策文化を作りだしたというのである。これら3カ所の大きな地理的区分内では、動産美術を検討して、狩猟採集民の集団が非常によく動き回っていたことが分かる。この結果、あらゆる岩陰から類似の動産美術が出土しているのは、幾つかの限られた集団が、カンタブリア地方東端部から、ピレネー山脈までの拡大な区域を活動地域として容易に往来していたことを示しているのではないかと思われる。（『アルタミラ洞窟壁画』より）

ラスコー洞窟壁画 フランス南西部、大西洋に向かって流れるドルドーニュ川の支流ヴェゼール川左岸にモンティニャックという村に、村の南に位置する石灰岩の上、標高185mに、ラスコー洞窟の入り口がある。地下の空間は全長およそ200m、地表下12～20mにあり、3つの長い洞窟で構成されている。石灰岩の中を水が流れることによってここに洞窟ができたのは1千万年前のことである。

200万年前頃、洞窟の上に泥灰岩の地層ができたおかげで雨水が浸透しにくくなり、洞窟は安定した。このお陰で洞窟内には鍾乳石や石筍^{せきじゆん}が発達せず、さらに方解石の白い壁があったために、絵を描くのに理想的な環境となっていた。

このラスコー洞窟に、クロマニヨン人たちは合計で600～850頭もの動物と、

多くの記号を残した。(研究者の数え方によって数字が異なる)。壁面がある洞窟内の7つの空間を構成する絵には、動物の種類・大きさ・描き方などの点で、それぞれ固有の特色がみられる。また描き方は、壁面に影響されており、方解石(石灰岩・大理石・鍾乳石を構成している鉱物)に覆われた白い壁には彩色画が描かれ、柔らかい壁画には線刻画が多くみられる。

ラスコー洞窟壁画が描かれたのは約1万7千年前となり、1940年ラスコー洞窟付近で遊んでいた子供たちによって発見された。長く伸びる洞窟は枝分かれし、壁画が集中している大空間(広間)が幾つもある。尚、1963年以降から壁画の損傷を防ぐために洞窟は閉鎖となる。(ラスコー洞窟壁画の写真は『世界遺産・ラスコー展』国立科学博物館より)



図①⑥

①⑥・「牝牛の広場」左壁・右に向かって勢いよく駆ける黒褐色のウマ、黒い斑点のある大きな牝ウシ、小さなシカの群れ、2頭目の大きな牝ウシが並ぶ。赤、黒、茶色、黄色の彩り豊かな壁画群である。野牛の描き方に遠近法が用いられ、ラスコー洞窟壁画は芸術の始まりのゆえんとされる。



図①⑦『世界遺産・ラスコー展』

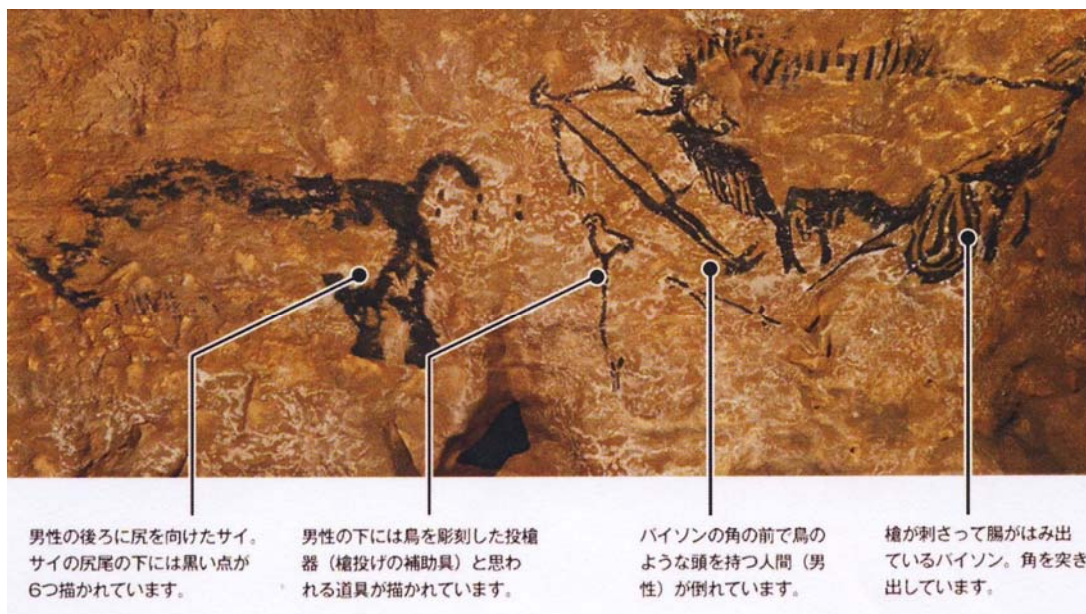
図①⑥の壁画は図①⑦のこの空間広間に描かれている・「牝牛の広場」を下より望む

洞窟に入って最初に目にするのは、「牝牛の広場」と呼ばれるラスコー洞窟を代表する壁画空間広間である。長さ18m、幅7m、高さ4～5mの楕円形の空間となる。

謎に満ちた「井戸状の空間」にある壁画

井戸のような縦穴があり、5 m降りると床につく。「井戸の場面」の構図は独特で、槍が突き刺さってハラワタがはみ出たバイソンが頭を下げ、角を突き出し、その角の前でトリのような頭を持つヒト(男性)が倒れている。男性の下には、トリの彫刻がある道具(装飾のある槍または投槍器)が垂直に立てられ、男性の後ろには尻尾を上げたサイが尻を向けている。

クロマニヨン人の集団に、シャーマンのような特別な人だけがこの空間へ降りることを許されていたと想像されるが、一体ここで何が行われていたのかの謎は、この謎は永遠に解けないかもしれない。(特別展「世界遺産ラスコー展・クロマニヨン人が残した動物壁画」・2016年11月1日～2017年2月19日まで国立科学博物館で開催・特別展より転載)



図⑩

図⑩・傷ついた牛と鳥形人像・「バイソン」大型動物の縦がみと格闘の狩の様子が描かれている

我々の祖先は20万年前にアフリカに誕生し、ホモ・サピエンスは10万年前に世界各地へ散らばって行き、それぞれ地域で文化を発展させた。その時、人間はアフリカを出発する時、既に絵を描く能力を持っていたのではないかと、と云う説がある。

人と人との間に、意思疎通のために現代の言葉や文章に近い、「絵による伝達」を必要とした枠組みを持っていたのではないかと、筆者も強く思えるのである。

上記の図⑩の絵図を見ていると、絵画そのものではなく、人間間の伝達力の方法、言葉に近い意味があって、意思の伝達が人間どうし間で、認識していたのではないかと。そうであれば、民族と民族の意思疎通の存在が成立する壁画となっていたと思われる。5万年前より人類が文字を発明する前迄、岩絵は描き続けてられて来たことは、その証ではないだろうか、と思われずにいられない。

シャーマンと鳥について・Ⅰ 日本のフゴッペ洞窟壁画解明の書、『謎の刻画・フゴッペ洞窟』著の峰山氏は、ラスコー洞窟壁画をみた感想を、「傷ついた牛と鳥形人像」の章で次のように述べている。

《・・・シベリア北東部の諸種族の間では、シャーマンは飛ぶ能力があると信じられ、その衣装には鳥の文様が用いられている。またシャーマンは鳥に変身して、「宇宙木」を伝わって「魂の鳥」を持ち帰ると信じられている。鳥の彫刻を施した杖や杭^{くい}はそのシンボルとされ、ヤクート族(北東アジアに居住するテュルク系民族)の呪術的儀礼の一場面で、犠牲として捧げた牛の前に、鳥の彫刻を施した杭が立てられる。鳥に変装したシャーマンが呪文を唱え、エクスタシーに落ちると、犠牲獣の魂は天国に導かれるのである。・・・このヤクート族の儀礼の場面が、ラスコー壁画の「傷ついた牛と鳥形人像」の構図と同じで興味深い。ラスコーでは、負傷してたたずむ牛と、その頭の下方に鳥の頭をした人物像が横たわり、人像の側には鳥の彫刻を施した杭が立っている。牛は犠牲獣であって、槍で尻尾から腹にかけて突きぬかれ、まさに頓死の状態だ。横たわる鳥頭の人像は、エクスタシーに落ちたシャーマンを意味し、杭頭に彫られた鳥は、犠牲獣の魂を天国に導く補助霊の象徴であろう。・・・」と述べている。



図19(レプリカ)

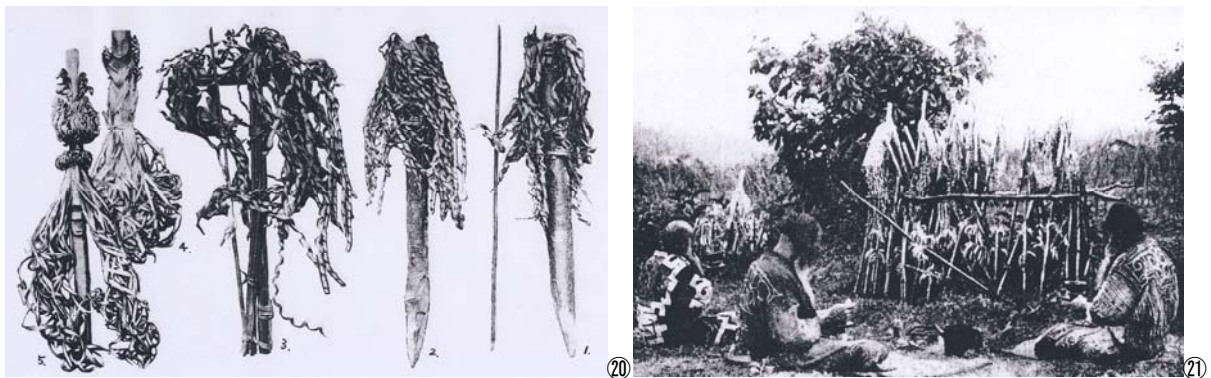
謎に満ちた「井戸状の空間」・国立科学博物館特別展「ラスコー展」の会場で筆者が撮影した

シャーマンと鳥について・Ⅱ 『日本のシャーマニズム』堀 一郎著(講談社現代新書・昭和46年) 「鳥への変身」の章で、《・・・呪的飛翔^{ひしょう}はシャーマニズム特有のものではなく、シナの仙術者、ヨーロッパの魔女、錬金術師、ヴェーダの供犠司祭、また未

開社会の妖術師や呪医も、中世カトリックの聖者にも関わる呪的飛翔の能力があると考えられている。人間靈魂や祖靈を鳥形に表現する図像や、靈魂の導き手としての鳥の信仰は多くの民族に持っている。・・・シャーマンの超人間的状態と、天と地と地下の3つの宇宙圏を安全に移動し、「死」から「生」へ、「生」から「死」へと無限定に行き来することのできる、まさしく「精霊」のごとき能力を身につけていることを証明している」》と述べている。

シャーマンと鳥について・Ⅲ 「アイヌのイナウと日本の御幣^{ごへい}の関係」をみる

アイヌのイナウについて、『アイヌ芸術・木工篇』金田一京助・杉山寿栄男著・昭和15年の復刻版から、ウナウ(内幣)・御幣について考えてみる。



図②①・イナウ(神木・削花木幣)家の窓辺や門口や村の辻に立てる。図②①の1・2はソーパイナウ(日高)、3はノヤイモシ(日高)、4シエニシテイナウ(樺太日高)、5ナウ(樺太オロッコ)。 図②①はヌサ(イナウを集めて飾る)・熊祭り(イオマンテ・日高地方)のイナウ。神祭りにも立てる。

『アイヌ芸術』イナウの序に《・・・その昔、石器類を使用していたアイヌ民族が、始めて鉄器(刃物)を手にし得た時の喜びは、恐らく想像に余りあるものがあつたであろう。これを利器として、彼等が神に捧げるイナウ、即ち柳の削り花を、さらさら、さらさらと美しく削り出すことが出来た時に、如何ばかり愉^{たの}しく、また得意になったことであろうか。そして又それが、後代彼等種族の信仰に、木工工芸の修練に、疑もなく大きな貢献をしたものであつただろう。・・・》と記されている。

『日本の深層』梅原猛著の「アイヌ文化からまなぶもの」の頁より、アイヌ文化の「熊祭り」の考察を参考に、ラスコー洞窟の「井戸状の空間」に描かれている「シャーマンと鳥」を狩猟民の狩猟精神の思想についてその解釈の参考にしたい。

《・・・日本において、「御幣^{ごへい}」というのは、神道には欠くべからざる道具である。いろいろな形の御幣があるが、多くは木の枝でできていて、それに白い紙をつけたりする。結婚式をはじめいろいろな行事に御幣を捧げて神にお祈りすることは、今日の日本でもいたるところで見られる。あの御幣がアイヌの「イナウ」に似ているということは、すでに柳田国男等が指摘している。イナウはアイヌが神祭りの時に用い、多くは柳の枝でつくる祭事の道具である。このイナウというのは、元々は鳥らしいのである。イナウには目もあり、耳もあり、足もあり、そして羽もある。アイヌは、神に祈りを捧げるとき、神の数だけイナウをつくり、イナウの前で祝詞^{のりと}をととなえおるのである。すると、鳥であるイナウはその人間の願い事を聞いて、その願い事を持って天に飛んでいくわけである。そのイナウを立て並べてある一群をアイヌ語で「ヌサ」というが、ヌサは霊の発射台である。一つ一つのイナウは鳥になって空へ飛んでいき、人間の願いをまちがいなく天にいる神に伝えるのである。日本の神道の御幣は、このイナウの変形したものとみられる。我々が御幣を神に捧げるのは、その御幣が鳥となって神のところへ飛んで行き、我々の願いを正しく伝え、それによって天にいます神が、我々の言う事を聞いてくれるからだろう。

アイヌにおいて、「マラプト」といわれるものは、まず熊(カムイ=神)なのである。熊は天の彼方から、ミアング(土産)を持って人間の世界にやってきたマラプトは即ち「客人」なのである。熊たちは天の世界では人間と同じ様な格好をし、人間と同じような社会生活を営んでいる。この地上の人間の世界に現れたとき、熊という仮面を被っているのである。何のために？ それは、自分のおいしい身をミアングとして人間に与えるためである。それ故に、そのマラプトの意志にしたがって、人間は熊の子を捕えたら客人として手厚くもてなし、それを無事成長させねばならない。熊が成長して肉が最もおいしい時期になったとき、人間はそのマラプトの意志にしたがって、熊を殺して身を食べねばならない。そのミアングを受け取るかわりに、人間は一つの務めを果たさなくてはならない。それは熊の魂を天に送ることである。この熊祭の行事をイオマンテ(それを送る)という。熊の魂を無事に天に送るイナウを立て並べたヌサが作られ、その前に魚や団子や酒が供えられるのである。

熊の霊はこのイナウ即ち鳥に乗って、魚や団子や酒と共に天に帰るのである。こうして天に帰った熊の魂は、仲間を集めて、人間にミアングとしてもらった魚や団子や酒で宴会を開くのである。そしてその熊は、いかに人間に大事に扱われ、いかに無事

にこの天に送られたかを仲間に語るであろう。すると熊たちは、その帰ってきた熊のように、自分も人間界に行きたいと思う。それで来年はどっさり熊が捕れる、というわけである。・・・》と、イナウについての考察をのべている。イナウは縄文時代からの儀礼行事に起因し現在に至っているのである。

壁画は何故描かれたのか クロマニヨン人の洞窟壁画は何故描かれたのか、という問いに対して今迄に様々な解釈がなされてきた。主なものに、芸術のための芸術説、トーテミズム、呪術説、シューマニズム、男女両性神話説がある。19世紀以降紹介された世界中の狩猟採集民の民族誌として、洞窟壁画の製作動機が考察され、同世紀末に旧石器時代美術の製作動機がトーテミズムに基づく説が発表された。狩猟呪術説とは、狩猟の成功を願って動物を描いたという解釈である。

獲物である動物を確実に仕留めるために、狩猟に出かける前に、地面に描いた動物の絵に向かって槍を刺す。旧石器時代の動物の絵にも槍先や傷跡のように見えるV字形や矢印記号が記されている壁画が(a)で、縦のキズ線がそれである。増殖のための呪術説とは、食の対象である動物を描き、実際に動物が増えるという解釈は、妊娠中であるような腹部が膨らんだ動物が描かれているのは(b)である。またオスとメスの生殖行為(交尾)を暗示するような壁画や美術品がある(c)となる。



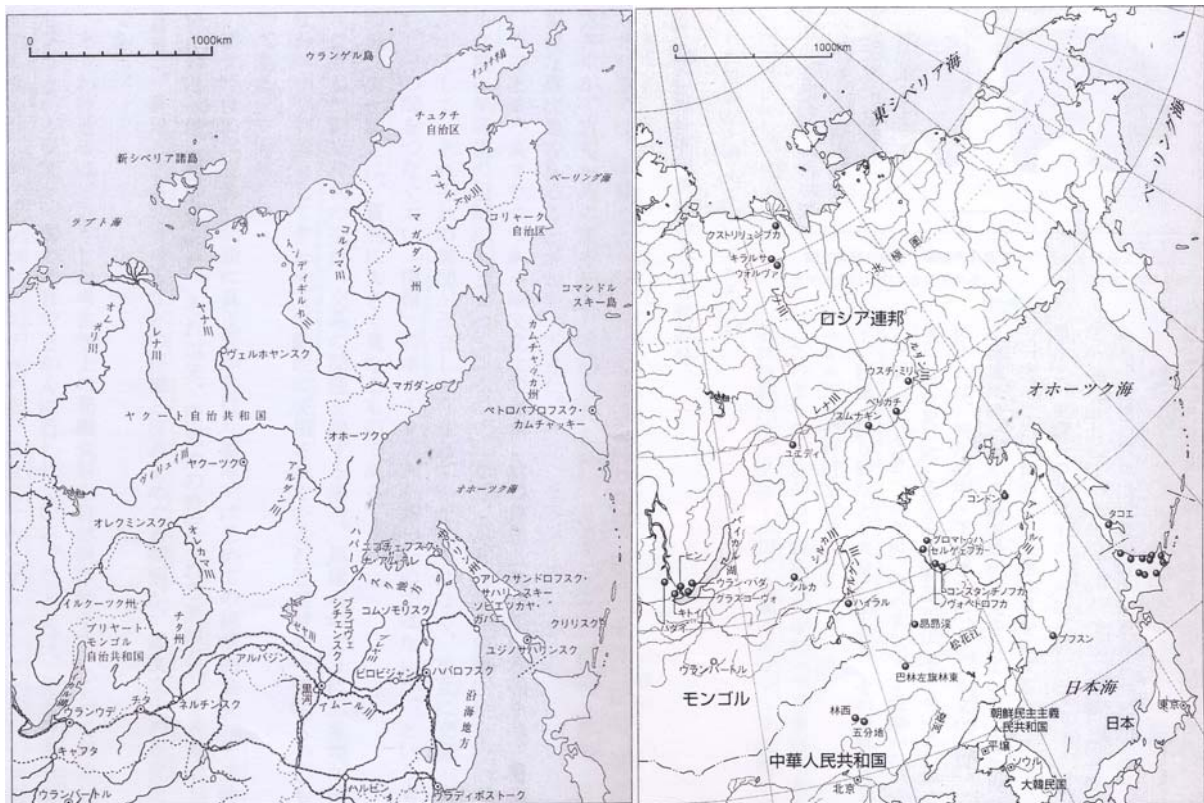
(a)バイソンに刻まれた7本の線 (b)「牝牛の広間」のユニコーン (c)トナカイ2頭の線刻画

フランスの先史学者A・ルロワ・グーランは、それまでの民族誌の事例から洞窟壁画の制作動機を探るのではなく、洞窟の地勢と描かれた画像を分析し、画像すべてを男性と女性という2つの象徴に分け、それらが洞窟の地勢に従って意図的に配置されているという男女両性神話説を唱えた。また最近では、シャーマンのトランスという意識が変性した状態と幾何学記号などモチーフに着目し、再びシャーマニズムによる解釈が紹介される。ラスコー洞窟には諸説を裏付ける岩絵があるが、一つの解釈ですべてを説明することはできない。制作者は個人的な目的よりも、公共の目的のために集団で制作していたと考える方が妥当であろう。(『世界遺産・ラスコー展』から抜粋)

第6章・手宮・フゴッペ洞窟刻画と大陸文化の繋がりを探る

手宮洞窟・フゴッペ洞窟の彫刻は今から 2000 年～1500 年前に施されたものと結論は出ている。この地域の先史時代に、手宮・フゴッペ洞窟人たちがこの洞窟に集まり、壁面に彫刻し、呪術^{じゅじゅつ}宗教的な儀式的聖堂したことは疑いない。刻画画題から推測すれば、狩猟採集の生活に依存していた時代で、山の幸、海の幸の豊猟と同種族繁栄を祈願した場所、即ち聖地であったことが分かる。

民族学者は洞窟の刻画を解明にあたり、北東アジア文化・アニミズム的シャマニズムの世界観を持った刻画人たちが小樽地方へ、呪術文化を運んだと推測している。大陸の呪術文化が交流・交易によって、大陸のある民族が日本海を渡り小樽周辺に渡来説も考えられる。樺太から北海道宗谷へ、そして西沿岸を下って小樽周辺に来たかは正確には解らないが、小樽洞窟人が壁面に彫刻を施していた時代は、北海道・道南周辺のアイヌ民や和人に近い人々は、続狩猟採集の生活を営んでいた時代となる。

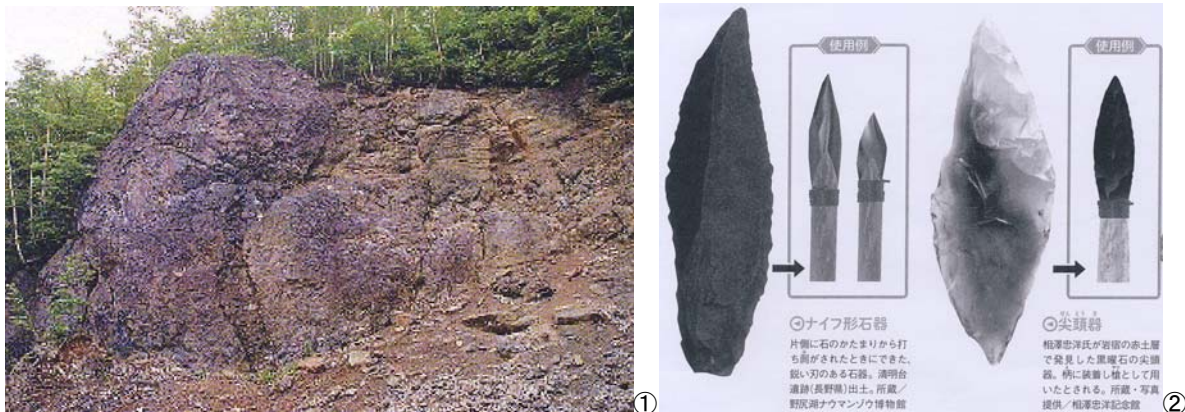


左・シベリア極東地図『海を渡った縄文人』より

右・石刃鎌文化の分布図『海を渡った縄文人』より

北海道最北端宗谷岬から樺太南端クリリオン岬まで 43 km の距離、樺太との交流・交易は縄文時代を中心に盛んに行われていたことが分かってきた。従来の文化の伝播の考え方は、大陸から日本列島に伝わって来た文献が多くあるが、交流・交易は一方通行ではなく、双方の物資が行き交う、相互の利益が^{そうご}あって成り立つものである。

大陸からの交易経路はアムール川の中流から下流域へと伝わり、樺太を通じて日本列島に到達している。日本側からは北海道遠軽町赤石山から産出する「黒曜石」で石刃、搔器（獣皮の脂肪をそぎ落す）、石鏃（やじり）、ナイフ、石槍の鋭利石器として縄文時代最大の産出交易品となっていた。黒曜石は硬質の火成岩、火山活動によりマグマが急速に冷却した天然ガラス質となるもので、石質は緻密で硬質、貝殻状に剥離して金属質のように鋭利な石器となる。樺太の遺跡から出土する細石刃は、1万6千～1万2千年前のものと測定結果が出ている。これ等の石器は、沿海州からシベリアのバイカル湖、モンゴル、中国東北部など北アジアに分布していた。石刃鏃文化の流通系統を大きく前進させたのは、A・Pオクラードニコフの指揮する極東考古学調査隊によることが大である。（『海を渡った縄文人』『北からの道』野村崇著・小学館より）



①黒曜石の原石が露頭・紋別郡遠軽町奥白滝（遠軽観光協会）

②ナイフ形石器・尖頭器（槍）に使用

①・湧別川流域を中心に100以上の遺跡群「白滝遺跡群」があり、国の指定史跡となっている。今から2万年前の旧石器時代のもので、ナイフ石器・尖頭器・細石刃等の原石となった良質な黒曜石原石が見られる。（②写真『謎多き古代史をめぐる』笠倉出版社）

小樽洞窟刻画人たちは 海に囲まれていることから、漁労を中心とした生活と狩猟採集の生活を獲得し、その安寧の生活のために採集と豊漁を願って、祈りや歌舞を捧げる民族集団であったであろう。

因って洞窟刻画の描いた画は、採集と猟期の生活を繰り返す1年の作業日程を定めた「コヨミ」のように用いていたのではないかと推測すれば死者への交信の儀礼、祖先の霊を喜ばす儀礼をはじめ、イルカ漁の季節にシャーマンの「コヨミ」の指示に従って、外海まで漕ぎ出した漁労の刻画絵図かもしれない。洞窟陰刻画には生活の伝承伝播記録を示していたのではなかろうか。

推測を深めれば、陰刻画を刻んだ人たちは、大陸アムール河口から樺太・宗谷を経由して、西海岸に沿って南下した人たちと推測は充分成り立つのである。

大陸方面からの文化伝播の人たちは小樽地方に或る時期に渡来し、希望の大地と定め、洞窟に刻画を描くことによって、大陸渡来民を結束して小樽地域に懸命に勢力を伸ばすことを考えていたかも知れない。しかし、何かの事情が発生し、刻画呪術師文化は北海道地域や東北地域に至ることなくその勢力は消滅した。

盃状穴 ^{はいじょうけつ} 盃状穴は、^{くぼ}凹み石状、盃の形をしており、一般の神社等の外柵等に現在でも見られる。大きさ直径2cm～15cm(50cm位まで有)位で、この盃の穴は世界各地で見られ、再生や不滅のシンボルとして信仰され現在まで至っている。

盃状穴は女性のシンボルと関係があるとされ、病気の^{ちゆ}治癒や子宝に恵まれることを願った信仰に繋がっている。日本では一般に神社仏閣の外柵など、注意して見分すれば、神社の階段周りや、水鉢、灯籠の台石に彫られているものである。



図④



図⑤



図⑥

④東大寺転害門の盃状穴

⑤一般の神社外柵の盃状穴

⑥フゴッペ南壁中央部上段盃状穴

図④、図⑤、図⑥の写真は、凹み彫りは女性のシンボルとされ、神社外柵周りの高い位置に丹念に彫られ、多産増殖と豊かな獲物を祈願したものと云われている。

これ等の石刻画の製作者の生活の職業は、古今東西を問わず、石刻画を彫る人たちは昔から牧畜民、狩猟民、漁労民たちと云われ、農耕民ではないらしい。

手宮・フゴッペ洞窟人は漁労の刻画像があるから漁労民と考えられ、フゴッペ洞窟刻画も大部分は盃状穴と人物像で描かれている。動物画像も極めて少ないことから、漁労民族性が刻画に強く現れている。図④・⑤の盃状穴は2000年前の刻画であるが、現代に続く盃状穴の凹み彫は、唯一フゴッペ洞窟刻画の盃状穴と同じ現象と見ることができる。図⑥の盃状穴印は、古代社会から現在の社会に通じる盃状穴彫刻となり、その文化の繋がりを説明できないが、現象のみは同類と考える。

外国にもある盃状穴 中米ボリビアのチマネ族の古い遺跡に、深い盃状穴を伴う女性器で覆われた丸石の集積があって、現在も祭儀がおこなわれているという。儀礼の儀式が、フゴッペ洞窟刻画と状況が酷似しているらしい。

これ等の盃状穴の意味についての諸説は、^{ほうじょう}豊饒祈願等があるが、その意味は現代まで一定していない。我が国においては古代から近世まで、各種の石に盃状穴が彫られているが、古い時代のものは発火具説、石器製作具説、^{けんかるい}堅果類割具説(硬い穀割具)等の説がある。中世以降は石棺、鳥居、常夜灯、手水鉢、石段等、社寺の石造物に彫られていることが多く、宗教的な意味が指摘されている。又、フゴッペ刻画にある仮面や羽のカンムリをつけた人物像は、中部インド、西アフリカの各地に見出され、刻画に表した手宮・フゴッペ人は狩猟・漁労民文化ということになる。凹み彫りの“シグサ”は世界各地の狩猟・漁労民を指す。(「フゴッペ岩面画と世界の岩面画」木村重信著より)

フゴッペ洞窟人のトーテム信仰



⑦・フゴッペ洞窟南面奥上段



⑧・ホトゴイ・ハブサガイ岩壁画

図⑦はフゴッペ南壁奥部の上段に一匹足獣と、60個余りの円点(凹)による構図からなっている。この壁画の描き方は、3千年前のザバイカル地方や北部モンゴリアンの人々も描いており、図⑧の岩絵に類似している。

トーテム物語(動物植物が祖先と結びつく)を解りやすく語れば、アイヌ伝説神話等で、白いオオカミが人間の女性に変身してアイヌの英雄の妻になる話や、その反対、オオカミの王が人間の女性を妻にして、生まれた子供たちがアイヌの祖先神話となる。それを信じることによって信仰に繋がって行くのである。フゴッペ刻画の円点と四足獣は、力強い一本の水平な横線と、四本の短い縦のくぼみ(凹)は、洞窟人が霊力を持つと信じられている。オオカミのような聖獣と想像でき、洞窟人たちはオオカミのような霊力を持つ動物に対し、トーテム的な信仰を抱き、氏族共同体を作り、聖獣の加護

を受けて一族の安泰を祈願する儀式が行われたことを暗示している。

図⑧は『黄金のトナカイ・北アジアの岩壁画』（オクラードニコフ著・1968年）「ホトゴイ・ハブサガイ岩壁の文字」の頁に、「ザバイカル地方(ロシア東部バイカル湖の東)の岩壁画の最も特徴的な所在地はウダ河谷である。オナ川がウダ川に流入するあたり、「ホトゴイ・ハブサガイ」の絶壁が見え、壁画面の斑点は、ざらざらした石の表面に描かれている。ホトゴイ・ハブサガイの岩壁には、大きな楕円や四角の枠の中に、小さな楕円や円、指のあとなどが一面につけられている。黒い岩壁に、小さな人間が輪舞を踊っていて、手をつないでいる光景が描かれている。それはブリヤート人のダンスのようである。・・・」とあると記述している。

フゴッペ洞窟の発掘から出土品 フゴッペ洞窟の大きさは、奥行き7m、幅約6m、高さ約5mである。昭和26年、28年、46年の3度わたって発掘調査が行われ、彫刻壁画は800個、施された時期は1世紀初め～4世紀頃と結論が出た。発掘方法は上部より順次堆積している土砂、落盤、貝層、灰層、包含層などの互層を掘り下げて、部分的にボーリングを実施している。炉跡・洞窟内には焼土の伴う炉跡や置石が洞窟の中央から壁際にかけて19カ所から発見され、堆積層の中に灰層が部分的あることから、長期にわたって焚き火や、神に捧げる火祭り等が行われていることが考えられている。



⑨フゴッペ洞窟の面・北海道博物館

⑩・シカチ・アリヤンの面と酷似

⑪マクラガイ

⑨・⑩の面は実によく類似している。^{こっかくき}骨角器(動物骨・牙・角で製作した人工製品)については、^{もり}銚頭、刺穴具、針、針入、弓筈なども出土している。貝類・コタマガイ、バカガイ、ウバガイ、マキガイ等の二枚貝17種、特に注目すべき1点は、⑪・マクラガイ(南の海域産・呪術用に使用か)で、余市湾近海では採取されない。温暖な地域に生息する貝も出土し、恐らく他の地域から運ばれたものと考えられる。このマクラガイ

の中央部に小孔があり、装身具と考えられる。魚類はヒラメ、カレイ、カジカ、ソイなどの沿海魚等があり、鳥類はアホウドリ、アビ、シギ等となる。哺乳類はシカが大半となり、キツネ、タヌキ、オオカミ等の陸獣となり、オットセイ、クジラ等の海獣骨も出土している。

日本の縄文土器とシベリアの土器は酷似している



図⑫(『日本人はるかな旅①』より)

⑫・左側の器はアムール川流域のガーシャ遺跡出土、右側の土器は東京新宿百人町遺跡から出土

日本の縄文土器は1万2千年前から使用し、世界で一番早く土器を使いだした国となる。この土器は朝鮮半島から沿海州に渡ると極めて少なく、メソポタミアの土器は8千年位、日本の土器は1万年以上も長きにわたり土器の発展を続けていたことになる。今日、我々は祖先の土器による煮炊の伝統が、冬の鍋料理となるのである。



⑫

図⑫・丁字頭勾玉・奥尻島津波館



⑬

図⑬・アイヌ民のガラス玉製の首飾り・函館北方民族資料館

⑫・奥尻町(島)1993年7月12日北海道南西地震災害後にできた奥尻島津波館があり、縄文・オホーツク土器文化を展示している。勾玉の頭部(拡大)に3本の刻みが施されている。新潟糸魚川産ヒスイ3～6世紀となる。⑬・ガラス玉製の首飾り(タマサイ)は、大陸からサハリンを経由して北海道へ、オホーツク文化が齎されたものである。身につける事は、身を守る魔除けとなっていたようである。

第7章・先史モンゴロイドの歩んだ道

北東アジア・中央アジア・ヨーロッパと岩絵の一部であるが紹介してきたが、小樽洞窟刻画から民族を推測して、我々日本列島人は何処の故郷からやって来たのであろうか。祖先モンゴロイドたちは、日本列島に住み着くまでに至るまでの足取りを追って見ることにしよう。

アフリカ大陸において約500万年前に原人が誕生した。そして原人は約20万年前から進化を繰り返しながら、アフリカの大地において新人類が誕生した。それはホモサピエンス(新人)である。ホモサピエンスとは、「知恵のある人」を意味するラテン語だが、まさに彼等こそ我々現代人に繋がる共通の祖先となるのである。その祖先にあたる新人類が、母なる大地アフリカを旅立つ人類の一派が現れた。それは今から約100万年前頃の事で、初期の移動の頃は死海地溝帯(東アフリカ大地から続く地球の割れ目、死海からアカバ湾まで)に留まっていたが、徐々に外の環境に身体を適応しながらヨーロッパやアジア各地へと拡散し、今日の世界各地に居住する現代人の祖先に繋がる人類の長い旅の始まったのである。

その新人類の拡散進路は大きく2派に分けられ、その1つはヨーロッパを目指す一派となり「コーカサイド(白人)」となって発展して行くのである。もう1つは東を目指す一派は、我々の祖先「モンゴロイド(黄色人)」となって行くのである。

その日本モンゴロイドたちの祖先たちの辿った道筋は、大きく2つのルートに分かれて進んだようである。1つはアフリカの温暖な気候を求めて「南回廊」へと進み、もう1つは極寒のシベリア平原へと進み「北回廊」の進路をとったのである。

「南回廊」は西アジアから南アジア、インドネシアを経由しながら、中国南部から朝鮮半島に進み、琉球諸島を北上して日本列島へとルートを進んだのである。「北回廊」は極寒シベリア大陸を超えて、樺太島(サハリン)から北海道へ渡った祖先の人々や、モンゴル平原をたどり、中国北部を経由しながら、朝鮮半島から日本列島に至った祖先のルートも含まれるのである。

その祖先たちの偉大な偉業は、極寒の北回廊を歩んだモンゴロイドは、「寒冷地克服」という快挙を成し遂げた。南回廊を進んだ祖先たちは、海を渡る舟の「航海術」を獲得して、「海洋適応」の大偉業を成し遂げたのである。この2つの偉業を成し遂げた祖先たちが、つまり私たちアジア人の祖先なのである。

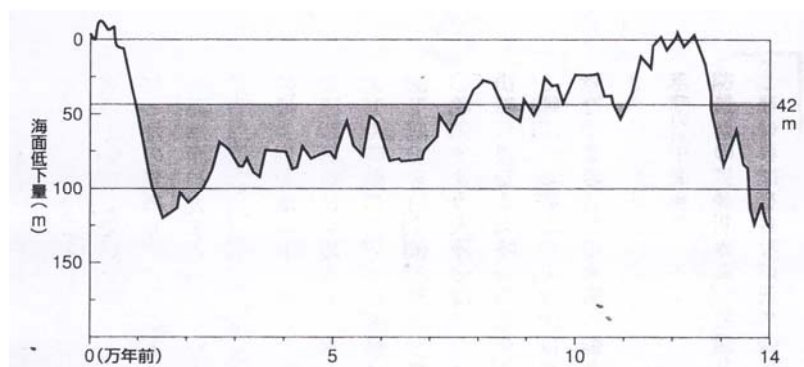
ヨーロッパを目指した新人類は「コーカサイド(白人)」(コーカサス出自の人種)とな

り、東を目指した一派は我々の祖先に当たる現在の「モンゴロイド(黄色人)」となるわけである。人類学では世界の3大人種はネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドと呼ばれ、共に10万年余前頃、アフリカを出発して西に進路を取ったコーカソイド(白人)と、東に進路を取ったモンゴロイド(アジア人)が別れたのは、遺伝学の分析によれば、今から5、6万年前頃のことだと云われている。



図①・第2次人類適応拡散図 (『印旛の原始・古代』財団法人印旛郡市文化財センター2004年より)

我々の祖先モンゴロイドは、気候変動の極寒の周期を掻い潜りながら、移動と拡散を繰り返し、最後の氷河時代(凡そ8万年前に始まり1万年前に終る氷期)にモンゴロイドは各地の気候に適応しながら、東に進路をとり食料確保(狩猟と採集)を求めて、寒冷の大地のシベリアへ進出したのである。その最大の理由は、大型哺乳動物(マンモス等)を追いかけて進んだと云われている。そして更に東に進むモンゴロイドの一派がいた。



図②

②・ベーリンジアの存在期間図、海水面が42m以上下がれば陸地が現れる。7万5千～1万4千年前、シベリアとアラスカが直接に徒歩で渡ることができた「ベーリング陸橋」となったのである。

それはベーリングシア(現在のベーリング海峡付近は5万年～3万5千年の氷期による陸化となり、現在の海面が100m～120m低くなる)へ進出し、そして遂に現在のアラスカを超えてアメリカ大陸に到達した。そして人類は更に千年をかけて南米の最南端フエゴ諸島まで到達し、実に5万キロを移動したことになる。

そのモンゴロイド人種たちはその棲息^{せいそく}を全地球の3分の2の陸地を獲得したのである。「モンゴロイドの地球」はどのように世界に拡がって行ったかを概観すると、この時代の地球は、気候と自然環境が激しく変動する時代に突入していた。気候が寒冷氷期には北半球を覆ったため、動植物群は温かい南の地方へ移動したが、やがて温暖な気候の間氷期に入ると、シベリアの大地は、森林や草原が北の大陸を覆いはじめると動植物群は北へと移動を開始したのである。

この時期の細石刃道具の発明 何故、彼等は極北シベリアを目指したのかを考えれば、体力的に有利と思われる熱帯・温帯を選ばず、寒冷環境の地を選んだ理由は、獣類の肉食料確保することが最大の目的であろう。シベリアの大地にはケブカマンモスや大型哺乳類動物が多数生息していたことが上げられるからである。

モンゴロイドは動物の群を追って極北の大地に向かったのであるが、気候変動に耐え忍ぶ生活防衛を充実、極寒・住居・防寒装備の獲得に成功し、備えを獲得したモンゴロイドは、ユーラシア大陸の熱帯から温帯へ、そして冷温帯へと活動圏を広げ、北の大陸への進出には、更なる寒冷気候環境に適応する身体的・技術的に進歩させたモンゴロイドは、大型動物狩猟の新石器道具と装備(3万年頃、石刃技法・細石刃の開発に成功、やがて日本列島に流入)と細石刃技法を習得しなければならなかった。

地球は8万年前から寒冷な気候の最終氷期を迎えていたが、人類はひるむことなく極北の地を目指し、約2万5千年前までに人類は生活圏を北緯55度まで拡大し、1万5千年前の最終氷期には北緯60度を超えて、東シベリアからアラスカへの進出を果たした。ここにモンゴロイドは極寒の大地を自ら手にしたのである。

後世この石刃^{せきじんぞく}文化の分布調査は1960年、ソ連邦科学アカデミーのA.P.オクラードニコフが指導する極東考古学調査発掘により、石刃文化が大きく分かってきた。アムール中流域、下流、バイカル湖周辺、モンゴル、中国東北部など北アジアに石刃文化が多く出土させたからである。この細石器文化は細石刃の開発に成功したシベリア大陸で使用した黒曜石は、驚くことに北海道遠軽町赤石山産出した黒曜石が、宗谷→樺

太島→アムール河口から上流へと運ばれていたのである。現代人が考えている縄文人の行動範囲は、正確な情報と日本海を超える勇気ある渡海術を獲得していたようである。★6章の70頁・石刃鏃文化の分布図を参照。



図③



図④

③・シベリアで細石刃道具作りに成功しユーラシア大陸に拡散がる ④・細石刃の各道具を作る

石刃の石材は黒曜石、砂岩、チャート、流紋岩、ガラス質安山岩、硬質片岩を加工し大型獣の捕獲することができる文明発展の力となり、技術革新の石刃鏃文化となっていく。この細石器の発明は先史人類最大の発明であり、細石器発明は人類が地球規模の大拡散の原動力となったのである。

シベリアの大地には気候環境 シベリア大地には4、5万年前の中期旧石器から後期旧石器時代にシベリアは、一般に寒さの厳しい不毛の大地の印象を持つが、実は寒冷地に適応した動物、植物は種類も数量も多く、動植物に恵まれた大地ともなっていた。この大地にやって来たモンゴロイドは、衣類・住居・暖房方法を改善し、厳冬期をしのぐことができれば、シベリアは人間にとって意外と住みやすい所と認識したことになる。ここに居住を決めた人々は最後の氷河時代のヴュルム氷期(7万年に始まり1万年前に終了した)を通過経験したのである。

地球が一番寒かった時期は、今から2万年前にシベリア大地は永久凍土となった時期で、即ち、先に述べたように地球上に大きな氷河ができると、海面が下がり、現在より海面が100mか～120mが低くなり、このシベリアとチュコト半島とアラスカ間が下ることにより陸続きとなり、その名を「ベーリンジア」と呼び、ベーリング海を歩いて新大陸へ移動したのである。(移動説に、陸路を歩行移動説と、北海道から縄文人が国後、択捉島からカムチャッカ沿岸、アラスカ沿岸づたいに北米に渡った説もある)

現在シベリアで発見されたマンモスの骨と皮から年代測定すると、すべて3万年前

を超えるのである。と云うことは、2万年前は一番寒い期間で、動物も人間も移動が不可能な時期となっていた。あまりに寒すぎて動物に植生の餌がなければ繁殖できないし、人間も動物を追うことを止めた気候環境であった。

年代測定にはその地域の湖沼^{こしやう}の堆積物を測定することである。泥炭に含まれた花粉は長い3万年の年月を経ても花粉は腐らず、泥炭の中を長期間保存され、その花粉調査をすれば年代環境が分かるのである。その堆積物をボーリング調達して、花粉を種類別に分析し、古代の気候環境が復元するのである。その結果は、2万年前は非常に寒い期間となっていて、その環境ではマンモスをも生きられない環境状態が続いたのであるが、気候環境は3万年の前のこの時代になると、現代に似た気候環境が想定される結果がでたのである。

つまり、マンモスが闊歩した時代は2万年前でなく、気候変動の一つ前の2万8千年～3万年前との結論が出た。この時期にはマンモスが一番多く繁栄し、先史人類たちも北に向かって進出した時代と考えられる。ところが2万年前頃より厳寒な環境時期にモンゴロイドたちは移動を開始、南下するモンゴロイドの一派と、更に東に移動しアラスカに向かったモンゴロイドの一派と別れたのである。

最近、人類学から出てきた説に、“南下を選んだ先史モンゴロイドの一派”とは、即ち、そのモンゴロイドは、遥々日本列島までやって来て、日本人の祖先となったと云うのである。そのモンゴロイドは人類の旧石器時代のグループではないかと考えられている。(この章の78頁、図①第2次人類適応拡散図参照)

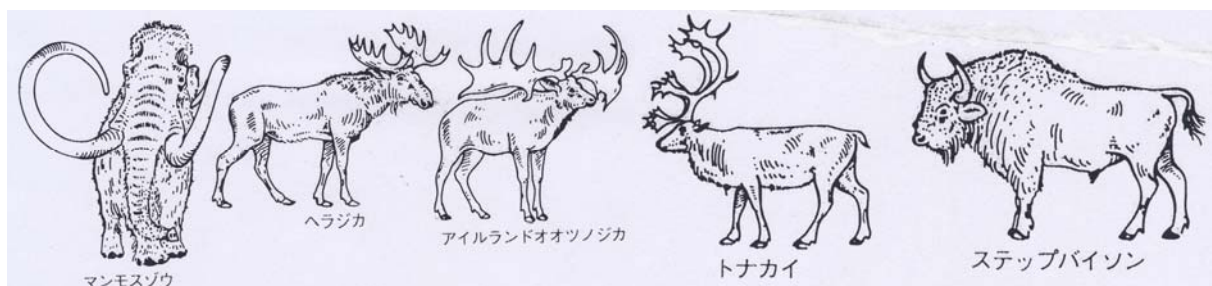
このモンゴロイドは我々と祖先を同じくする人たちであり、従来の2万年前説より1万年早く移動していたことになる。つまり気候環境の一時期前の、素早いタイミングをとらえて、移動行動を起こしていたのではないかと云う説なのである。それは「亜寒氷期」^{あかんびようき}(1つの氷期の中で見られる気温の低下期のこと)の時期であったと考えられる。その同時代に北に向って進んだ派に、アメリカ大陸に進むモンゴロイドグループと、南下したモンゴロイドグループに分かれて移動拡散し、その南下して辿り着いたモンゴロイドが日本民族の祖となった説が有力説となっているのである。

やがて氷河時代が終わり、マンモス捕獲も終焉を迎え、シベリア大地を選んで定着したモンゴロイドたちは、自然環境を巧みに利用し森からはクマやシカの類を捕獲して食料を確保とした。ツンドラを餌にするトナカイや、河川には豊富な魚類によって食料の確保が保障され、各地域によって生活スタイルを変え、多様な文化が生まれ、

生活圏が広がり安住生活のシベリアに、各モンゴロイド種族が集まり新しい文化と歴史を刻んだのである。又、トナカイの飼育法を完成したのは、南方ステップ地帯で発達し、有蹄類(四足の指の爪が蹄^{ひづめ}の哺乳類)を飼育する文化が、シベリアに波及した説が有力となっている。

シベリアの先住民族は現在30種族あると云われ、大きく分ければウラル型、バイカル型、古アジア型となるが、人種いずれもモンゴロイド種である。言語的にはウラル語族、アルタイ諸語、古アジア諸語となり、我々の日本に近い民族となるとアルタイ語群となり、そのアルタイ諸語にはツングース語群、チュルク語群、モンゴル語群と分かれている。そのツングース語群に属す言語民族はシベリア中央部から東部、ロシア極東部に広まっている。(第2章・20頁「アムール川沿岸の住民たち」参照)

ツングースの代表的な民族はエヴェン民族(レナ川流域から半島まで広がる)、次にナーナイ族(ゴリド)、ウリチ族(オルチャ)、オロチ族、ウデヘ族、ネギダール族、ウイльта族(オロッコ)たちがツングース語を話し、アムール川とその支流、沿海州、サハリンの地域に居住を広がっている。ツングース諸族は形質的には典型的な北方モンゴロイドで、彼等の原郷はバイカル湖周辺からアムール川流域に居住し、この地点から北と東へ拡散したと考える説が有力となっている。シベリアで定住した最初の「ムラ」は2万3千年前、バイカル湖畔のマリタ遺跡と現在では考えられている。



図⑤・マンモス・ステップの動物たち (『日本人はるかな旅』①NHKスペシャル 2001年より)

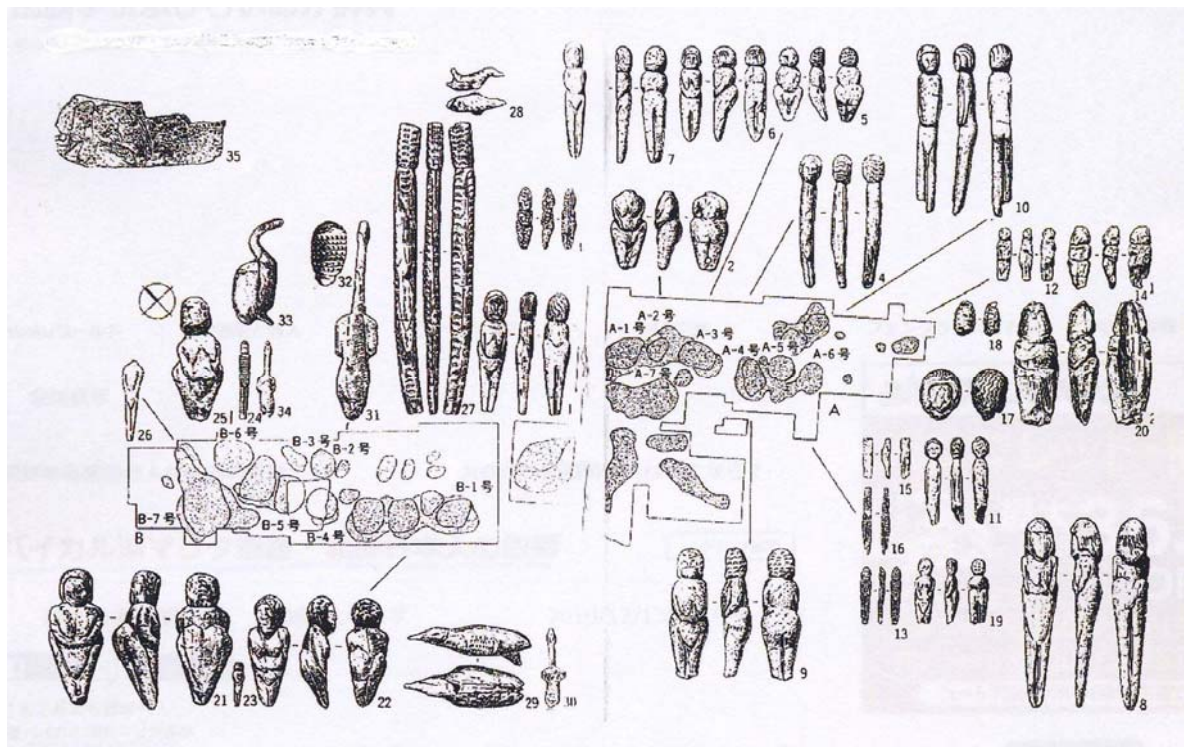
バイカル湖のマリタ遺跡を概観 シベリアの古都イルクーツク市の北西80km、シベリア鉄道で1時間半の所にマリタ村はある。1928年に地元民による遺跡から大量の動物の骨を発見したことにより、人類学者ゲラシモフ(ミハイル・ミハイロヴィチ・ゲラシモフ、1907-1970年、人類学・考古学)が調査を1958年まで継続し、1万点を越す石器、剥片類(原石を打ち欠いて薄い石片・打製石器)と、シベリアではあまり例をみ

ないマンモスの牙製の女性や水鳥を模した丸彫り像など多数の遺物が出土した。3万点にのぼる動物の骨や角や牙が出土、当時の生活の様子を詳しく伝えている。

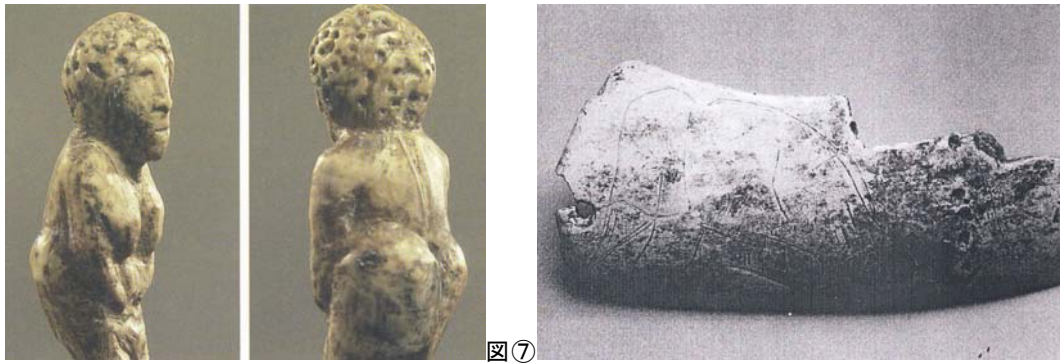
最後のサルタン氷期を超え、シベリアの酷寒の地で順応を果たし、シベリアの住人が誕生した証がマリタ遺跡に見られ、凡そ2万3千年前の遺跡(人類は居住を北緯60度まで北進)となる。遺跡からは直径4mの円形の住居跡から幼児の埋葬された墓が発見された。又、誰もが目をみはったのがマンモスの牙から作られた女性のビーナス像である。

この遺跡からは人骨、遺品、住居跡が発見され、マリタ遺跡人の具体的な暮らしが分かってきた。我が国の縄文時代よりも1万年以上も前の時代にあたり、後裔のマリタ遺跡人の子孫にあたるのは現在のブリヤート人となるのである。そのブリヤード人はブリヤート共和国に4分の1が居住、人口は45万人弱、シベリア諸民族の中で人口が一番多くなっている。

遺跡住居跡調査では円形の床面に50~70cm掘り込み、竪穴式、半地下式構造となっていて、トナカイの角を住宅材に使用、マンモスの毛皮や牙もテント周りを守る補強材に使われていた。住宅内には3個の炉跡が確認され、マリタ遺跡人は春(夏用)と秋(冬用)に住居を作った生活を営み、春は動物を狩り、夏は漁労、冬期は北極獣を捕獲していた。(『モンゴロイドの地球』4・極北の旅人・米倉伸之編より)



図⑥・マルタ遺跡・住民の精神的生活を示す遺物30点をこえるビーナス像が出土した全図となる



⑦マンモス牙製ビーナス像(図⑥の22番)豊かな胸と大きな尻、⑧ビーナス群の(図⑥左上35番)長さ8、3 cm、幅3、6 cmマンモス牙製プレート線画刻。(『モンゴロイドの地球・極北の旅人』米倉伸之著)

縄文人の DNA(遺伝子)(『日本人はるかな旅①』39 頁～44 頁・NHK スペシャルより)

《一般に日本で発見される化石骨は1 万年前以降、いわゆる縄文人のものである。火山国の日本では土壌の酸性度が強く、ヒトの骨は分解されて消滅してしまうことが多い。この縄文人の DNA 分析に、佐賀医科大学の篠田謙一助教授取り組んでいる。そもそも DNA とは、A(アデニン)、T(チミン)、G(グアニン)、C(シトシン)、という四種類の塩基(科学において酸と対になって働く物質)が、例えば AGCCCTTAA・・・というように一列に配列された、鎖のようなタンパク質である。ヒトの身体は6 0 兆個あまりの細胞で構成されていて、その細胞一個一個に核があり、核の中に両親から由来する染色体があり、更にその染色体の中に DNA には ATGC(塩基記号)の塩基の配列が3 0 億個も連なり、遺伝子情報を^{つかさど}掌っているのである。

そして DNA は染色体のほかに、もう一つ、細胞の中でエネルギーを作り出す役割を担っているミトコンドリアという器官にも存在する。人類の進化や系統を進化や系統を分析するのに使われるのは、ミトコンドリアにある DNA である。篠田氏もこの DNA を取り出し、塩基配列を特定して分析にあたっている。これはミトコンドリア DNA の全塩基配列が1 万6 5 6 9 個という非常にコンパクトなサイズの DNA であることと、染色体の DNA に比べ、太古からの時間経過とともに ATGC という配列が書き換わってゆくスピードが速いためである。

書き換わりの速度は特に重要で、この特徴のおかげで二つの地域の人間を比べたときに、なにかしらの差異が読み取れるのである。

縄文人のミトコンドリア DNA 配列から何が見えるのだろうか。たとえば、同じ集落内で見つかった縄文人の DNA からは、配列の一到具合によって、集落には何家族が存

在したか、違う家族でもどのくらいの近親関係にあったかなど、太古の村の人間関係がつぶさに分析できる。こうした分析の中で私たちが特に注目したのは、縄文時代以前に日本列島にやってきた人たちが、主にどこを通過してやってきたのかを、「具体的に」調べる研究であった。・・・DNA 配列を突き合わせたところ、アジアの各地域で縄文人と DNA 配列が一致する民族が存在することがわかってきた。

篠田助教授が DNA バンクに登録している縄文人 29 体のうち、一体の縄文人は韓国人と一致した。また別の一体は台湾に住む中国人と、そしてタイ人との一致も一体あった。そして驚いたことに、縄文人 29 体中実に 17 体がシベリア平原に暮らすブリヤート人と一致したのである。この分析結果を踏まえて、篠田氏は語った。「われわれの祖先たちはゆかりの深い土地はどこか。いま DNA の見地からいえるのは北東アジア、さらにいえばシベリア平原あたりではないでしょうか」。アフリカを旅立ってさまざまなルートから、日本列島へたどりついた祖先たちであるが、その本流は北回廊であったかもしれない。・・・》と述べている。

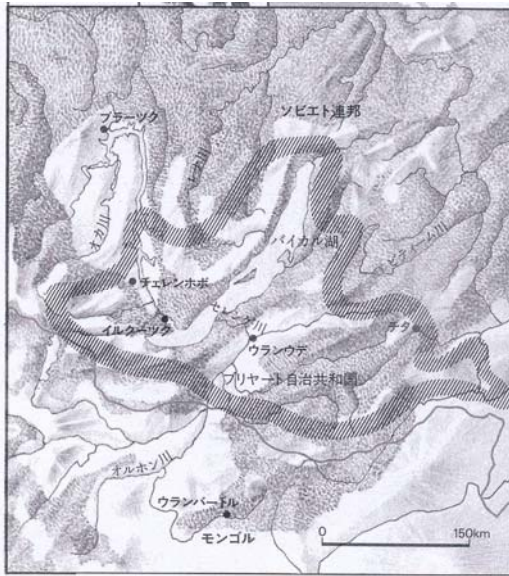
日本人バイカル湖畔説 「日本人の G m 遺伝子」が世界民族の中でどう位置づけられるのかを明快に示した。日本人の源流は何処方向から来たのかを究明したものである。本論の G m 型というのは血清に関わる血液型の一種で、免疫反応に重要な役割を果たしている。G m 遺伝子は極めて安定的で人種の識別や混血の程度、また集団の移動の跡づけの判断する場合に信頼度が高い。G m (ガンマー・マーカー) 型という血液型は、人種の識別、混血の有無、混血の割合、民族の移動の跡をたどるのに有効である。血液学や遺伝子学そして分子生物学の立場に立って、日本民族バイカル湖畔起源説を提示している。(『日本人は何処から来たか』松本秀雄著・NHKBOKS・1992 年)

ブリヤート民族考 『世界の民族 14』「アムール川域の民族」平凡社・1979 年より。

ブリヤート族は、最北端に住むモンゴル族である。ブリヤート族は体形・方言・経済等の多くの慣習はモンゴル本国と似ている。ブリヤートはバイカル湖の西に住むチュルク語族=チュルク系民族のオルホン・チュルク族と関係があるらしい。ブリヤート子孫は、南からバイカル地方へ波状的にやって来たモンゴル族の子孫説もある。現在のブリヤート人自身はこの問題にあまり関心がない。

バイカル湖の西に住む氏族の一集団は灰色の“ウシの子孫”であると称し、バイカ

ル湖の東に住む別の集団は、“雌のハクチョウ”と称している。そのハクチョウは、天から舞い降り、羽を脱いでバイカル湖で水浴びをしているところを獵師に捕らえられ、獵師の妻になったと伝えられている。もしかしたら日本の羽衣伝説はこの伝説から来ているかもしれない。ブリヤートは4つの氏族に分かれ、伝説上では天のハクチョウの娘の子孫は最大の氏族「ホリ」は東に住み、西には神話上のウシの「ブハ・ノヨン」を祖先がいて、南にはモンゴルから来たと云われるモンゴル族がいる。



図⑨ブリヤート自治共和国はバ湖の東西にある

図⑩シベリアの遺跡分布略図『日本人はるかな旅③』



⑪・1880年代の裕福なブリヤート一家

⑫・シベリア横断鉄道沿線ウラン・ウデに住む老婆

⑪は日本人によく似ている。ブリヤート族は19世紀末まで、バイカル湖の東と南に住み、仏教徒でシャーマニズム信仰となっている。⑫・この老婆の写真はシベリア鉄道建設時代、ブリヤート族の土地をロシア人移住者に明け渡した時の苦痛表情写真なのである。表情は日本人の顔である。

第8章・縄文文化終焉と稲作文化の狭間でシャーマン信仰は生まれた

縄文時代は今からおよそ2万千年前～1万3千年前、約1万年も続いたこの時代は、それぞれ地域での縄文区分の期間での特徴的な土偶と土器が生まれた。考古学の縄文時代区分は、「草創期・15000～11000年前」、「早期・11000～7000年前」、「前期・7000～5000年前」、「中期・5000～4000年前」、「後期・4000～3000年前」、「晩期・3000～2300年前」と6区分となっている。縄文時代土器最先端の地域、北海道・北東地方の土偶をご覧ください。（「^{つがる}木造亀ヶ岡考古資料室展示略説シート」より）



図①



図②



図③

①遮光器土偶（縄文晩期）

②中空土偶（縄文後期）

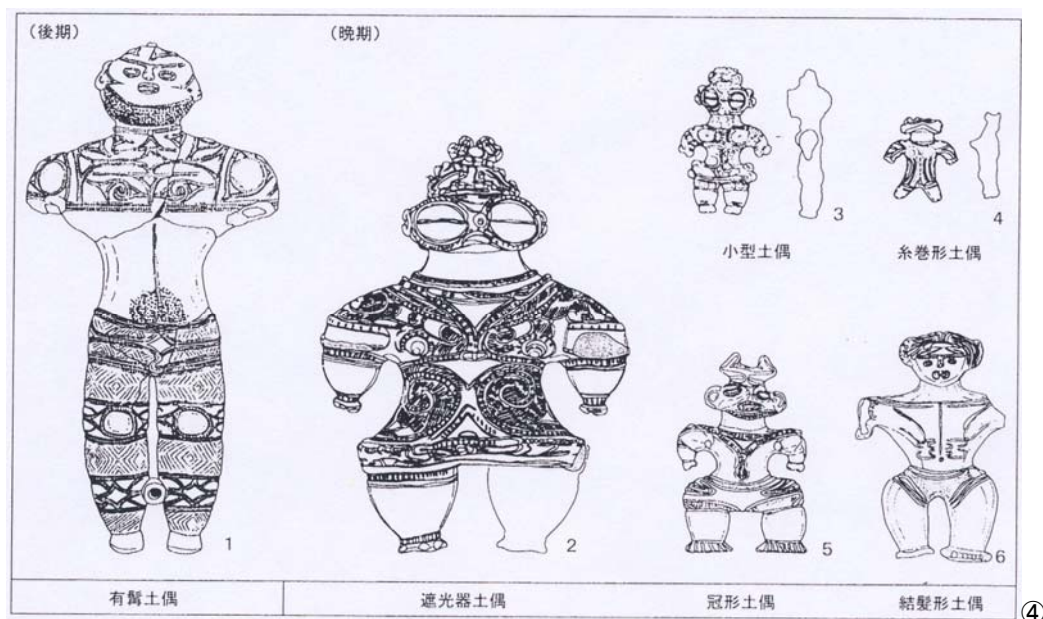
③仮面の女神（縄文後期）

図①・有名な^{しゃこうき}遮光器土偶は明治20年、亀ヶ岡遺跡（^{つがる}市亀ヶ岡石器時代遺跡）から出土したもので、国重要文化財（実物は国立博物館）となる。この土偶は余りにもリアルな人形の風貌と大きさ、人々の度肝を抜く驚きと感動の一大発見となる。欧州に留学中の坪井正五郎（人類学1863－1913）が、英国博物館に展示されていたシベリア原住民の被り物の「雪中^{しゃこうき}遮光器（雪眼鏡）」に似ていることに着目し、民族誌に遮光器と図示し、後に遮光器模様の土偶と呼ばれた。遮光器土偶文化は東北地方、北海道南部、関東、中部地方、近畿地方まで広がっている。（『遮光器土偶の集成研究』鈴木克彦著）

図②・中空土偶（内部が空洞）・国宝、縄文後期・北海道函館市著保内野遺跡・高41、5cm、体内部が空洞、現存する土偶の中では日本最大級、黒漆、赤漆がわずかに認められる。墓とされる場所より出土、死者の副葬品と見られている。よく見ると両脚を繋ぐ管は、体内の空洞と連結して空間を作り出し、その空洞を伝わって胎児の霊があの世へ行くことを示している説が有力。

図③・仮面の女神・国宝・長野県茅野市中ツ原遺跡・高34cm、墓と思われる場所より出土。一説にシャーマンの祈祷の似姿とされ、その集団の守り神土偶とされ、安

産・食料確保・病気治療・生命の再生を祈願したと考えられている。



図④・北日本の後期・晩期土偶の類似 亀ヶ岡文化とは、縄文晩期に東北地方一帯と北海道南部に形成された地方的な縄文文化となる。命名は青森県つがる市亀ヶ岡遺跡に拠る。亀ヶ岡文化の前半期に遮光器土偶が作られ、後半期には冠形土偶、結髪形土偶と呼ぶ大型で中空作りの土偶が作られ、それらを総称して亀ヶ岡文化の土偶と呼んでいる。『遮光器土偶の集成研究』鈴木克彦著・弘前学院出版会より。



図⑤



図⑥



図⑦

図⑤・縄文中期・国宝・長野県茅野市棚畑遺跡・高27cm、集落の中央広場内より出土。太い脚が下半身を安定させ、お尻を後ろに突き出すような姿勢から「出尻形土偶」と呼ばれている。図⑥・縄文中期・国宝・山形県最上郡舟形町西ノ前遺跡・高45cm、東北地方代表する縄文の女神像(ビーナス)である。頭に開いた穴に革製の^{でっちらかた}仮面をかぶせたのではないかと云う説があり、国内に現存する土偶では最大級。おそらく祭壇の上にこの土偶を自立させ、縄文人は^{ひざまず}跪いて願い事を発信したのであろう。

図⑦・縄文後期・青森県八戸市風張^{かざはり}1遺跡・高19、8cm、竪穴住居の入り口から

一番奥まった壁際で割れた状態で発見される。スリムな体形であるが、はっきりとした女性器を表現した部分を認めることができる。顔の表情からシャーマンの可能性も考えられ、又、家の中で祀られ願いを聞き届けてくれる存在であつたらしい。

縄文土偶は再生を願う胎児と妊婦の埋葬か 『日本の深層』梅原猛著の「アイヌの老婦人よりアイヌの^{そうぼう}葬法の聞き取り話」の章から、縄文土偶①～⑦迄の奇異なる女性の土偶について「再生を願う胎児と妊婦の埋葬」から要約で。

《・・・アイヌでは子供の葬式と大人の葬式はちがう。子供は家の入口に逆さに甕^{かめ}に入れられて埋められている。なぜ子供は家の入口に埋められるかといえば、それは次の様な理由による。そもそも全ての人間の生命は祖先の霊が帰ってきたものである。祖先が遠いあの世からこの世に帰ってきて、子供になって生まれてきたのに、この世で良い目もせず、あの世へ送り返すのは可哀そうであり、また帰ってきた先祖さまにすまない。

それで子供の霊は大人のようにあの世へ送らず、もう一度母の胎内に帰して、生まれてこいという願いを込めて、家の入口に逆さに甕^{かめ}に入れて埋められるのである。甕はおそらく子宮のイメージがあり、母の子宮に帰って、もう一度生まれ変われという意味であろう。子供の葬儀はたいしたことはないが、一番厄介なのは胎児を腹に宿した妊婦の葬儀である。

この時はひとまず普通の葬儀が行われ、妊婦は墓に埋められる。そして翌日に、取り上げばあさんが墓場へ行き、その妊婦の^{しかばね}屍を掘り出して、妊婦の腹を裂き、胎児を取り出し、それを妊婦に抱かせて、あらためて葬るというのである。これは和人からみれば残酷なことかも知れないが、極めて理由のある事である。

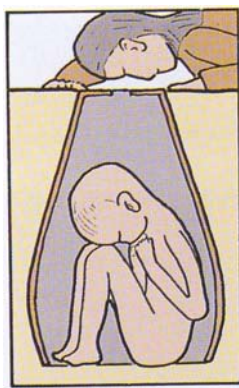
アイヌにとって人間の生は全て再生なのである。胎児は全ての祖先の誰かの霊が帰ってきて、胎児になったものである。ところが妊婦が死んで、胎児が妊婦の腹の中に閉じ込められ、胎児はあの世へ行けない。母親は死んだのだから、母親の次の子になって生まれることはできない。腹の中の胎児の霊は行き場を失った霊となる。

はるばる遠いあの世から帰ってきた祖先の霊が行き場を失ったとすれば、それは祟りをする。それで胎児を取り出して、母親の腕に抱かせて、母親と共にあの世へおく必要がある。土偶には男の土偶、老婆や少女の土偶もない。その土偶さまざまであるが、全て普通の人間の顔でなく奇怪な^{そうぼう}相貌をしている。そしてその目は固く閉じら

れているか、瞳孔が開いているかである。アイヌのユーカラによれば、目のある死体というのは再生可能な死体であり、目のない死体というのは再生不可能な死体である。遮光器土偶は強い再生の願いを込めて作られた土偶であろう。

そして土偶は完全なものではなく、全て肢体がバラバラにされている理由も、アイヌの考えに照らせばよく解る。アイヌの社会には、この世とあの世はあべこべであり、この世で完全なものはあの世で不完全であり、この世で不完全なものはあの世で完全なものであるという考えがある。この考えは現在の我々の葬儀時に、死人の着物を左前に着せる儀礼、死人に供える茶碗などを割る風習が今でも続いている。

妊婦と胎児と共にあの世へ行けるかどうか不安であり、それで妊婦を形にした土偶を作り、母親と胎児が無事にあの世に行って、また生まれ変わってこの世へ帰ってきてほしいという願いを込めて、葬ったのであろう。一つ一つの土偶には深い人間の悲しみが込められている。・・・》と考察。縄文時代の乳児の死亡率が高いことが分かる。



図⑧



図⑨

⑧・子供の埋葬甕棺墓推定図 ⑨・坊主峠遺跡(北山市)の甕棺出土(『縄文人の祈り』北上市立博物館)

シベリア・タマリ遺跡のビーナス像と日本のコケシ形石像は酷似している



図⑩



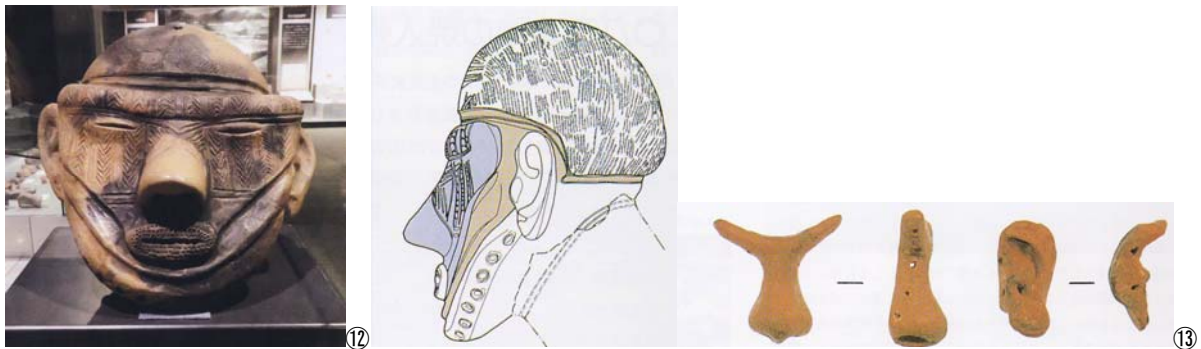
図⑪

⑩・マリタ遺跡出土のマンモス牙製の女性像。 ⑪・岩戸遺跡(大分県豊後大野市清川町)より出土。

⑪はこけし形石偶・緑泥片岩を加工して作られた石製石となり、人の頭部を表した

ものか、目、鼻、口の表現と思われる窪みがあり、精神文化を表す遺物としては国内で稀有なもので、祭祀などに用いられたと思われる。岩戸遺跡は後期旧石器時代となり、高さ10cm、約2万年～1万5千年前のものとなる。シベリア・マリタ遺跡から出土したビーナス像の中に、岩戸遺跡で出土したこけし形の石偶に酷似しているものがあり、日本縄文後期時代においてもビーナス像が作られていたことを伺わせる石像が出土したことになる。(豊後大野市内文化財ハンドブック①『郷土の歴史』より)

縄文大型土偶の頭部その1・国重要文化財・縄文時代後期(約3000年前) 葦内遺跡^{しだない}



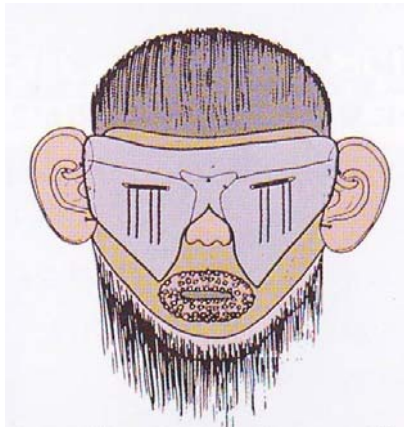
⑫岩手県立博物館・盛岡市葦内遺跡より出土^{しだない}

⑬土偶頭部と側面実測図と土偶取り付部品

図⑫・葦内遺跡より出土した土偶(昭和55年)、御所ダム建設に伴う発掘調査による。この土偶は他の土偶に比べ、非常に大型で本来は全身像があったと推定し、葦内遺跡の大型土偶は、顔面の段差や額^{ひたい}がはみ出していることから見て、仮面を着けている土偶と判断される。しかも、目を閉じ、口元が力ない仮面の様子は正しく死者の形相となっている。顔面に施された文様の異様さや、顎や頭に取り付けたであろう髭や髪からすると、それは死霊の形象にふさわしいもので、面を緊縛^{きんばく}した様子は死者への仮面でなく、所作を演じる者の装飾仮面を描写したものであろう。とある。

図⑬の左、面の被り付けに上マスクと土製品は色彩で区別し、図⑬鼻の部品(鼻横6、5cm×縦6、3cm)、耳の部品(耳横3cm×縦6cm)(大迫町内川目立石遺跡より出土)

八天遺跡の墓地と仮面・その2^{はってん} 八天遺跡は北上市更木町に、北上川左岸に接する面積約2ヘクタール(100m×200m)の縄文時代中期から後期にかけての集落跡。昭和52年に国の重要史跡に指定され、その理由は我が国の仮面習俗の源流を知らせる鼻、耳、口の土製品が発見、縄文後期最大級の家屋跡^{かおくあと}が発見されたことによる。



図⑭



図⑮

⑭・仮面を被った八天の縄文人

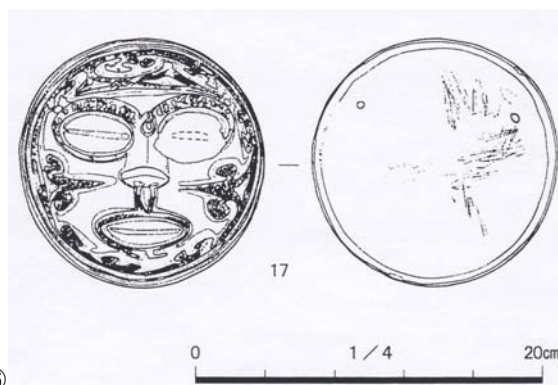
⑮・八天仮面の鼻・口・耳の部品となる

図⑭・仮面を被った八天の縄文人は「^{しなだい}萩内遺跡の土偶によって復元、上マスク（蝶形仮面）、土色は下マイク、耳、口、鼻は下マスクに取り付けられる。 図⑮・八天遺跡出土鼻・口・耳の土製品、下段は同鼻の前面。土製の口、耳、鼻は皮や植物質の材料に取り付け可能な様に、いずれも^{ひも}紐通しの穴が開いている。死者に被せる仮面と考えていたが、しかし、一カ所から鼻、耳、口が揃って出土しているわけではなく、死者に被せた面と解釈するには無理の結論となる。（解説は『縄文人の祈り』・北上市立博物館より）

土面・その3 縄文時代の仮面は現在まで140点発見され、土製が120点、貝製が10点、石製が数点発見されている。土偶と比べ圧倒的に少ない。土面は後晩期の北・東日本に数多く出土し、晩期の土面のうち遮光器土偶と目の表現がよく似た一群が東北地方で見られる。（重要文化財・土面より）



図⑯



図⑰

⑯・土面（複製）秋田県能代市二ツ井町麻生遺跡出土 ⑰土面展開図『遮光器土偶の集成研究』より

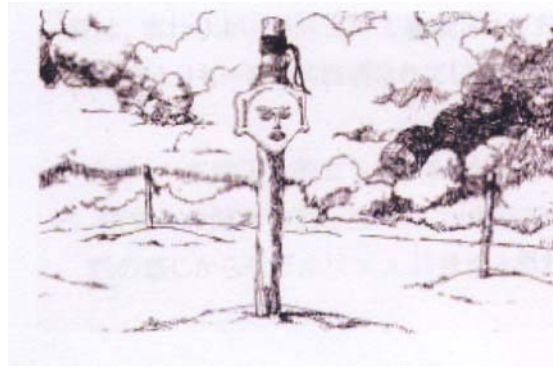
図⑯この仮面は土面と呼ばれ、今から約2500年前、縄文時代晩期、両眼の外側に小さな^{あな}孔があることから、呪術的儀式の際にお面として使われていたと思われる。（東京大学総合研究資料館所蔵） 図⑰・『遮光器土偶の集成研究』鈴木克彦著・弘前学院出版会。

土面・その4 図⑩・土面・北海道千歳市ママチ遺跡第310号^{どこうぼ}土墳墓から出土。国の重要文化財「土面」、縄文時代晩期終末(2300年前頃)。土面を詳しく見ると、「鼻を中心に全体が膨らみ、楕円形の目と口は貫通、頭と耳には5ミリの貫通孔があり、紐が通せる。眉は盛り上げて左右につながり、鼻は眉よりも一段高く表現されている。



⑩

⑩・縄文人の特徴をしめした土面



⑪

⑪・土面をかざした想像図

図⑪・墓標に付けられた土面の想像図。この土面は、墓の上から発見されたことから、墓標に付けられたものが落下したと考えられる。縄文時代の土製仮面としては最北の出土であり、北アジアや極東地域の諸民族との関連が考えられる貴重な資料となっている。(北海道教育委員会「国の重要文化財・土面」より)

動物土偶の精巧に驚く 日本の縄文土偶を見て思うことは、現代人から見て醜い女性土偶が作られているのは何故か。それは縄文人たちが土器に対する神秘的な恐れや呪術を感じていたのではないかと思われる。



⑫

⑫・猪形土製品縄文後期～晩期



⑬

⑬・巻貝土製品



⑭

⑭・巻貝土製品 16、6 cm

⑫・猪土製品(弘前市十腰内遺跡 18 cm)は韓国の盤亀台遺跡の壁画のように、内臓を透し見たような図柄となり、これは恐らく呪術的な祈りを込めたものと考えられる。その点は女性土偶と同じ解釈が成り立つ。更に本物見間違う土器が、図⑬と図⑭は精巧な巻貝を模した土製品が存在し、土器の^{たくみ}匠の技は見事であると言わざるをえない。(⑫村上市山北町上山遺跡、⑭村上市山北町上山遺跡縄文後期／前2千～1千年頃)

縄文土偶を理解する 『日本の深層』梅原猛著の「土偶の呪術性」の考察を概略。

《・・・縄文人は模造もわけなく作ることができたはずである。人間のリアルな土偶は簡単にできたはずで、それは何故か、像に対する恐怖ゆえではないかと思う。人間と同じ像を作ったら、その像に人間の魂が奪われるのではないか。また悪い人間や神がいて、その像に呪いをかけたら、^{たちま}忽ちのうちにその人間は死んでしまうのではないか、という恐怖は縄文人には強かったにちがいない。

猪の体にも色々な線が施され、何らかの呪術と関係があるに違いない。人間と同じ像を作るとは、強いタブーなのであろう。あの土偶(女性土偶)なるものは人間の像ではないと考えねばならない。おそらくは死霊の像であろう。この死霊は、何らかの鎮魂を必要としているのだろう。

お産での死、子どもを腹に抱えたまま死んだ女、何らかの意味で汚れている死霊であり、鎮められ清められるべきものであったにちがいない。その土偶に死霊をうつして何らかの祭をする。この地方の縄文人にとっては、宗教的に重大な意味もった儀式に使われたにちがいない。縄文晩期にあの巨大な目の遮光器土偶^{しゃこうき}を作らせたのではなかろうか。強いて説明するならば、アイヌのユーカラでは死んだ人間を2つに分け、一つは目のある死人(シク・ウン・ライクル)と、一つは目のない死人(シク・サク・ライクル)である。目のある死人は、ふたたび東の空に昇天して復活することができ、目のない死人は西の空へ消え、もう復活することができない。巨大な目をし、しかも深く閉じられている目は、目のある死人を表現しているように思われる。何か不幸な死に方をした女、その女の死霊を清め、鎮め、それを黄泉^{よみ}の国の永久の闇へ沈めるのではなく、明るい東の空に返して再生させようとする、そういう愛情が、あの世にも奇妙な遮光器土偶を作らせたのではないか。》と述べている。

縄文人の土偶考 土偶の不可解なことは、全く壊れていない完全なものが極めて少ないと云うことである。何千年もの間、土中に埋もれていたもので、壊れていない方が不思議であるが、しかし、完全なものは一切なく、必ずどこか壊れているのである。土偶を作る段階では、その作りを見れば、しっかりと作る意志は感じられる。どうも意図的に土偶は壊されているようである。つまり、土偶とは最初から壊されるために作られた、悲しい人形であることが解る。

土偶の多くは、縄文ムラのはずれのゴミ捨て場や、竪穴式の廃屋の窪地の捨て場な

どに、投棄された状態で発見される事例が大部分を占めている。土偶は何かの機会に意図的に壊されて、破片が村はずれに投棄されていることに関心をいただく。

土偶とは、最初から五体の一部を壊されるために作られていることが分かる。それは大陸シベリアのシャーマンの祭具等の木偶神とことなり、日本の土偶文化は全く異なった歴史発展をとげてきたことになる。最初から、壊すために作る人形とは、どのような存在理由を持っているものであろうか。

諸説には、身体の不具合のある部分に相当する土偶の部位を破損させることによって、身体の回復を祈願した説などがある。土偶がこのような製作者または保持者の身体に関連しているとの考え方は、妊婦を表現した土偶が多いことから裏付けられ、土偶はそのほとんどが女性を表現して作られているからである。

世界各地の初期の農耕文化では豊穡を祈願する女性像(ビーナス)が発掘されている。縄文時代において、この様な豊穡を祈願する女性神像と、やや性格が異なるものの、妊娠を表現した大きな下腹部や正中線(お腹の真皮の断裂跡)や、大きく膨らんだ乳房等が表現されているものが多い。先史時代において、医療の未発達であったこと、出産は生死をかけた一大事であったにちがいない。

縄文人の親たちが、母子共に健康に出産できるように、みんなで土偶に祈ったのであろうか。縄文土偶の人像以外でも、動物像に多産の象徴する猪等の土偶が見られ、子孫繁栄を願った縄文時代で最も重要な土偶による祈願があったことが縄文信仰として浮かび上がってくる。(『はじめての土偶』武藤康弘監修・世界文化社参考)

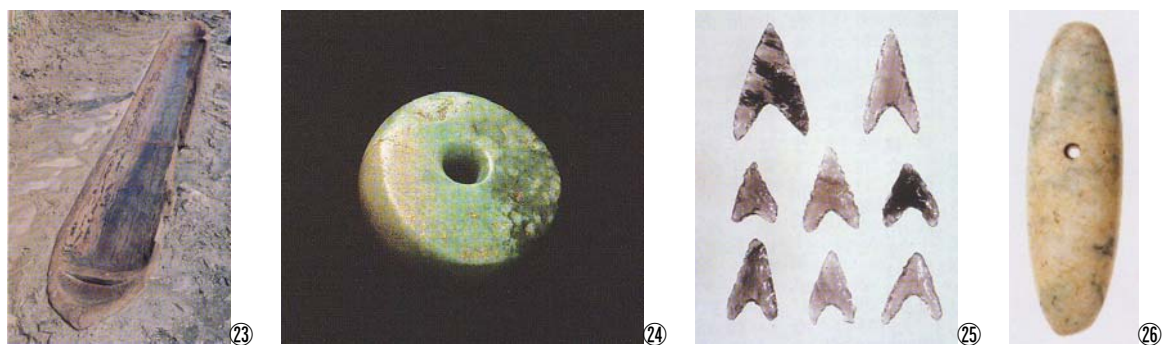
縄文時代の交易考 氷河期、シベリア大地でマンモスなどの大型動物を追い求めていた我々の祖先は、およそ2万年前の最寒冷期に、獲物を求めて陸続きのサハリンから日本列島にやってきたグループと、南方の大地から、琉球列島をつたってやってきた人々のグループとが、日本列島で融合し、縄文文化が花開かせたのである。

この時代の中心な役割をはたした「物」は、交易の花ヒスイ(硬玉・勾玉類)等で、縄文人たちのあこがれの耳飾りが、日本海沿岸を中心にして発信し、新潟から隣国の国々へ交易を広げていった。加工場は富山湾沿岸で、磨製石斧・耳飾り・装飾品を加工し、東北・北陸・近畿地方に流通させたことが、舞鶴の浦入遺跡や若狭三方鳥浜貝塚から出土した丸木舟が如実に証し、外洋航海の流通行動の範囲が確立していた事が判る。

下記の図②丸木舟は福井県若狭三方五湖周辺から、鳥浜貝塚より2艘、ユリ遺跡(鳥

浜遺跡近隣)より9艘、計11艘の丸木舟が出土し、縄文前期後半の5、5千年前の丸木舟となっている。舞鶴の浦入遺跡は縄文前期中頃、6千年前の日本最古の丸木舟が出土している。大型丸木舟の他、杭や碇石も出土し、最古の舟着き場とみられる。

図24・図25は新潟県糸魚川地方からヒスイのペンダント・耳飾り等、三内丸山遺跡から出土し、ヒスイ玉が鯨ヶ沢餅ノ沢遺跡では、5千年前のものが出土となる。青森三内丸山遺跡とのヒスイ産地との距離は約500kmも離れており、「塩の道」に沿って運ばれ、長野県黒曜石の鏃・ヒスイと共に運ばれてきたものとなる。又、三内丸山から北400km離れた北海道遠軽町白滝の黒曜石が三内丸山にも運ばれている。おそらく三内丸山側からはクリやブナの実等と交換し、日本海側の津々浦々への丸木舟で運ばれ、現代人が考えている以上に縄文時代の交流・交易は栄えていたようである。



23・ユリ遺跡1号丸木舟 24・ヒスイ製大珠 25・黒曜石鏃 26・硬玉製大珠

23・福井県西南部若狭湾沿岸の三方五湖から出土。(若狭三方縄文博物館)

24・青森県三内丸山遺跡出土。25・同。(三内丸山遺跡解説)26・鯨節型の硬玉製大珠は富山県氷見市朝日貝塚より出土、最大級15、9cmの優品で重要文化財。(氷見市立博物館)

ヒスイに魅かれた縄文人 縄文人たちはヒスイの緑色は魅惑的な宝石と歓迎された。新潟県西部を流れる小滝川や青海川の上流に産出するヒスイは、硬玉とも呼ばれ、硬度6、5から7に及ぶ硬石であり、金属を知らない縄文人にとっては、最も神秘的な存在となる。とくに硬玉製大珠と呼ばれる大ぶりの垂飾品(首飾り)は、不老不死を願う宝玉であり、呪術信仰には欠くことができない装身具でもあり、呪術者や権威を表す者たちが示す宝玉として、祭祀・儀礼に胸元に硬石製大珠を首に下げていたと考えられる。尚、研磨技法の優れていることは、吊るすための紐の通し孔の穿孔(穴あけ)技術で、硬度の高いヒスイに、竹管や骨管を用いて(硬質の砂)穴あけを完成している技法は殊に優れている。現代社会においても、ダイヤの工具によってあけている。(『海

クリやドングリ大量生産 三内丸山はクリやドングリの落葉樹林を開拓し、中期・後期と栄え、三内の地域のほとんどが、コナラやブナの原生林落葉樹林帯の地域となっていくのである。およそ5500年前になると、急激に「クリ」の花粉が急増することで判るのである。

このことはコナラやブナの覆われていた三内丸山の台地が、急速にクリ林に変貌したことを示し、三内丸山の人たちが、原生林をクリ林に作り替え、長期にわたって維持管理していたことを推定される。ある試算によれば、当時の三内丸山の人口約500人として、200平方キロの山林を植林開拓して、その一割(20万本)クリ林だとすると、年間収穫量が800トンと割り出だされ、1900人あまりの人口を養える食料生産量が計算上成り立つ三内丸山のムラ集落であることが分かる。

今から4千年前から寒冷化の環境変化始まる 縄文時代についての近年の大規模な発掘により、巨大な木造建築物と集落(ムラ)の存在や、日本海に出て丸木舟の航海の情報網を持っていたことが分ってきた。が、しかし謎が残る。およそ4千年前を境に、繁栄を築いてきた三内丸山のムラが突如崩壊するのである。ムラ数が激減、人口も激減と異常事態が発生したことが、発掘調査で分ってきたのである。

繁栄をきわめた縄文中期に日本列島人口は26万人と推定されていたが、4千年を境に危機を迎え、縄文後期には16万人と減少し始め、さらに晩期には人口が7万5千人と大減少となるのである。とくに縄文中期の中部山岳地帯から関東内陸部が壊滅的で、人口が半分か3分の1の大激変となり、直接の原因は気候が寒冷激変気候となったことである。その余波は東北地方全域を襲い、繁栄を謳歌していた三内丸山集落ムラが終焉を迎えたのである。

気候の大原因の謎を解くため、青森県上北郡^{とうほくまち}東北町の小川原湖(海水と淡水^{たんすい}交じる)の堆積泥の緻密な調査によって、1年1年の土泥の変化を丹念に追った結果、三内丸山や近郊のムラの多くが、危機が到来をきたしたのは、今から4千年前の環境変化を捉えた。それは今から4160年前のことで、その変化の様子は植物プランクトンを追うことでその環境変化を知ることができた。

植物プランクトンは好環境時には生殖活動を繰り返すが、水温が低下状態になると、

栄養分が極度に欠乏し、「休眠孢子」(厚い細胞膜が耐寒性・耐乾燥性が強くなり不適切な条件に耐える孢子)に状態となって一時的に生殖活動が止まる。その検査結果によると、4160年前を境に植物プランクトンの休眠孢子が、^{いちじろ}著しい変化を始めたことが分ってきた。そして16年間という不順環境激変の長い年月が続き、全てのクリが休眠孢子に変わる劣悪な環境となっていたのである。更にその後、200年間この悪化した環境が継続していたという恐るべき事実も明らかになった。4160年前から環境は大きく悪化し、わずか16年で気温が平均3、4度低下するような事態に見舞われていたのである。

その頃の日本列島の縄文集落は狩猟採集の植物(クリ・トチの実等)の管理栽培を行うムラ社会では、縄文狩猟採集民は高いレベルの人口に達していたと思われが、それが急激な環境変化により、縄文集落はもろくも崩れたのである。

それはおそらく、紀元前400年前後、北九州において水稻耕作が始まった時期と重なる時期と思われる。その同じ頃に縄文土偶の霊力によって続縄文文化の発展を謳歌していたムラは、近代の経済活動(米の生産による計画社会活動)による弥生稲作農耕民は、北九州から四国・近畿地方において、米作農業を急発展して近代国家の様子を見出していたが、東北地域の続縄文狩猟採集文化の継続は、ムラの経済力は成長しない徐々に衰退のムラ集団となって行くのである。

それまで安定した生活を営んでいた縄文文化は、やがて、狩猟採集土器や土偶の霊力は衰え、「稲作の神」にその座を奪われ、^{たちま}忽ち縄文の神々は姿を消す運命となったのである。縄文時代から弥生時代(早期・紀元前400年～西暦200年)に変わる変換期に、北海道・沖縄を除く日本列島は、新しい水田稲作の文化の全盛に入っていく時代となるのである。しかし、稲作ができない東北地域と北海道全土では続縄文文化が継続され狩猟採集の経済活動の発展はみられず、やがて西の経済力を持った大和政権が台頭し、東北の“蝦夷の国々”は、のみこまれて行く歴史となるのである。

縄文時代における大陸との交流考 山内丸山遺跡からヒスイ、黒曜石、コハク、アスファルトなど産地が遠方ある遺物が数多く出土している。黒曜石は北海道(遠軽町赤石山から採取された黒曜石は樺太や大陸まで運ばれている)、長野県糸魚川からヒスイ、秋田県はアスファルト(接着剤として鍬や土器の修理)、コハクは岩手県から運びこまれ、三内丸山は東日本最大の交易先進ムラに発展し、遠隔地からの交易の大拠点となって

いたのである。

三内丸山遺跡から「^{けつじょう}玦状耳飾り」(耳飾りは身分を表す飾り)が出土している。この^{ぎよくき}玉器文化は大陸中国との関わりが注目されている。遙か昔(6000余年前)、青森の三内丸山のムラとの交流・交易「海の道」が、即ち、日本海を媒介として中国(沿海州の国々經由)と繋がっていたことが分かってきた。



図 26



図 27

②⑥^{けつじょう}玦状耳飾り切れ目に耳に刺す ②⑦の(2)は塩ヶ森遺跡、(3)は東角地遺跡、(5)は三内丸山遺跡

②⑥の玦状耳飾り(中央に穴、切れ目の飾り)については中国起源説、東北アジア説、多起源説が、以前から縄文文化遺物の中に大陸の先史文化に酷似する遺物があることを指摘されてきた。^{けつ}玦については、大陸の先史文化に見られる遺物で、墓(権力者の埋葬)からの出土状態を見ると、死者の耳飾りや装身具として使われていることが分った。中国東北部、興隆窪遺跡、河姆遺跡、興隆溝遺跡、遼寧省査海遺跡から古い玦が出土し、日本においても、先土器時代の墓から耳飾り、首飾り、腕輪、腰飾りが出土している考察は、現在も議論がなされている。

これ等の大陸との海の道交流は、『続日本紀』などから、渤海国からの使者が漂着した記述があるように、直線距離の近い沿海州から、北海道道南地方や北陸地方にやって来ていたことが歴史的に分かっている。

縄文時代の交易・交流行動は現代人が想像するより、はるかに航海術が優れた情報を持っていたようで、環日本海から中国・韓国・沿海州の国々の情報を持っていなければ、渡海してムラムラへ来ることはできない話である。

これ等の宝玉の品々は、交易・交流によって、他のクニ地域集団からの贈り物とも考えられるが、縄文人(大陸側の人)もは舟を操り、日本海渡海を繰り返して交易・交流を行い、複雑な情報網を作り上げていたと考える方が自然である。大陸からの文化の伝播ルートも、南方の道、北方の道、日本海經由の海の道が縄文時代を通じて、かなり大規模な交易・交流が充分存在していたと考えられる。

古代に使用された舟を考える

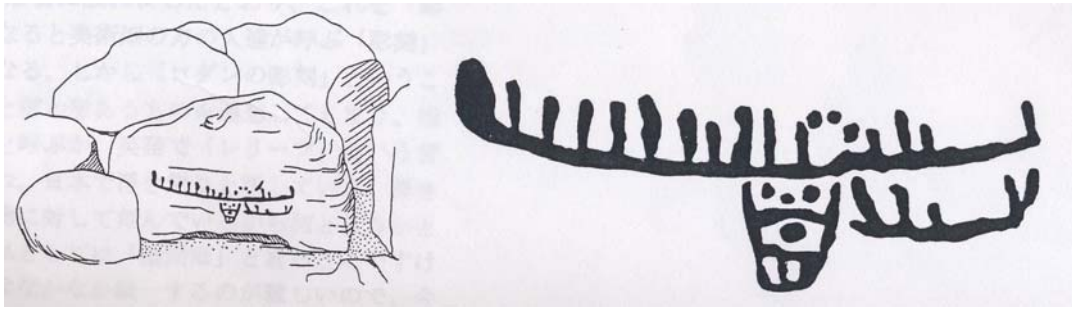


図 28

図 28・アムール河下流域の舟の岩壁画(シカチ・アリヤンの岩絵) (A・P・オクラードニコフ『アムール河下流域の岩壁画』1971 年・「東北アジア史と手宮洞窟」—その歴史的 position 付け—菊池俊彦より



29



30

29・『ムアムール地方の異民族たち・2』フォン・シュレンク著(ロシア帝国の動物・民族誌学者)

30・アムール下流域の民族間による物資輸送の舟か・19世紀後半頃 (ニコラエフスク博物館)

28・シカチ・アリヤンの岩塊絵(約1万3千年前に描かれたもの)で、14～16人乗りの舟の岩刻画である。左右先端部には波返しがついている。右手前に舟のアウトリガーと荷物を積み込む補助カゴのようなものがついている。丸木舟というより、獣皮で製作しているかもしれない。この時代にアウトリガー付きの舟ならば、外洋に充分乗り出せる舟型であろう。菊池氏の舟の解説は「・・・北海道に一番近い舟の絵はアムール河下流域となる。その点から言いますと、どうやらやっぱり“波濤を超えた交流”というのは、あったと考えてよいのではないのでしょうか。・・・」と述べている。

29・19世紀末、レオポルト・フォン・シュレンク(ロシア帝国の動物・地理・民族誌学者 1826－1894 年)1855 年サハリン、アムール流域を探検調査した。晩年のシュレンクはアムール流域の少数民族の研究に注ぎ、特に間宮林蔵の『^{とうだつ}東韃地方紀行』のアムール河流域の諸民族の記事を尊重している。30・アムール河流域における19世紀後半に民族間の物資輸送に使われた舟と思われる。

★シーボルトの『日本』の第7章に、間宮林蔵の『東韃紀行』と『北夷分界余話』はドイツ語訳とその注釈がある。林蔵の報告はドイツ語訳により、世界に紹介され現在も外国の研究者に愛用されている。

鳥浜貝塚の栽培植物からみる日本海の交流

福井県若狭湾の中央部に名高い三方五湖があり、三方湖の河口付近で発見された鳥浜貝塚となる。この遺跡は、縄文草創期から晩期にかけての定住性の高いムラ跡となり、この遺跡からは丸木舟、石斧の柄、弓、容器、編み物、縄、漆櫛^{うるしぐし}等の他、各種の植物の種子が良好な状態で数多く発見された。ヒョウタン、リョクトウ(緑豆・もやし豆)、シソ、エゴマ、カジノキ、ゴボウ、アサ^{たいま}(大麻)アブラナ類の種子も発見されている。

エゴマは食料とも考えられるが、縄文前期(6千年)にはじまった櫛や盆状容器などの漆加工製品にエゴマ油として必要とされている。即ち漆精製のさいに混合剤としてエゴマ油が使用された可能性が高く、漆漉^{うるしこ}し布(漆を漉すのに用いる和紙)が出土した金沢市米^{よないずみ}泉遺跡(縄文後期～晩期)らにおいても、エゴマの種子が発見されている。シベリア、中国東北部など日本海の対岸地域から、アサやゴボウ等の種子の移入^{いにゅう}が認められ、大陸の地域からは人の往来もあったことが分かる。

使用された丸木舟は数人が乗れる帆のない舟であろうが、海流を巧みに利用し、陸地伝い(対馬・壱岐島)に日本海沿岸にたどり着くことは可能であった筈だ。アサやエゴマ、リョクトウ、ヒョウタンなどの栽培も行われていた可能性は高い。



石器原材料を丸木舟で運ぶ 図③⑩



図③⑪

③⑩・若狭三方五湖の石器原材料を丸木舟で運ぶ図

③⑪・バイダルカ、(カヤックに類似)

③⑩・若狭三方五湖は縄文時代草創期～前期の低湿地遺跡となる。近郊の鳥浜貝塚は立地条件が良く木製品・漆製品・縄・編み物等の遺物が良好な状態で出土。頁96の図②③の丸木舟がユリ遺跡から9艘、鳥浜貝塚から2艘出土している。(若狭三方縄文博物館)

③⑪・バイダルカはベーリング海に浮かぶコマンドル・アリューシャン列島のアリュート民族は、ラッコ、アザラシ、トド等の海獣狩猟を生業とし、「バイダルカ」(アリュート人が作るカヤック・ロシア語)と呼ばれる皮舟を使い、巧みな操縦技術を持ち、1人～3人乗りがある。この舟は明治8年、樺太・千島交換条約締結の際、千島に赴いた開拓使黒田清隆が新知島で収集したもの。(函館市北方民族資料館より)

アイヌの丸木舟について カヌーを作るには、1つ目の方法として、先ず始めに杉材等の大丸太半割りして削り掘りし、船体になる凹みに水を目いっぱい張り、その中に熱した玉石を投げ入れ、沸騰させ、熱水は木質を軟らかくして削り掘り進める方法。2つ目の方法は、玉石を焼き玉にし、直接に凹み船体に入れ、木質を焦がし、木肌が軟らかくなったところへ、石斧で削り掘りをする。出土した丸木舟の船底に、焼け焦げた跡が残っているからである。アイヌの丸木舟は、木の皮(シナノキの樹皮繊維)から編んだ紐^{ひも}で、厚い板を左右の舷側^{げんそく}(ふなべり・側面)に結びつけ、高波にそなえて舟より高い波避け^{なみよけ}をつけていたらしい。アイヌの交易舟類は50フィート(呎/30、5cm)あったらしく、樺太やアリューシャン列島までの渡海に使われていたという。



図 ③②

③②・丸木舟をつくる想像図



図 ③③

③③・丸木舟の実験考古学的復元・若狭三方縄文博物館

若狭三方縄文博物館では丸木舟の復元に、若狭三方縄文博物館と首都大学東京考古学研究室とが協同作業し、鳥浜貝塚・ユリ遺跡からの出土モデルを元に、直径1mの杉原木を石斧による伐採には4日間かけ、約1年間(乾燥期間を含む)かけて丸木舟を仕上げ、一連の延べ日数は42日間かかったそである。そして、三方湖に無事進水し、十分実用に耐えることを証明したとある。

結論として・・・手宮洞窟・フゴッペ洞窟刻画人は何処から来たのか

手宮・フゴッペ洞窟人は、大陸から渡来人と推測したことに因り、この結論を求めて、彼方^{あちら}こちらと外国の岩絵や、縄文文化について遠回りをした見聞となってしまった。筆者においては、本当に大陸と日本海沿岸への渡海の裏付けが欲しくて、いろいろと縄文時代早期・中期・晩期における歴史の流れを拝見してきた。丸木舟等については各民族の改良舟があったことや、沿海州地方からサハリンを経由して北海道への渡海は可能であったのか、又、その逆に北海道・東北地域からの大陸やサハリンへの渡海(宗谷岬からサハリンの距離は43km)は可能であったのか、この辺の確証を求めて、

執拗にその時期の交易・交流の裏付けを探し求めた次第である。読まれた方々には、岩絵と縄文時代文化の関係が、鼻についたかも知れませんが、御容赦いただきたい。そして、更に、洞窟人の祈り、シャーマン文化を少しでも他からヒントを見出し、洞窟壁画人の文化を理解しようと試みたのである。

第1章で述べたように、手宮洞窟刻画、フゴッペ洞窟壁画は、今より2000年～1500年前となり、紀元1世紀前後の時代となる。手宮・フゴッペ刻画人たちは、続縄文文化人と稲作農業文化と、その時代を共に生きていた時代と重なる訳である。その頃、青森の三内丸山集落のムラは崩壊間もない頃と思われが、その同時期では北九州や近畿地方において、弥生稲作農耕文化が盛やかな時代になっていたのである。しかしながら、東北地方から北海道道南部は続縄文文化を継続し、日々の生活を狩猟採集で暮らしていた。そして、北海道では7世紀頃まで「続縄文時代」が続き、続縄文の人々は、狩猟や漁労を中心に堅穴住居に暮らし、ソバ・アワ・キビ・ヒエ等を栽培していた。続縄文文化は経済力の蓄積には弥生文化に差をつけられた歴史となるが、下記の③④・③⑤の写真を拝見すれば、その続縄文文化の遺物の精巧性に驚くのである。



熊が彫刻された骨角器

③④



鹿角製の銚頭

③⑤

③④・熊が彫刻された骨角器(祭祀道具)

③⑤・鹿角製の銚頭(『謎多き古代史をめぐる』)

③④・北海道南西部に広がった、続縄文恵山文化を代表する祭祀道具。動物の骨や角から作られており、上部に緻密な熊の彫刻が施されているのが特徴である。因って、アイヌ・和人に近い人々の続縄文文化が冴え渡っている事を理解するのである。

③⑤・同じく続縄文恵山文化の代表的な狩猟道具はオットセイやイルカの漁に用いられたと考えられている。鹿角加工部の返し部分が細かな彫刻文様が美しく、銚の漁労

に用いる刺突具、柄の先に固定して槍のように突くものと、柄がはずれ紐をたぐり寄せる回転式の銚らがある。銚頭が海獣に突き刺さり、柄が外れ、イルカ等海獣捕獲の紐を引く漁労民族の喜びとエネルギーが伝わってくる。恵山文化は1953年、白老アヨロ遺跡等の発掘により確立をみる。（『謎多き古代史をめぐる』笠倉出版社より）

この縄文時代の最晩期頃、大陸から新天地を求めて先住渡来民の小集団が、沿海州から樺太を経て北海道の西海沿岸を下って小樽地方やって来た。その民族は、シャーマン信仰をもつ民族であり、北海道道南部に居た続縄文文化のアイヌ系民族間の宗教思想はかなり異なっていたことにより、地元民アイヌ等との小競り合いがあったかも知れない。が、シャーマン信仰文化の渡来人たちは、道南周辺に新天地の確保に懸命な行動を起こしていたことを想像できる。この渡来民族たちが小樽地域のムラを獲得に乗り出していたのではないか。在住の続縄文文化の和人・アイヌをも巻き込み、縄文土偶信仰からシャーマン信仰に改宗する信仰改革のムラをめざし、続縄文の狩猟採集民にシャーマン文化を広めていた一時期が存在したと考える。



余市海岸・フゴッペ洞窟前のフゴッペ岬・この近くには西崎山環状列石、忍路環状列石がある

その頃、三大丸山崩壊し、気候変動による急速に狩猟採集は弱まり、各ムラの首長の権力も衰退し、縄文土偶文化の霊力が弱まった時期を迎えたと想像する。土偶信仰よりも新しい霊力を引き出すシャーマン信仰に、希望と情熱に期待を示し、手宮・フゴッペ洞窟の刻画人たちは、祭祀祈願の聖堂、フゴッペ洞窟にムラの民を集めてその威力を示し、小樽地方での橋頭保^{きょうとうほ}を築き、小単位の民族の興亡史を刻んだことが充分考えられるのである。と考察するのが筆者の洞窟刻画人の仮説である。

手宮洞窟・フゴッペ洞窟陰刻画の描かれた「有翼人」、「有角人」の姿は日本の縄文

文化の流れではない。この洞窟刻画のシャーマン信仰を祀っていた洞窟人は、ある時期に何かの事情が発生し、シャーマン信仰をこの地域に広めることはできなかった。それは本州からやって来た弥生文化の稲作農業の神々は強大で、シャーマンは玦状耳飾りや硬玉製大珠をつけて霊力を強く示したが、東北地方の狩猟採集文化民族の人々(蝦夷)は、大陸から渡来 of シャーマン信仰思想に違和感を持っていたのであろう。結局は受け入れられず、稲作農耕神に降参して逃げ出してしまったのであろう。

最後に、では小樽地方にいた洞窟刻画人は何処に消えたのであろうか。おそらく、アイヌ民や和人(蝦夷)に同化し埋没していったのであろう。その痕跡は、マンガ的であるが、秋田県男鹿半島の“なまはげ”伝説モデルの一つの本になっているのではないかと秘かに想っているのである。

紀元前3世紀～紀元後3世紀頃には、弥生水稻耕作文化が北海道、沖縄を除き、北九州、四国、山陰方面、東日本を席卷し、やがて、東北地方へ稲作農耕は北上してきた。この稲作文化を牛耳っていたのは、西からやって来た渡来人たちで、やがて、水稻農耕ムラの“族長”となり、その経済力を基に稲作集団を大集落の「環濠ムラ集落」(吉野ヶ里遺跡等)を続々と建設して行くのである。そして、その集合体に小さなクニが生まれ、それは縄文時代繁栄のムラ規模を超え、集落の周りに濠をめぐらせ、更に高台に屋敷集落(山城等)を作り、クニの様相になってきたのである。

1世紀の中頃、「漢委奴國王印」(金印・国宝・福岡市志賀島で発見)が、後漢の光武帝より建武中元2年(西暦57年)、奴国からの朝賀使へ(冊封の印として)賜った印がこれに相当するとされる。3世紀前半には、邪馬台国女王(卑弥呼)が魏に朝貢し、倭国王であることを示す、親魏倭王の金印を授けられた。やがて、卑弥呼の流れをくむ「大和王朝」が、蝦夷征伐に、北へ北へと昇ってくるのである。

—終—

追記・・・1世紀初めの国際関係をみる

『後漢書』の記事《・・・建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭国之極南界也、光武賜以印綬、安帝永初元年、倭国王帥升等獻生口百六十人、願請見・・・》と見える。(『後漢書』倭国伝より)

訳・「建武中元二年(57年)、倭の奴国が謹んで貢献して朝賀した。使人は大夫を

自称する。倭国の^{きよくなんかい}極南界なり。光武帝は印綬を賜る。安帝の永初元年（107 年）、倭国王が帥升らに奴隷百六十人を献上させ、朝見（天子に拝謁する）を請い願う」。

志賀島より出土した国宝「漢委奴國王印」^{かんのわのなのこくおういん} 実物は福岡市博物館蔵。金印の 5 文字をどの様に読むか、結論はでていないが、「カンのワのナの国王」と読み解くことが多い。



漢委奴國王印・約 23、5 mm 正方形、高 22、4 mm、重 108、7 g・珠印・志賀島周辺地図の中央が「奴国」となる。（志賀島史料館より）

現代解釈・「建武中元 2 年に倭の国^{わのくに}奴国（博多）より朝貢にやってきた使^{つか}人^{じん}は自らを太夫^{たいう}といい、倭国は南方にある。後漢の光武帝（初代）の時「漢委奴國王」の金印を贈られた。後漢の光武帝は倭国入口、博多の首長に大表者を選び、倭国に交易に来ている中国華僑^{かきやう}の保護育成と代表権を任命している。漢委奴國王の出現は、日本列島の倭人の社会が、王国を戴く国家組織まで成長しているわけではなく、これは光武帝が後漢再統一に先立つ 20 年に渡る国内の戦乱によって、中国の人口が 6 千万から 4 分の 1 の 1 千数百に激減^{らくろうぐん}していて、楽浪郡（朝鮮半島の南西）が倭人の百余国の交易管理が出来なくなり、後漢の撤退処置の考えであった。そこで中国華僑の管理（人）を守るために、倭国の博多の奴国に、中国名誉総領事の資格を与えられたのが奴国であった。

後漢の初代光武帝から 4 代和帝までの間、中央アジア異民族が^{ことごと}悉^{そむ}く叛き、帝内は権力闘争に明け暮れていた。内外の政治問題に打開策を打つために、友好国の倭国に、金印の紫綬^{しじゆ}の漢委奴國王に働きかけて、奴国の友好使節団を楽浪郡へ表敬訪問させたのである。やらせのショーであった。」

『後漢書』の「考安帝紀」（本紀巻 5・和帝）107 年、「倭国が使^{つか}を遣^{はな}わして奉納^{ほうねん}した」と云々とあり、同「東夷列伝」（列伝・巻 85）に「倭国王帥^{すいしやう}升^{せい}らが生口^{せいこう}（捕虜又は奴隷）160 人を奉^{ほう}じ、請見^{しょうけん}（面会）を願った」との記述は、この朝貢は倭国王自身が中国を訪問し、鄧太后政權（和帝妃 80～121 年）に敬意を表敬したいと申し出させ、倭国側にその朝貢の動機があつたわけではない。107 年の請見は倭国使節団の朝貢の真相となる。（『倭国』岡田英弘著・中央新書参考）

むすびにかえて・縄文の旅

小樽の手宮・フゴッペ洞窟陰刻画は、今から 2000 年～1500 年前に刻画された。縄文時代は約 1 万 5 千年前から約 2300 年前となり、その縄文晩期は日本列島に、今から 3000 年～2300 年となる。縄文時代晩期の終焉した 300 年後に、小樽洞窟刻画人が活動したのは紀元 1 世紀の初頭頃となり、その時代を感じられる縄文の旅をした。

縄文晩期は弥生時代(前 300 年～300 年)に少しの時代が重なる時期が考えられるので、手宮・フゴッペ洞窟陰刻画人たちは、縄文中期・晩期・弥生時代の初期の何かの文化の影響を受けているのではないかと考え、執筆途中に岩手・青森・秋田の縄文遺跡を見聞することにした。しかしながら、手宮・フゴッペ洞窟陰刻画人たちの直接の影響を受けている縄文文化・農耕文化を受けていると思われる土器、土偶、生活用具等を概観する限りには、その確証を見出すことはできなかった。ただ現在の時代が続く縄文文化の臭いがするものが、あるか否か、この辺を探って写真を撮ってみた。



①



②

①ナラ・ブナ・クヌギ落葉硬葉樹林 ②シナノキ(シナノキ科シナノキ属)の樹皮繊維干(御所野遺跡)

御所野遺跡でナラやブナから縄を作る技法が分からないので手紙で訊ねたところ、御所野縄文博物館より次のように回答があった。「縄文時代の縄は全国的に出土例が少ない。御所野遺跡では復元竪穴住居の修理に使う縄は「シナノキ」(この辺ではマダと呼ぶ)の樹枝からそいだ繊維で作っている。屋根材はクリの樹皮となり、建物はクリ材を主に用いている。焼けた住居跡から樹皮や小枝が多量に出土したことにより、枝や樹枝も屋根材に使っていたことが解った。おそらく、集落の周辺にはクリを植えて、きちんと管理していたと考えられます。」との回答でした。

資料に「シナノキの“なわなう”(縄縄う)の工程は、1、皮をはぎ 2、水浸け 3、繊維取り 4、乾燥の作業工程となる。住居のクリの柱とタルキを縛るのは、シナノキ縄が良いということです。」とありました。(一戸教育委員会・御所野縄文博物館より)

「シナノキ」を調べてみると、「シナ」とは、アイヌ語で「結ぶ、縛る^{しば}」の意となるらしく、この木をアイヌ語で「ニベシニ」といい、「縛るもの」という意味となるらしい。縄文中期に人口が集中したムラ、「信濃」の地名は“シナ野”に由来するとある。その他では「クズ」(根から葛粉^{くずこ}の漢方薬)の樹皮を使い、紐類^{ひも}に使われたようで、その縄文の伝統は大井川・掛川手織り葛布^{くずふ}は、絹や麻にない渋みのある織物となっているという。★縄文建築は地域により異なるが、ホゾ穴(柄穴・縦柱に穴を開ける)に横木を差し込み固定する。その他の栈木はシナ縄による縛る結束組み立て建物となっている。



図③



図④

③屋根材クリの樹皮・一戸町御所野遺跡 ④奥の家は竪穴式住居、手前は夏用、屋根材クリ樹皮

ナラは、ブナ科・コナラ亜科・コナラ属・コナラ亜属は落葉広葉樹の総称で、この落葉広葉樹にはドングリの実がなる。ブナ科コナラ属の落葉広葉樹のコナラはクヌギより寒冷気候を好み、北海道・樺太等に分布している。ミズナラのドングリはタンニンを含み、灰汁抜き^{はいあくぬき}して食用にする。縄文時代は東日本がブナ林の大分布域となり、主食料用となっていた。現在ではコナラの原木はシイタケ栽培に利用されていることをみると、縄文の時代もシイタケを食べていたと思われる。



⑤左よりハシバミ実・クルミ・トチ・ドングリ・クリ・乾燥ゼンマイ、^{かつのし}鹿角市大湯環状列石館より

⑤・植物や木の実については、縄文時代は植物採集の先進地である秋田県鹿角市大

湯環状列石遺跡地方は奥羽山脈の麓で産出し、日本海より遠く離れ、植物採集の食文化の先進ムラ地域と思われる。上記の写真の如く、堅果類^{けんか}(かたい殻を持つ実)が主であると推測され、とくにドングリ類の比重が高く、トチとドングリはアク抜きして食用に、ドングリ類のアクは水溶性なので、加熱と水さらし、繰り返しアクを抜く。トチの実^みは非水溶性で、灰がアク抜きに用いる。とある。

縄文遺跡からのソバの花粉 日本列島での縄文時代後期には、島根県^{とんぼらちょう}頓原町(1万年前)や高知県佐川町(9300年前)、埼玉県さいたま市岩槻区(3000年前)、青森県^{たっこまち}田子町等で、ソバの花粉や炭化したソバの種子が出土している。

それでは「ソバ」は何処からやって来たのか問えば、ソバの野生種は中国南部の四川省、雲南省とされ、最近の研究によればソバの起源地は東チベット・雲南省の境界地域が起源地される。更にネパール・インドヒマラヤ山岳地帯に特定されている。現在はこの広範囲の地域がダッタンソバの起源地となり、その起源地からシベリア・バイカル湖周辺地・中国東北部・アムール上流沿岸等に持ち込まれ、栽培されていたらしい。それでソバ産地は、バイカル湖周辺という第2の原産地名になったようである。とすれば、モンゴロイド・ブリヤード人たちによって、日本列島へ持ち込こまれたソバは、日本ソバ説の正統が成り立つではないか。

原産地はともかく、この遠方地からソバの種は、縄文時代の12500年前～5000年前より早く、日本列島に到達しているのである。ソバはご承知の通り寒冷地や荒れ地など土壌を選ばず、3カ月で収穫ができ、凶作時の食べ物として歴史的な大飢饉に祖先たちの飢えを救ってくれた救済的な食物である。因ってソバは縄文時代のかなり早い段階から存在していたことが確かである。



⑥・石皿・磨石^{すりいし} 埼玉県坂戸市多和目出土・『日本の考古ガイドブック』東京国立博物館 ⑦・ソバの花

ソバと焼畑農業関係 岩手県岩泉^{いわいずみ}民間伝承会が編集した『ふるさとノート』に、

“「カノ」とその周辺”という論文に、「カノ」というのはいわゆる焼畑農業である。焼畑はすでに縄文中期に行われており、アイヌ民にも残っていた農業である。この岩泉地方が本格的に稲作農業を行ったのは、実に昭和50年のことであるという。この地方の人たちは農業といっても、畑作農業に加えて昔ながらの焼畑農業を行っていた。

山を焼いて、その灰の上に種を撒いて、ソバ・アワ・ヒエ・大豆・小豆を栽培する。だいたい栽培が一周りするのには3年か4年で、その年によって種を撒く作物は異なるが、1年目がソバ、2年目がアワ、3年目が大豆・小豆の組み合わせが多く、このような農業を山地の人たちは、縄文時代から最近まで続けてきた。(『日本の深層』梅原猛著「6章「火」と縄文文化」より)

食べ方はソバを粉にして、おそらく練りダンゴにして、炉端の灰の中に投げ入れて灰焼していたか、縄文土器で山菜と煮込んで雑炊で食していたのであろうか。

日本人は6世紀初め頃に仏教と共に日本にやって来た、味噌・醤油の味文化を身につけ、更に北海道のコンブや、四国九州のカツオダシと調合して、究極の日本の味、即ち、“ソバつゆ”にして、我々は現在もソバを楽しんでいる。歴史的にはソバは五穀でなく雑穀に入り、古来より神仏修験者らが五穀断ちをし、神仏に仕える身をソバ食で修行に励んだ歴史を持っている。ソバは、縄文の時代から現代まで霊山宿坊において修行僧の神仏に仕える食事となっていたのである。

秋田県鹿角市・^{おおゆ}大湯環状列石には万座環状列石と中野堂環状列石を概観する



⑧



⑨

⑧・万座環状列石には109基の墓があり左奥に柱立てある ⑨・中野堂環状列石には61基の墓

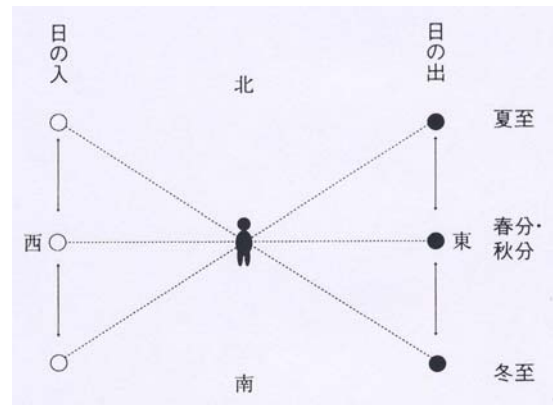
万座環状列石は2重の環状(円)ができていて、外側の大きな円を「外帯」、内側を「^{がいたい}内帯」と呼び、外帯は52m、約5000個の石組で作られている。道路を挟んで中野堂環状列石があり、2重の円で作られ、直径44m、約2000個の石組で作られている。

中野堂にある日時計 東北地域に見られる環状列石(ストーンサークル)は、東北地方の遺跡に多く見られる。お墓や祭り事の特別な祭祀の場所であったと考えられている。大湯環状列石遺跡は大きな2つの大きなストーンサークルの周りに、10数個の円形の石の寄せ集めてある所がお墓となっている。ストーンサークルの万座環状列石には5000個、中野堂環状列石には2000個の石が、7Km離れた安久谷川より、縄文人たちが、人力によって運び込まれた石となる。図⑩・縄文時代において、現代生活と同じ春分、秋分の季節にお墓まいりをして、1年のコヨミの生活をしていたのである。

(『大湯環状列石ガイドブック』秋田県鹿角市教育委員会より)



⑩



⑪

⑩・万座環状列石にある日時計組石墓がある

⑪・日時計状組石の日の出、日の入り概念図

図⑪は「二至二分(夏至と冬至、春分と秋分のこと)の日の出・日の入り概念図」となる。

日本列島での日の出・日の入りの方向は、夏至(24節気の第10・北半球ではこの日が1年のうち最も昼時間が長い)で、北方約30度、春分・秋分では真東・真西となる。

冬至(1年中で太陽が最も南に寄り、北半球では昼が最も短い日・12月22日頃)では南方約30度となる。夏至はもっとも日照時間が長く、冬至は最もみじかい。

二至二分 太陽は春分と秋分には真東から上り、真西に沈む。春分をすぎるとその方位は次第に北寄りにずれてゆき、夏至には北の限界に達する。夏至の後には南へと戻って秋分の真東西軸に至り、その後、日毎に南傾しながら限界に達して冬至となる。縄文の東西は春分秋分を中心として、北と南にそれぞれ約30度ずつの振幅、即ち、東北東=西北西および東南東=西南西の約60度を揺れ動く。そしてその時々の日の出、日の入りの東西軸に直交して南北軸が決定されたとみることができる。その実際は、ムラが定点観測の観測基地となり、山並みのシルエットを陸上の目印にして、日の出、日の入りを重ね合わせて、まずは二至二分を基準として春夏秋冬の移ろいを

正確に認識するとともに1年間の縄文カレンダーの節目を刻むことができたのである。

(『世界遺産・縄文遺跡』小林達雄編著・同成社・2010より)

大湯遺跡の5本柱建物と真脇遺跡環状柱列 柱立て建物では青森三内丸山遺跡に6本柱跡クリ柱立ては日本最大となり、建物、望楼、見張り台等の説がある。

図⑫・秋田県鹿角市大湯環状列石に「5本柱建物」跡があり、周りには20cm余の小柱で囲み、東側が入口のように開き、5本柱の中心は火を焚いた痕跡が残り、土器や土製品、石製品が出土し、御柱の上には建物構造の有無については解明されていない。

図⑬・石川県能登町真脇遺跡の謎の環状木柱列である。木柱根群は巨大なクリ材の半割柱を円形に並べた環状木柱列(ウッドサークル)となっている。木柱はクリ、半割柱は丸太の木心をはずすように割られて、割った平面を外側に向けている。柱は10本ないし8本、入口とみられる門扉状遺構で作られていた。この真脇遺跡はイルカ追い込み漁の盛んなムラとなっていたらしい。この遺跡からは膨大なイルカの骨が出土したことから、イルカの霊を送った儀礼場の説が有力となっている。



⑫



⑬

⑫・5本柱建物跡・周囲に20cm小柱を巡らす ⑬・柱列は8本柱・『真脇遺跡』能登町教育委員会

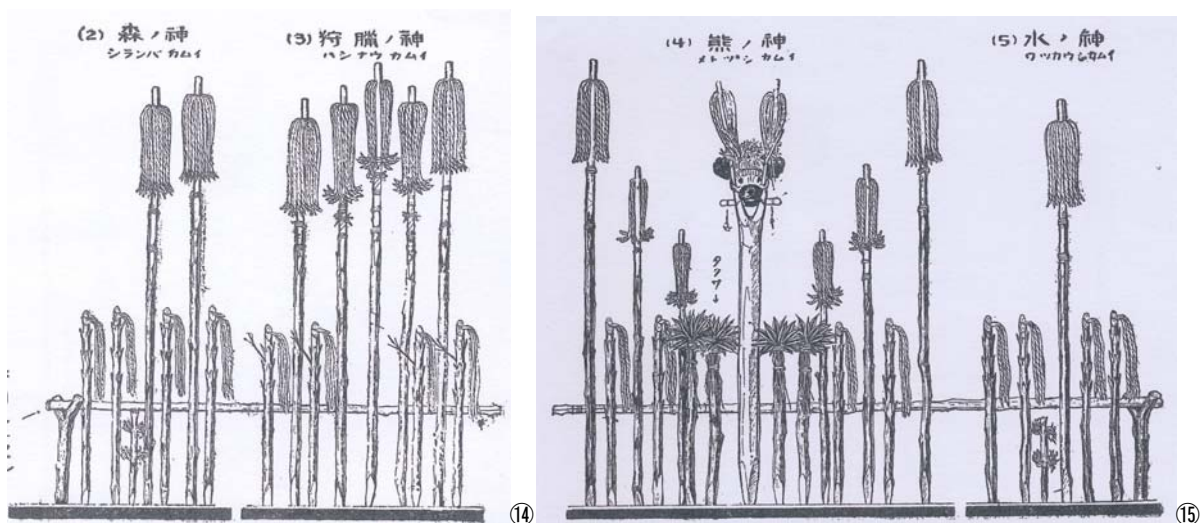
柱建物について、現代流に考察すれば、伊勢神宮(式年遷宮)の20年に一度の建て替えは、神社建築の技術を後世に継続維持のためという。有名な長野県諏訪大社の7年ごとに山から檜柱を引く御柱祭は、縄文文化の継承と思われる。

式年遷宮の20年ごとに社を建て替事業は、社建築技術(建築棟梁が生涯で経験できる1度から2度の年数)が失われないうちに、その事業を繰り返し、次の代に引き渡す作業となっている。諏訪の御柱は縄文時代よりクリ柱が腐らない年月が7年と予想され、又、腐りかけた御柱は不敬となり、神様や祖先の霊が降臨に差し障りがないように建て替える伝統であると推測する。

『日本の深層』「白木崇拝の意味」について次の様に述べている。

《・・・白木が霊の“よりまし”（憑坐・神霊が取りつく）であるとすれば、日本人の心に潜んでいる白木にたいする崇拝の心もよく理解ができ、伊勢の内宮の御遷宮は、心の御柱を祀ることからはじまる。諏訪の御柱の祭りも、白木の柱を神社の四隅に建てる祭りである。北陸のチカモリ遺跡（金沢市）や真脇^{まわき}遺跡から出てくる巨大な白木の柱に囲まれた環状も、神聖な神の場所と考えられていたことはまちがいない。日本人の感じる白は、死の色であると同時に神聖な色であり、それはまさに霊の色なのである。そう考えると、縄文土器の文様は、白木を削って縄にしてその文様を土器の表面にすりつけるのである。それは「シランパの神」（アイヌの神・全ての生命の源）を土器に抽入することであろう。・・・》と考察している。

アイヌイナウ(削り花木幣)・熊祭に於けるイナウの配列 於日高国沙流郡平取村^{にぶたに}二風谷



⑭・(2)森ノ神、(3)狩獵ノ神

⑮・アイヌのイナウ・(4)熊ノ神、(5)水ノ神

図⑭の(2)森ノ神・シランパカムイは「地を所有する神」樹神また森の神。この神は人間界へ現れる時は鳥の姿で来るといふ。(3)狩獵の神・解説不詳。

図⑮(4)熊ノ神・メトツシカムイはアイヌの熊祭りをを行うとき、その熊の頭骨を背戸の垣根へかけて置く。漁獵の獲物を^{つか}とるときに中央に熊頭神を配して、その両側の左右に熊笹を束ねた棒はタクサイナウ(手草幣)である。(5)水ノ神・ワッカウシカムイは水神で、3人の女神となり、河口の神、瀧の神、水汲場の神となる。

(出典は『アイヌ芸術』金田一京助・杉山寿栄男著・北海道出版企画センター 昭和17年の復刻版より)

万座環状列石と三大丸山掘立柱の遠望



⑬大湯環状列石跡広場の左奥に5本柱立てが見える、手前掘立小屋は一族の宴会場となっていたのか



⑭・山内丸山遺跡・直径1mのクリの巨木を使った6本柱跡より復元・『三内丸山遺跡』東奥日報社

縄文の循環という思想 大湯環状列石はこの地域の死者を仏教的に言えば、「供養」する場所であったことが分かる。自然は1年間の繰り返しを春・夏・秋・冬と間違いなく循環していることを縄文人は肌を感じ、一日に於いては昼と夜が循環し、生死の循環と考えていたであろう。朝太陽がのぼり、夕べには太陽が沈むことは太陽が死の国に行く、朝になれば死の世界から復活する。いっさいの生きとし生けるものはこういう生死の繰り返しているのだ。と云う生死の認識を確認していたからこそ、このような大湯ストーンサークルが、人里離れた山奥に造られていたのであろう。

現場での大湯ストーンサークルの感想を言えば、この場所は縄文人たちが、祖霊と死者をあの世に送迎する聖なる場所であったのであろう。白い御柱立は、死者が故郷に帰って来る時には、その御柱は目印となり、地上に降りる場所が判るようにしていたのではないか。直近の死者を見送る時は、高い新しい柱から天に上って行き、死者が帰ってくる時は御柱から下りてくるのである。

そして各一族たちが小屋に集まり、歌舞を捧げ祖霊に喜を与える霊場であったことが分かる。その証に石の匙^{さじ}や土製品のキノコ、酒器の土器が多く出土し、図⑬の奥左に立て柱が独立して建ち、手前の掘立小屋は一族の祖霊を“おもてなし”の宴会場が

あることが分かる。現代の我々日本人の精神思想と全く同じであることを痛感する。

大湯ストーンサークルから出土したもの ⑱・土製品の本物類似のキノコは祖霊に食べ物を供えたと考える。⑲・食事用に石さじ(いろいろな作業に使える)を祖霊に供えたものと、各自の宴会使用したものもあろう。大湯環状列石からは、日常生活用品でなく、祖霊と出合いに喜んでもらう祈りと祭りの広場であったことが分かる。



⑱・キノコ形土製品を霊に供え ⑲・石匙(食器) ⑳・土版・目と口と体、人間の表現か

⑳左の土版に下に1口があり、2目があり、3つの左頬に、4つの右頬にある、胴体の縦穴の5つがあって、数えれば1から5まで数が数えられる。右側の裏面には3の穴が2つあって、計6となり、1から6までの計算が子供に親が教えるために作ったものか、祖霊の数、天に昇っていった人数なのか。(『大湯環状列石ガイドブック』より)

男根崇拜信仰 土偶と共に縄文信仰を象徴するのが、男性の元気さを表現したとされる石棒である。頭部に膨らみをもつ大ぶりの有頭石棒は、縄文中期初め頃に出現し、中頃に盛んとなり、住居の中や祭壇施設に立てられた状態で発見されている。



⑰・石棒 盛岡市繋遺跡

⑱・石棒類 北山市樺山遺跡

石棒の多くは端が亀頭状に膨らんでいる。祭壇状に組んだ配石遺構から屹立した状態で発見される。おそらく性にまつわる信仰、呪術に関係するものであろう。(『縄文の彩華・中期の技と美』図録・盛岡市遺跡の学び館より)

サハリン・ニヴフ族(ギリヤーク)の村を訪ねる

2012 年 9 月にサハリン中部、ノ

グリキの町(ユジノサハリンス北 613 km)。ニヴフ村の秋のサケの遡上季節に合わせ生活を見聞した。ギリヤーク人は日本が樺太の南半分を統治時代に、日本国家はニヴフ族を日本兵として徴兵に駆り出した経緯がある。徴兵を嫌ったギリヤーク人は、サハリンの北部からアムール河口のニコリスク方面へ里帰りをした人がいた。戦後、北海道に舞い戻った人もいる。サハリンには現在ニヴフ族が現在 4 5 0 0 人位、5 世紀頃から北海道に居住し、犬や豚を飼い、礼文・利尻・稚内・網走・知床半島までオホーツク文化の痕跡を残している。



ノグリキ村・ニヴフ族の家、鮭を干している



朝一のカモ猟で5羽しとめ見せてくれた

サハリンのコケモモ 9月になるとコケモモの実がなり、ジャムやジュースにすると酸味があり、とても美味である。広葉樹林帯からは、春にワラビやゼンマイ等を摘み、秋には木の実、鮭鱒の遡上期にはイトウ、アメマス、銀鮭等の漁猟期となる。



庶民の楽しみは9月にコケモモの実を摘み・ジャムやジュースにすると酸味があり美味

小樽手宮洞窟・フゴッペ洞窟陰刻画人たちはその昔、現在と同じような気候環境の中で生活していたと考える。春になればワラビやゼンマイ等を摘み、秋になれば木の実、秋初には鮭類等の遡上の漁猟に精を出し、冬に熊や鹿や野兎等を狩猟し、1年のコヨミを過ごしていたのであろう。その時代を感じられる写真となれば幸いです。

2017年1月小正月

池田 勝宣